

---

# 魔法少女リリカルなのは チート？当然だろう

Irisvia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは チート? 当然だらう

### 【NZコード】

N5152M

### 【作者名】

Irisvia

### 【あらすじ】

ある日死んだ主人公は神様の前に?好きな作品に行ける?リリなのだろ。未練が残りまくつてるので楽しみます!!原作介入?やりたいところだけ・・・なのに相手がよってくる・・・?主人公最強チート転生物だ!!

## プロローグ 「原作開始まで」（前書き）

実はミスで短編で一回作ってしまいました・・・

なのはマダーや性格違ひ、 は俺の嫁などの理由で認められない方スマセソ。

そもそもテーマの文章が駄目駄目だーといつ方もすいません。

それでもいいとこつ心の深い方ありがとうございます。

感想や指摘があれば言つて下さること作者の糧になります。未熟者ゆえに・・・

## プロローグ 「原作開始まで」

原作介入、アニメや漫画のストーリーを自分の手で崩すための介入だ。

俺は今、真っ白な建物の中で田の前の露のかかつた存在に俺の今の状況、そして今から出来ることを聞いていた

「つまり、死んだら満足するまで遊んで魂をリフレッシュするということ? 永遠に存在できるんだ?」

俺は田の前によくわからない存在に語りかける。姿を認識できないのがすぐ面白い。

「ふむ、儂の姿が人に見えるといつのは実は凄いことなのだが、まあ構わんだろう。ではこの紙に行きたい世界とその世界での能力を考える。まあ、書ける能力は4つだからつまく考えようよ」

恐らく神なのである「いつ」の言つ指示に従う。

神様が日本語? 違うだろ? 後で自分の能力の一いつに加えるから後で説明。誰に? ……多分、読者神だ。

「りりなのがな? 時期は初期より前で。」

何故かと言われば生前の死ぬ前にアニメで最終話まで見ていた作品だからだ。

意外と細かく書ける。というか書くことに必要項目増えてね?  
年齢? ……なのはと同じ。生まれ……地球、海鳴市。好きなキャラ……この子かな? うん? 好きな体型? スレンダー、あと貧乳だろ。

容姿とかは…違和感があるのは嫌だな。俺の昔の姿で。名前はま

あ、神名 かんな 力ナエで。最近使つたオリシヨの名前だな。

能力……ステータス強制最大値。因みにステータスが最強ではなく、例えばHP60で今は3、でも能力使えば60に、て事。即死じゃなけりや死にやしねえ。次に『統一言語』詳しく述べるよで。神様御用達。

次に、道具作成。読んで字の如く。材料無しでも道具作成、知識なくても作成。もしかしたらこれが一番チートかも。

最後に才能限界突破。簡単に言えば鍛えれば鍛えるほど強くなる。鍛えてもどうにもならないものすら鍛えられる。ただし寿命を除く、人間を越える寿命は不可能らしい人外になれば平氣らしいが。他はだいたいいけるよつだ。

「ん？ 一番下のこれは……言えばいいのか？……スタート。」

「お？」

気がついたら周りが住宅になつていて。

「……あつ、リンカー「アあるかどうかわからねえ……」

とりあえず金を作成…かな？ 住むところを確保せねば。

戸籍は、まあ… 最初書いた紙が自動的に用意とも書いてあつたしな。

「表札が神名、だと？」

周りを見ていると家の表札に神名と書いてある家があつた。親切

すゞ...

「とりあえず、無印での介入は学校に留めるか。」  
最初のストーリーは変えるとおかしくなりそうだ。

「あれ？」

声が聞こえて後ろを見ると高町なのはがいた。まだ魔王でも魔王でもないぞ？レイハもないみたいだし。

「やあ、こんばんは。高町なのはちゃん」

自然にフランクに、なるべく明るく話し掛けた。なぜ？なのはが暗いから。

「あ、はい……」近所さんですよね？私、高町なのはつていいます。「おどおどしている。あれ？無印よりかなり前？見た感じ9歳じゃない感じだが……

「引越してきたんですか？」

…とりあえず無印前は確定。介入するのはしばらく後だから途中まではただの友達でいい。

「そうだよ、神名力ナエ。力ナエでいいよ。なのはちゃん、もしかして一人？」

「クンと首を縦に振るのは、可愛いじゃねえか……小さこ子の動きは和みすぎて困る。

「お父さんは病院だし……」

自分の見た目を道路のミラーを見て確認。やはり同じ年のようだ。

「じゃあ、一緒に遊ぼう」

「いいのー？」

なんか、頭の束ねている髪が動いたような気がする。

「いいよ、今は友達がいないから寂しかったし……」  
嘘ではないし何よりこの歳で一人は辛いと思つ。

「ただし、明日からね。家は見ての通りここだから明日来てよ。夜

も遅いし」

何故か夜にこの世界にきたようだ。お陰でなのはには会えたが…

「どうか、え？なに、この時間まで一人でいたのか？」

「うん！明日、遊びに来るね！」

突然ハイテンション、まあ裏表が無くていいか。

「じゃあね、なのはちゃん」

「うん！バイバイ、カナエちゃん！」

なるほど、警戒心がないわけだ。

「なのはちゃん。男だよ、俺。」

「ふえええ！？」

スッゴク驚かれた。まあ、よく間違えられていたから怒る気もな  
いけど。

「道具作成」

言つて目の前がゲームの画面のようになつた。

「喋らなくちゃいけないのか…？」とりあえず、フュニックスの尾と  
ワープの杖を生産

俺はなのはと別れた後、家に入りこれからの準備を進めようとし  
て机の上に本が置かれていることに気付いた。

本の題名は“能力の使い方”ナメているのか？

「最後にデバイスを作らなくちゃな…レイピア型にしようかな…」

好きなのだ、レイピアが。題名は兎も角、中身はまともだった本  
を片手に能力を使していく。

「もちろんインテリジェントデバイスだな。」

独り言にしか聞こえないような気もするが今は誰も見てないから良しとするか。

「作成」

その一言と同時に杖と尾羽と十字架が付いた銀の指輪が出て来た。

『主、私の名前と貴方の名前をお教えください。』

紳士的な男の声が聞こえる。統一言語便利だな。聞こえている言葉は英語だが理解するときには日本語で直ぐさま変換されている。

「ああ、お前の名前はキャリースロウだ。」

『キャリースロウ、わかりました。意味は貫徹としましたが…』

キャリースロウのいう通り俺は俺の道をいく為に相棒となる『バイスの名前を貫徹、つまり最後まで己の信念を貫き通すという意味をつけてた。

「俺の名前は神名力ナエだ。共に来てくれるか？キャリースロウ。『当然です、我が主。私の存在意義に賭けて主と共にあらんことをここに誓います。』

キャリースロウが点滅して答える。つか指輪が点滅？

「バリアジャケットを展開してみるか…」

『わかりました、主。始めてもらつて構いません。』

キャリースロウを中心に光が溢れる。

「セットアップ」

『レディ』

光が意識を包み込んだ。

「つて、うわつ！？」

ガバッと倒れた体を起こす。何があった？

『主、申し訳!』『せんせん。主の魔力量ではどうやらバリアジャケットの展開ができないようです』  
なるほど、弱すぎと。

「じゃあ、簡単な魔法から教えてくれ。練習量は増やせば増やすほど強くなるし。』

『しかし、主。危険と判断した場合、止めさせてもらいます。』

ああ、どうかキャリースロウは知らないんだった。

「大丈夫、希少技能だから」

『どのような…』

「体力回復、まあ努力するには最適かな?』

『了解しました。』

俺は無印の間はほぼ修業に時間をあてる気だ。A、Sですらまと  
もに参加する気はない。

『では

8

ピンポン

家のチャイムがなる、どうやらおまじのようだ。

「今日の練習はここまでだな。』

『了解です、主』

俺は庭から玄関に向かつて歩いていく。家が3階建てで庭付きと  
わかつて最初は驚いて変にテンションが上がったが今は寂しいだけ  
だと気が付いた。

ガチャ、と扉が開く音を聞きながら外を見る。

困った顔で笑みを浮かべているのは、どうしたんだろう?

「お、おはよう。カナエ…くん。」やせは…」

「どうやう間違えたのを未だに引きずつていいようだ。」

「うそ、おはよう。なのはちゃん」

「…」と笑う。となのはが自分の頭を見ていたことに気付いた。

「どうかした？」

「へ、ううん…さ、綺麗な髪だな…つい、昨日は夜だったから気付かなかつたや」

……少し嬉しかつたのは、俺が昔母親に言われていたことを思い出したからなのか。

「ありがとう、母さんにも褒められたのを思い出したや」

俺の髪は真っ黒の腰よりやや上にまでのばしたロングストレートだ。この髪と母似の顔でよく女と間違えられたものだ。

「やうなんだ、お母さん」…あれ? カナエくんお父さんとお母さんは?」

なのはが首を傾げて家を見る。

「うん、今は少し遠くに出てこるんだ(ある意味本当)。だから今は俺一人。」

「え? そうなの? 大丈夫?」

そのなのはの優しさに感動した。とこつかやばい、涙出やつ。

「うん、大丈夫。よくあるからね。」

曖昧な言葉で濁す。とこつか親いなくちや学校に行くの難しいんじや?」

「じゃあ、遊びに行こうか? なのはちゃん」

俺は笑つて少し沈んだ空気を取り払つよひに家から外に出た。

「うん! カナエくん、遊びに行こい!」

なのはが笑みを浮かべる。俺はその笑みに癒されながら公園に向かつた。

それから数年経ち、なのはが小学三年生になった。俺は、なのはとは違う小学校で過ごしている。因みに近所なのでたまに遊んではいるが、交流はなのはが一人だった頃に比べると少ない。

『主、今日はデバイス無しでの飛行訓練をしてみましょう。最近キャリースロウが俺を虐めるようになつた。確かにやるひつと思えばできるが…しんどい。』

「飛行はキャリースロウが手伝えればできるだろ？俺単体で飛ぶ意味がないだろ…」

そういうえば最初の一年でやつとバリアジャケットを使えるくらいにリンクカー・コアが成長した。

「セットアップ」

『レディ』

キャリースロウが光を放つ、俺の着ていた服が黒いロングコートに変わる。他は長ズボンとシャツのような物、コートを解除するとアーマー、というかファイアーホームフレムのアイクのような感じでシャツにアーマーらしきものが付く。

因みにバリアジャケットはほぼ黒だけ、といつか完全に髪の色も黒だから黒く

無いのは生身の部分のみ。

『キャリースロウ、今日は砲撃の練習だ。管理世界外に跳ぶぞ』  
俺はワープの杖を掲げワープした。

『主、敵を確認。四時の方向です。』

ワープしたと同時に目標が現れる。この世界は砂漠がほとんどだ。俺は飛行魔法を使って宙に飛びキャリースロウの指示した方向を見る。

「サソリ…？」

ガチガチと足音を鳴らし砂を巻き上げるその姿は大きさ以外はサソリそのままだった。

ギチギチと音を立ててサソリの尾の先端に魔法陣が浮かぶ。「つて魔法陣！？」

認識した途端レーザーと言つていいレベルの魔法が俺に向かって放たれた。

『Round Shield.』

俺は手を掲げてレーザーのよつな魔法—（以下レーザー）を前面のみ覆うバリアを展開して弾く。

「くつ…」

バリツ

バリアがひび割れる。俺の魔力では完全に防ぎきれないようだ。「カートリッジ！」

『Reload.』

キャリースロウの鍔はリボルバー型のカートリッジになつていて。ガシャガシャと一発分の薬莢が放出される。

「行くぞ！」

『Piercing Shoot.』

キャリースロウを突き出す。すると先から俺の魔力の色である灰色の光がレーザーのように放たれてサソリが放つレーザーを裂きな

がらサソリの尾を貫いた。

「キシャアア」

叫び声のような音をたてるサソリ。俺はその隙にレイピアを上に掲げる。

「カートリッジ」

『 Reload .』

六回、リボルバーが回転して薬莢を吐き出す。キャリースロウが多少熱暴走を起こして発熱しているがこの程度でどうにかなるくらい軟ではない。

「まともな教育を受けていないからな……残念ながら、容赦する気はない。俺の経験値になれ！」

『 Stardust .』

大量の魔力が頭上で収束する。すでに自分が本来持つ魔力を超えた量の魔力。荒れ狂う力、それを抑えるのは意志の力。まだ、全力ではないのに既に制御の外の力。

「砕けツ！」

指揮棒のようレイピアを振ると灰色の魔力の塊が形を変え流星のような砲撃になつて放たれる。

「ブレイカー！」

『 Breaker .』

地上に注いだ光が膨張し破裂し音が消えた。それだけではない。強大な砲撃によってその空間の空気が一時的に消滅、あたりから空気を吸い付くし凄まじい勢いで爆災地に引き寄せられる。後には何も残らなかつた。

「…………強すぎた？」

『主、やりすぎだとと思つのですが。』

家に戻つた後の反省会、修行の後には必ずやるよつこなつてこる。

「うーん、爆撃された後みたいな……使い所はなぞうだ……」

あの技の弱点発覚。多分、威力を重視し過ぎた結果だろ。人がいるところでは絶対に使えない。

『そうですね。あと、もう何種類かの技を作つたと聞いているのですが……』

「ああ、だけど……今日はなんか精神的に疲れた。もう寝るよ……ソロソロとベッドに入り横になる。

『誰か！助けてください！』

（ああ、やつと本編スタートか）

開幕のベルは鳴つたが、まだ出番は遠い。

「おやすみ」

誰に言つてもなく呟いて部屋の電気を消した。

## プロローグ 「原作開始まで」（後書き）

イリスヴィア「作者「コーナー」」

カナエ「ええ！？ いきなりテンション低つ！？」

イリスヴィア「ふ・・・誰も知らない苦難があつたのさ」

カナエ「そうですか・・・最初なので次回予告だけでも・・・」

イリスヴィア「ふ、次回予告「結末」」

カナエ「違う！？違うからね！？ねえ、例え8回目（の後書き）でも頑張ろうよ！？」

イリスヴィア「・・・このバカP.C.が！？」

カナエ「ええ！？キレた！？・・・端から意味がわからない・・・」

イリスヴィア「貴様にはわかるまい（「」）

カナエ「次までにちゃんと戻ってくださいね？ 次回『ヒロインとの偶然の出会いは主人公の性。』です。ヒロシク！？」

## 第1話 「ヒロインとの偶然の出会いは主人公の性。」（前書き）

はい、一話目です。

前話がアニメ前から開始まで今回が完全にアニメの時系列に入っています。

では、第一話開始です。

## 第1話 「ヒロインとの偶然の出会いは主人公の性。」

ユーノの念話をスルーした翌日。道具作成で作り出したデバイスの製作方法の説明書を見る。

中には製作の他に整備の仕方まで載っているのでキャリースロウの整備にも使える。

『主、学校は…？』

「キャリースロウ、俺にとつてはこっちの方が大切。」

『そういいながら、一からパーツを組んでデバイスを作っていく。でも、まあ。これ、完成するのにどのくらいかかるかな…一ヶ月ちょい?』

『ですね』

力チヤ力チヤ。

ペラッ……ペラッ

静かな時間が流れる。

『ん?…うわ、わからんねえ…』

ふとした原因で息詰まる」としばしば、こつこつときはず外に出て

気分転換。

『主?』

立ち上がった俺をキャリースロウが疑問に思つたようだ。

『ちょっと気分転換。翠屋行つてくる。』

『わかりました。行つてらっしゃいませ主。』

キャリースロウに見送られながら俺は家をでる。

キャリースロウは持ち歩かない、もしなのは…かユーノに会つたら“おはなし”になる可能性がある。

「ん？」

翠屋に入ると先客がいるようだ。背格好から見て同じ年だらうか？

「あ、カナエくん。いらっしゃい」

一ツ口と笑みを浮かべる女性。それで前のお客さんも俺に気付いたようだ。といつか……この金髪つて……フエイト！？

「お久しぶりです。桃子さん。今日はシュークリームを買いに来ました。」

内心の動搖を隠して話す。フエイトは無表情でこちらを見ている。よし、話しかけようか。

「こらにちは、君は？」

桃子さんは多分フエイトが頼んだであろう物を箱に詰める。なんで本編開始の日にフエイトが翠屋に居るんだろう？

「え？……私？」

驚いた表情で俺を見るフエイト。またか喋りかけられるとは思つていなかつたのだろう。

「そ、俺は神名 カナエ。」

とりあえず自己紹介。手早くマルチタスクを使って思考の片隅で道具作成を起動する。

「私は……フエイト・テスターッサ。」

……ドンマイ、なのは……名前、簡単に聞けたや……

「そう、じゃあフエイトちゃん。学校は？」

「それを言つならカナエくんもでしょ？」

桃子さんの問いに苦笑いを浮かべる。

「あはは、いつもの発作です。ちょっとした精密機械を部品から組み立てたくなつて。でも、大丈夫ですよ？それ以外もちゃんとしてます。」

俺は度々学校を休んでいる。理由は簡単で他にやることがあるからだ。しかし、それを言つわけにはいかないので「まかしながらシ

ユーフリークームを箱に詰めている桃子さんにお金渡す。

「はい、いつも通り三つね。学校サボるのはダメよ?」

「…善処します。疑うなら発信器でもどうですか?」

そんな流れのよつたな会話についてていけないフェイト。なんだうう、一匹で置いて行かれた子犬を見ているようだ。

「神名「カナエでいいよ。」…カナエ、私は学校には行つてない。やつと答えを返せてホッと一息つくフェイト。されど、俺は逃がさない。

「そつか。引越ししてきたの?」

フェイトが固まつて動けなくなる。会話に慣れてないのが凄く痛々しダメだ。今ここでフェイトを助けると未来がわからなくなる。

「う…ん。アルフと一緒に」

かあ 今度は俺が固まる番だった。ああ、そうか。フェイトはアホの子

「そ、そつなんだ…アルフさんつてお姉さんか何か?」

その時、俺は気が動転していたのであらう。決してこの後の出来事は予想できる範囲の事ではなかつたのだが。

「ううん、アルフは使い魔」

時間停止再び。まさかフェイトがここまでアホの子だつたとは…

「か、カナエくん、はい。シユーコーリーム」

シユーコーリームの入つた箱を差し出しながら桃子さんも苦笑いを浮かべながら俺を見ていた。

会話の内容がぶつ飛んでいるからだろうな。

「…………ありがとうございます」

質問をし続けていたからか未だに場に留まつてくれているフェイ

ト。… よし。

「フェイトちゃん、今日は無理だけど… 今度一緒に遊ぼう。」  
笑つてフェイトを見る。どうやら予想外だったらしく、完璧に固まつて… いや、もしかして念話でアルフと話してねえか?

「ごめんなさい。私、用事があるから… 帰るね。」

クッ… 獣め、フェイトの幸せとか言いながら閑ざわせてるじゃねえか。

「そうなんだ…」

強引だがこうなつては仕方ない。

「じゃあ、別れの挨拶。」

フェイトの前で跪づいてフェイトの手を取る。我ながら恥ずかしいぜ!

「え?」

突然の行動に対応出来ていらないフェイト。この勝負…俺の…勝ちだ! なんの勝負かはわからないが。

「では、お嬢様レディまた会う時まで…」

手の甲にキスをして立ち上がる。桃子さんが何か言つているが自分でも気にしている余裕はない。… 撤退さ!

しかし、俺は致命的なミスをしていることにじばらくして気付くのだが、それはまた後で。

『なるほど、で? マーカーは付けられたのですか?』

帰つてきてキャリースロウに相談した俺にキャリースロウはそれだけを聞いてきた。

こいつ、俺より冷静だ。

「ああ、キスの時に。これで一応バツタリ遭遇はもつないと思つ。ちなみに道具作成の時に作った物だ。

なのはにも付けているが未だに気付かれていない。商品名?…

… 時空管理局御用達の発信器とだけ置つておいた。

『しかし、主。帰つてきつてすぐにしてることがデバイス弄りですか。Sとはいえ油断したら格下に負けますよ?』

つまり修行しようと?

「あのね、キャリースロウが遠距離に対応しきれないからだろ?」

『それをいうなら主、何故レイピアなのですか? 主が得意なのは…』

「レイピアカツコイイじゃん」

それ以外に何の理由があるのだろ? 武器は自分が好きな物を使いたいだろ?

『主は普段、本当に子供なのかと思ひほどの考え方をもつているようですが、たまに歳相応に戻りますね…』

キャリースロウに呆れられている気がする…

「どうとでも言うがいい」

俺の半ば自棄とも取られかねない言葉はしかし、部屋の壁に吸い込まれ一切返つてこなかつた。

何故なら…

ピンポーン

と、何故かとてつもなく嫌な予感しかしない音が聞こえたからだ。

「…はーい!」

仕方ないのでドアを開けに行く。俺のミスは既に取り返しのつかないものだとドアを開いて悟つた。

「こんなちはーカナエくんお母さんにお店でカナエくんが知らない女の子にキスしてたつて聞いたんだけど…ホントかなー?」

何故か傷だらけのフェレットもどきを抱えながら家の前になのはが立つていた。

というか一息で長々とよく言えたな…

「な、なのはちゃん?」

「ちょっとだけ…お話しようか?」

「はっ！？なんで俺はこんな所に！？」

周りを見るとやけに清潔感のある壁、病院？

「カナエくん、ありがとう。おかげでこの子を届けられたよ。」

「なのはに“おはなし”されたんでしょ？よく戻つて来られたわね。

そういう金髪の少女、あれ？まさかアリサ？

あー、サセヤム、多分状況が見てないよ? カナエくん、横こますずか オークル状況はなんとなくわかつた。

「ええと、アリサちゃん、だつけ？」

とりあえず名前のわからないフリをする。にしても翠屋の出来事が“おはなし”フラグだったとは…なのは、恐ろしい子…

「アリサでいいわよ……ちゃん、なんてむず痒い……」

顔を赤くしながら軽く照れている様子のアリサ。うむ、心中ではアリサな、アリサ。

「ダメだよ、カナエくんは昔から遊んでいた私もまだちゃん付けするんだから」

なんだろう、なのはがまた不機嫌に：

「あつ 私は」

すずかが氣付いたように声をあける。まあ、少しばかり戻るかな？

すずかちゃんでしょ？有名だからね、君の“一族”は

「えっ!?

今ここに俺を問いただすことができないすずかは言葉に詰まつた。

なのはとアリサがいるからな…

「さっきのフェレット大丈夫だった?」

「うん、少し休んだらもう動けるようになるって」

なのはが嬉しそうに答える。すずかは顔を青くしてゐるな…

「大丈夫? すずかちゃん、顔色悪いけど…」

「あ…うわ、すずか、顔真っ青よ? 早く帰つて休まなきゃ…」

アリサが焦つたように声をあげる。よし、予想通りの展開だ。

「…なのはちゃん、男は俺一人だから俺がすずかちゃんを送つてくれよ。」

「送り狼にならなきゃいいけど…」

アリサがボソリと誰にも聞き取れないような声量で呟く。甘いな、

俺の聽力は日々鍛えられているのだ。

「アリサちゃんつて耳年増なんだ。」

「なつ…?」

顔を赤く染めるアリサ。うん、可愛いけどな。

「い、いいよ…そんなことしなくても家の人に呼べば…」

「そうね…私が話してくるわ」

そういうてアリサが携帯をもつて外に出ていった。

「ほらすずかちゃん、横になつてたら?」

「うん、寝てたほうがいいよ! すずかちゃん。」

なのはと俺ですすかをソファーに運ぶ。

「夜、君の家に行くから」

すずかの耳元で囁く。

「ひやう…?」

耳元すぎたらしい、顔赤いな…ちなみに深い意味はない。用事があるから行くだけだ。

「ねえ、カナエくん。おはなし、いいよね?」

後ろが怖いなあ……

すずかが黒い長い車（名前は自分が庶民のため自重。畜生、嫉妬じゃないぞ！？）に運ばれていった為、俺達は解散することになった。

しかし、俺はすずかの家……つまり月村、夜の一族と呼ばれる人たちが住む家に向かっていた。

「キャリースロウ、生体反応は避けていくから感知頼むぞ」「了解です。主。』

一度家に戻つてキャリースロウを持つてきたこと以外はさつきと変わらない。つまりバリアジャケットは着ていない。俺の目的を達するには必要な事もある。

「よつ…とつ！」

3メートルくらいの堀をジャンプで飛び越える。

才能限界無制限に意外な副作用。まず、筋肉が落ちない。次に一般生活の時すらトレーニングをしているのと同じ効果が出てしまつている。

力を抑えるのは簡単なんだが。

見張りのようなものはいない、とはいえ監視装置はあるのだろうが……

「関係ないか」

走る。ワイドエリアサーチで監視装置の場所を探りながら見つからないように走つていぐ。

「見つけた……！」

ワイドエリアサーチですすかを捉える。見つけた以上素早く行動する。余計な事は一切しない。

ワープの杖を使って、すずかの背後にワープする。

「やあ、すずかちゃん。こんばんは」

「え！？」

突然、背後から声をかけられたすずかは驚いて少し飛び上がった。

「…………黙田だろう、子供がこんな時間まで起きていたらや」

俺は驚いて動けないでいるすずかの頭を撫でる。

「え？えつ！？」

すずかはドアと窓を見る。どうやら一応両方を見ていたらしい。種明かしは後でね。今は他の人が来るまで待たせてもらひよ。すずかちゃん？」

すずかの顔は既に真っ赤に染まっている。頭を撫でられて恥ずかしかつたか？

「い、いえ……その……」

「夜の一族」

待つてもなにも起こらないないと思つたので核心をつく、すずかの顔は見ていて可哀相になるくらい青くなつていた。

「大丈夫、なのはちゃんとアリサちゃんは知らないから。教えるつもりもない、ただ……」

「ただ……その言葉の続きを私にも教えてくれないかしら？」

ドアを開けながら忍とメイド一人が入つてくる。

「ええ、いるのがわかつていたから話し始めたんです。」

ニヤリと口を歪めて忍を見る。

「まずこれは、高町の家人とも関係があります。俺はたまたまですが、未来を知ることができました。ただし、それは確実な未来ではなく可能性の未来。ただそれはすずかちゃんにとつてもなのはちゃんにとつても辛い未来です。だから俺は夜の一族を利用して二人

を救う方法を考えました。今、俺はまともな小学校には行けていません。それは、俺が孤児だから、という理由があります。違う小学校にいたのでは皆の事を護ることができません。」

一気に言い切つてここでいつたん止まる。

「いろいろ言いたい」とはあるけど…利用つてどうするの?」

忍の純粋な殺氣を受け流しながら笑みを浮かべる。

「俺を一族に加え、皆を見守るために聖祥小学校に加えてください。」

「」の時見た忍の表情は一生忘れられないかもしねない。

「…はあ…途中まで言つていた言葉に比べて要求の程度がそんなに低いなんて…」

忍は目を逸らしたま息を吐いた。次の瞬間視線と敵意を同時にこちらに向けた。

「お姉ちゃんっ!…?」

すずかの悲痛な叫び声。同時にドアが吹き飛び、影が俺に向かって凄まじい速度で迫る。

「ま、遅いんだけどね。」

突つ込んで来たメイド服の女性の背後に回るり淡い灰色の光で3人を捉え周囲に繩のような物を張る。

バインドを発動させ、すずかを含めた3人を拘束する。約2秒、バインドまでの時間…まだ誰も何が起きたか意識がついていないうようだ。

「夜の一族という大層な名前の割に…弱いな」と  
言い捨てて忍を見下ろす。

「つ…」

涙目の上目で睨み付ける忍。その視線にゾクゾクとしてしまう。ヤバイな…

「クッ…止めてください、その田…虚めたくな  
自分がSだとは思つてなかつた。

「な、何をしたの…?」

「魔法…信じられないですか?」

『Stand by ready』

キャリースロウがレイピアに変わる。忍は驚いた表情を見せたが  
すぐにまた鋭い眼光でこちらを睨む。つかアニメより怖え…

「どうする気?」

「だから、俺を家系に加えてくれつて言つてんだ…」

しまつた女性相手に少し乱暴な口調になつてしまつた。

「…………本当に?」

「本当に…しかたないな…すすかちゃん」

呆然とこちらを眺めるすずか、どうやらまだ思考が追い付いてい  
ないらしい。

「なのははちゃんも魔導…魔法使いだよ。」

「え?」

さて、切り札の3つ目を切つてしまつた。どうしようか…

「ちなみになのははちゃんは俺の事は知らない、だから黙つていてく  
れないかな?彼女は今、ある事件に巻き込まれているから…それに  
彼女の能力は高い、だから多分このまま魔法を使い続けるだろうか  
ら…危険がないとも言えない。」

忍は黙つて俺の話を聞いている。黙つて聞いているといつ」と  
は検討はしているのだろう。

「そして君達、月村家は高町家と仲がいい。だからこそ君達も危険  
が伴う…俺はなのははちゃんやアリサちゃん、すすかちゃんも大切  
な友達だと思つていいから…」

キャリースロウを再び指輪に戻して両手を頭の後ろにまわす。そしてバインドも解く。

「強引な手段を使ってごめんなさい。ですが、俺はすずかちゃんやなのはちゃんを守つてやりたいんです。なのはちゃんは初めての友達、すずかちゃんはなのはちゃんの大切な友達だし俺自身も今日会つたばかりだけど…いい友達になれると思つています。」

純粋な気持ちも告げる。正直に「うとすすかはもとから好きなキャラのうちの一人だ。

「…………はあ、どうせ…力付くでもやれたんでしょう? そつなら私達にこれ以上の抵抗は無駄だわ…でも家族つて事はすずかの許婚…かしらね?」

凄まじい態度の変化の早さに俺も一瞬呆気にとられた。

「…………えつ…?」

すずかが一瞬で顔を真っ赤に染める。忍はそれを見て笑みを浮かべた…悪い感じの。そしてアイコンタクトを俺に送る。

(ついてこれたら認めてあげる。)  
と言つてゐる気がした。

(仕方ないか…)

「大丈夫、痛くしないから…」

すずかの頬を撫でてゆっくり笑みを浮かべる。

「う…あ」

可哀相なくらい真っ赤なすずか。そろそろネタバレを…

「あら、すずか。あなた意味がわかるの?」

忍の一言はとどめの一撃だったようですがは何も言わずに部屋の外に走つて出でていった。

「…どうする? 許婚。」

「さようだいで…」

そうして俺は丹村カナエと名乗ることになった。

「カナエ、聖祥の転入手続きができたわ。」

忍は柔らかい笑みを浮かべる。数日でよくここまで柔らかくなるものだ。やはり原作キャラの殆どは基本、お人よしなのだろ？。

「ありがとう」や…痛つ」

「デ」「ピン一発、つか痛い…」

「家族内で敬語禁止…すずかの呼び方はともかく、敬語はおかしいわ」

忍は変わらず笑みを浮かべている。少し恥ずかしくなつてくる。

「ありがとう…忍姉さん。」

クソウ、多分赤くなつているんだろうな。

「はい、よく出来ました。ほら、すずかに服を見せてきなさい。多分、はしゃぎ回るから。」

忍の言つ通りなのだろ？。歳の近い兄が嬉しいのかすすかは俺にベッタリだ。

「わかったよ…………ところで忍姉さん、仲がいいのはいいことだけど…少し声を抑えて。」

忍の顔が赤く染まる。よし、やられっぱなしあは俺らしくないからな。

バタンとドアを閉め撤収。さすがエロゲキャラだ。毎日とは恐れ

入る。

「…暖かいなあ、本当!」…」

年上の家族の居なかつた俺にはとても嬉しい事だ。

「さて、早くしないとすずかに怒られる。」

俺は袖で顔を拭い恐らく出でていたであろう涙を拭つた。

すずかの部屋の前に立ちドアをノックする。

「すずかちゃん、入るよ?」

「はい!」

ドアを開い「待つて!今の私じゃ…」た。

「あ…」

すずかは着替えている途中だつたようだ。

「……………ごめん…ファリンちゃん、借りてくれ?」

笑みを浮かべていたファリンが悪戯したのだろうと思ひ腕を引っ張つてすずか

の部屋を出でいく。

「で?何がしたかつたんだ?」

「痛い痛い痛いつ!」

今、アイアンクローディーファリンにおはなししています。

「いや、やつぱりアクシデントは必要かなつてえ痛いつたい  
いたつ!」

ちなみに握力は普段のトレーニング（普通に物を持つたりしてい  
るだけ）で石くらいなら握り潰せる。人間の頭ならもつと簡単だ。  
「力ナ工様、それを私に譲つて頂けませんか?」

ノエルさん登場、なぜさん付けか?怖いから。多分、月村家で1

「了解」

番。

顔面蒼白なファリン、「」愁傷様とこ「」じとだ。

「きやああああ！助けてえ！」

ファリンは悲鳴とともにニノエルさんにてきりあられていった。

「お兄ちゃん、今のファリン？」

そういうながらすずかが部屋から出でてくる。

「あ、ああ…うん。そうだね。」

なんとも答えてくい質問だ。

「あ、お兄ちゃんも制服だ。」

とても嬉しそうに俺を見るすずか、今日からはなのはたちと顔を会わせる事にもなる。

「そういうえば…やつぱりなのなちやんたけにまは俺のじとままだ内緒？」珍しくすずかが言い始めた事もある。

「うん、びつくつさせたくて」

すずかの笑み、俺はなんとなく頭を撫でてしまつ。

「きつと驚くよ。特になのはちやん、友達だしね。」

すると微妙に不機嫌な顔を見せるすずか。理由はわからないでもない。

「大丈夫、すずかちゃんは大切な妹だしね  
さりに優しくすずかの頭を撫でてみる。

「…うう…早く行かないと遅刻しちやう」

すずかはパタパタと足音を鳴らしながら走つていぐ。

すずかが角を曲がつたときすずかは顔だけを俺に向けて立ち止まつた。

「お兄ちゃん！制服似合つてるよー。」

すずかは恥ずかしそうに顔を押さえながら走つていぐ。

“撫でる”の効果は高いようだ。

「急がなきや遅刻か…」

車通りで遅刻するのマズイか。わざと車に乗り。

まだなのはには直接は関わらない。関わるタイミングは結果のみ、なのはには悪いがP・T事件を解決するのは一人で頼むことにする。闇の書も関係する気はない。

「下手に動いたら知つている未来すら変わりそうだ…」

外に出ると落ち着きのない様子ですずかが自宅の車（普段はアリサの車で行くようだが）で待っていた。

「忍姉さん、行つてきます！」

返事は期待していないがとりあえず言つておく。

「いってらっしゃい」

このささやかな幸福は絶対に護りたいものだ。

「皆さん転校生を紹介します。」

女の先生が先に教室に入つていつて俺は後で入るらしい。

「入つてください。」

教室を開けると見たことがある顔が3つ… 金つて恐ろしい。

「あれ！？」

「ふえ！？」

アリサとなのはのわかりやすい反応を横目に教壇の横に立つ。

「月村カナエです。なのはちゃん、アリサちゃん。聞きたいことがあるのはわかるから後でね？」

月村とこう名前に反応したのかなのはとアリサはジッとすずかを見ている。

「名前の通りすずかちゃんの兄で『ええええー！？』 どうかしました？」

クラス内の叫び声に思わず首を傾げる。するとじぶんの長い黒髪  
が…ああナルホド。道理で若干男の子の声のほうが多いはずだ。

「正真正銘の男ですよ？ね、すずかちゃん。」

見るとすずかの顔が真っ赤に染まっていた。

「うん…」

先生が唖然としている。ああ、ナルホド。（このフレーズが気に  
入った）

「先生、浴場でたまたま会つただけですよ。先生が思つてこられるよ  
うな事は今の所考えていません。」

「い、今の所？」

慌てまくつている先生を尻目に俺は教室の中を見回す。

「席は…なのはちゃんの隣が空いてますね。そこでいいですか？」

「え、ええ」

真っ直ぐと席に向かいなのはの横に座る。

「や、なのはちゃん。今日から同じクラスだね？  
楽しくなりそうだ…前世と違つて。

「よつしゃー！カナエー！勝負だ！」

同じクラスの男子が50M走で勝負を挑んできた。  
返り討ちにしてやるわ。

「そ…んな…一秒差？」

「この学校は全体的にレベルが高い。とはいえた俺はチートなんだが。  
「ん、もっと速くなると思うぜ? 誓めなかつたら。」

口調の差は性別の差。俺は万人に好かれたいとは思っていないし。  
ただ、努力は嫌いじゃない。前世ではできなかつたから。

「ビックリした…アリサちゃん並じゃない?」

「そりや…前世もあるしチートだから。

「あはは…頭を使つたり体を動かすのは好きだから。  
もしかしたら前世の反動かもしけないが…………どうしたのだろう?」

今日は前世の事をよく思い出す。

『主、ハイエンドが目覚めました。』

キャリースロウからの念話は新しい相棒が完成したとの報告だつた。

放課後、集まっているのは達に近づいてすずかに話しかける。  
「すずかちゃん、完成したみたいだから俺一人で帰るね。」

ちなみに月村家と学校はけつこう離れている。歩いて帰るのは至難だが、最近ワープの杖の原理を理解しワープ覚えた。といつても自己解釈だが、要するに自分を魔力に変換し念話のように送り向こうで再構築すればいい。

でもこれってステータス回復が使ってやつと使えるからやつぱり何か違うかも…

あと服はステータスの装備に入るよつで一緒に回復してくれる。

「うん、次はお願ひね?」

すずかは笑みを浮かべてアリサやなのははと一緒に車に乗り込む。

「じゃあね、アリサちゃん、なのはちゃん。」

車が見えなくなつてから人目に付かない裏路地に移動する。

「誰もいないな。」

周りを見て誰もいないことを確認する。

淡い灰色の魔力に体が溶けていき裏路地から凄まじい速度で月村家に飛んでいった。

今度から新しい相棒のテストだ。

## 第1話 「ヒロインとの偶然の出会いは主人公の性。」（後書き）

カナエ「なぜすずかちゃん？」

イリスヴィア「好きなキャラだからに決まっているじゃないか！」  
カナエ「……夜の一族設定でトラハだけじゃ…」

イリスヴィア「あつはつは、気にしない。だって無理やり理屈付けるにはちょうどいい設定だつたし」

カナエ「…ああ…」いつ殺したい

イリスヴィア「男と女に對して口調が違いますからお前に言われたくない」

カナエ「理由があるんだよ」

イリスヴィア「ヒロイド男の娘」

カナエ「…念みがあるいいかただけど…なんだ？」

イリスヴィア「声は？」

カナエ「…高いよ…男に比べると」

イリスヴィア「式みたい」

カナエ「…ひつさよ？」

イリス・ヴィア「イエス、両儀式」

カナエ「言われてみれば…」

イリス・ヴィア「次回、「新たなパートナー。イレギュラーの介入。です。」

カナエ「取られた！？」

第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定（前書き）

オリキヤラや性格変化（作者視点）を起こしている原作キャラの設定です。

ツツ「ノリビ」ろがあれば指摘お願ひします。

## 第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定

神名 カナエ（カナン カナエ） 月村 カナエ（ツキムラ カナエ）

（カナエ）

男 現在9歳 身長124cm

黒髪黒目とある意味日本人らしいが黒髪は腰より少し上くらいのロングになつており日本人ではあるが男の子ではなく男の娘に見える。顔のつくりは優しく少し年上のように見えなおかつ何事に対しても慌てなさそうな顔。つまり少し女よりの中世的な美形。シネ

戦闘中は少しテンションがハイになり若干目つきが悪くなつて男に見えるようになる。

声も男性にしては少し高く『空の境界』の両儀 式（ツキ 坂本 真綾）の声に似ている。

1話の時点ではクラスの魔導師になつている。  
使うのはアームドデバイスの『キャリースロウ』。

得意なのは収束と放射、ただし放射は最大出力が凄まじいだけで制御はあまり得意ではない。なのである意味収束のみとも言える。

キャリースロウの指導のもといろいろな技能を高めている。

希少技能

『ステータス回復』

ゲームのチートコードによるステータス回復に似ている。自分の現在の限界状態のステータスまで瞬時に回復する。

『コードワード』

『空の境界』で玄霧 露月が使つていた能力。ただし、カナエは玄霧のような使い方はせず単純に言語を理解しやすくするために使つている。

『道具作成』

自分が思い浮かべた代物を理解しなくても作れる能力。ただし元の設定（キャリースロウはデバイスという設定を元にしてフェニック

スの尾やワープの杖はゲームを元に）が存在している場合のもの以外は作れない。ただし、その世界に既にあるものは作れる。

#### 『才能限界突破』

人間としての才能を超える能力、とはいっても成長スピードは緩やかでつまるところ格闘のセンスを格闘選手並みにしようとしたら同じ位の訓練をしなくてはならない。

ただ、日常生活によつて鍛えられる筋力に関しては副作用である能力が落ちないことから凄まじい速度で鍛えられている。

性格は女に優しく男には普通に気に入らないヤツはぶつ殺すなのである意味普通な人

前世での享年27歳 意外とつらいことがあつたらしい。最終的に居た家族は妹だけである。

月村すずか

原作と違つてカナエが兄になつたため性格が壊れているかも現在カナエになにかを作つてもらつていい様子。

キヤリースロウ

剣型のアームドデバイス。注意して欲しいのはレイピア型ではないということ。

かなり高性能なAIをつんでいて性能は高いが遠距離は苦手。実際に斬ることもできる。

声は執事長のようになにかを感じの声『ガンダムSEEDのバルドフルドの中の人』（CV置鮎龍太郎）みたいな感じ

神

神様。説明以上。

これ以降出ることはないだろう。

第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定（後書き）

カナエ「なに？」のチート

イリスヴィア「あ…まあ、いいじゃん。ちなみにあれだぜ？キャラ設定は新キャラが複数人増えることに増やしていくぜ？その話の後に。だから序盤はキャラ設定多くなるかもな」

カナエ「せうか…とにかく俺の過去のつらごとく…」

イリスヴィア「い、一応考えてるからなー！」

「あらもキャラースロウの説明を訂正。アームドでした。

## 第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」（前書き）

更新頻度はまばらです今回は書置きがあつたので。

では第2話始まりまーす。

## 第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」

キャリースロウの完成宣言から一日。月村家に作ってもらつた研究室（忍姉さんはノリノリだった）で新しい相棒のチェックを行つていた。

『力ナ工様』

左手に付けた黒い腕輪、ハイエンドが綺麗な女の声で念話を使つ。

「ん、動作不良無しだ。今日から実戦だな。」

『了解しました。力ナ工様。』

『主、検索完了。ついでに妹君の方は7割完成です。』

嬉しいことにキャリースロウは最近、俺の行動を読んで動いて（？）くれている。

「ハイエンド、セットアップ」

「Standby ready.」

ハイエンドが黒い腕輪の姿から黒い銃身のハンドガンのような形に変わる。レイピア型のキャリースロウは完全に接近戦型に切り替えてハンドガン型のハイエンドを遠距離に使うことにしたのだ。

「いくか」

体が溶ける。次の瞬間には金の草原が視界に入った。

「で、いきなり背後に敵と」

背後を見ずにハイエンドを向けてただの魔力弾で後ろにいる物を撃ち抜く。

「うわっ、ライオン牛？」

顔がライオンで体が牛のような（一番形が似ているのであって微妙に違う。）生物の背中に穴が開いている。これは口からイッたな。それにしても…

「いっぴいいるなあ…」

「うじやうじやといるライオン牛がこちらを見ている。

「ハイエンド、バーストモード」

『了解しました。』

ハイエンドの形がハンドガンから大口径のライフルに形が変わる。

『Burst mode full shot.』

灰色の光がハイエンドの銃身に収束しハイエンドのカートリッジが4発薬莢として吐き出される。

「殲滅する。」

上に向けてハイエンドの銃口をに向けてトリガーを引く。

『Rainy ray.』

上空に魔法陣が展開される。その魔方陣にハイエンドで放った魔力が直撃する。

「グオオオオ」

ライオン牛の咆哮、そして一斉に襲い掛かってくる。しかし…既に遅い。

「フォール・アンド・ジエノサイド」

上空にある魔法陣が光る。それと同時に…

輝きが辺りを覆つた。

『やりすぎです…!!。』  
キャリースロウの言ひ通りだ…

「うーん、今度は魔法陣で制御したから平氣かなつて思つたんだけ  
どな…相手が脆かつたつてわけでもないし…」

自分の半径3メートル以内は未だに金の草原のままだ。地形が完  
全に変わつたわけでも無い。が…

「敵を認識して降り注いだまではいいけど…地面まで划れたら意味  
ないよな…」

金の草原の所々に小隕石が墜ちたように地面が划れていた。

『カナエ様、問題点は私の方で解決しておきます。なるほどキャリ  
ースロウが言つていた制御が苦手とはこれの事だつたんですね。非  
殺傷でやっても死人がでそうです。』

作られて数日だとは思えないほど饒舌なハイエンドの言葉に少し  
落ち込む。魔力を増やす事に集中しすぎて制御が下手になつたよう  
だ。

「やつと見つけた。」

「…?」

背中に激痛が走る。激痛を感じた一瞬後、自分の背中が划れてい  
た事に気付いた。なか内臓が見えるくらいやられたようだ。

「治してあげようか?」

少女の声。どこかで聞いたことがあるような……？

「冗談、じゃ……ねえ……」

ステータス回復を発動させる。まるで最初から怪我がなかつたかのように体の痛みが消えた。

『力ナエ様……それは……？』

『主……？』

どうやらテバイス達に隠すことはできなくなつたようだ。

「これが俺の疲労回復の正体……強制的に自分のステータスを正常に戻す力だ。」

説明しつつ立ち上がり背後からの襲撃者を見た。

「な……フェイト……？」

クスクスと白いドレスのよつなバリアジャケットを着た金髪の少女がそこに立つていた。

「……じゃないな」

冷静に判断すれば顔がフェイトに似てゐるだけで幼い雰囲気を受ける。というか幼い……？

「あら？ふふ……姿が変わつただけでわからなくなつちゃうなんて……私の……に失格です。」

最後の方は聞き取れなかつたが彼女は俺の事を知つてゐるようだ。

「4歳差ですね？よかつた、それだけしか違わないならぎりぎり範囲内ですね？兄様」

ふと、記憶に 雜音が

「つー？待て、その顔……アリシア・テスタークッサ？」

「大正解、でも……大ハズレ……ですっ」

手元から糸のような物が伸び……

「鞭！？くそつ！」

ハイエンドを放ち鞭を“銃弾”で弾く。

「実弾？… さすがです兄様。デバイスに実弾を仕込むなんて「雑音、雑音。ノイズが、頭に、そうだ。あれは、いつかの…」

「ちつ、ウルサイ！」

キャリースロウを構え、少女に浮遊魔法を使って飛び込む。

「ああ…ソレで私を貫くのですか… とても、魅惑的ですが…」  
妖艶な笑みを浮かべる少女に近付いて胸部に突きを放つ。

「ガツ！？」

再び背後に激痛、どうやら鞭が背中に回つて俺に一撃を入れたようだ。

「あう…はあ…ん、その苦痛の表情、とても可愛いです…兄様。」

もう一度、ステータス回復。回復と同時にキャリースロウで近づいていた少女の首を貫く。

「ん、ヒュッ…」

少女はなんの抵抗もなく首を貫かれた。しかし、表情は愉悦…快樂を感じている…？

一步、少女が足を踏み出した。

ボタボタと血飛沫が飛び散る。

「正氣か！？」

キャリースロウを抜き取るうとした瞬間に少女は刀身を素手で掴んだ。

さりに一歩。顔を近づける。

「あ…？」

その顔を近づける様子が誰かとダブる。

口が動く。空気が振動しないソレは音には届かないが…

『なぜ？私を置いて逝つたのですか？』

「…………あ」

名を思いだす。それは自分のたつた一人の家族…名前は…

「「J…」」心？」

「今度、こそ大正、解。キス…したかつ…た…のに…」

心は首に刺さったキャリースロウを抜いていく。

「ふふ…」

心の手から淡い緑色の光が出る。その手を自分の首に持つていく。  
「やつと会えた…兄様、酷いです。私を忘れてしまつなんて。」  
「忘れていたわけじゃ無い…心、ここにこるつていうことはまさか

…

心はアリシアの姿で笑みを浮かべる。どこか、昔の面影を残した  
まま。

「はい、兄様の居ない世界に興味はないもの。  
正直にいふと少しこの娘が怖い。」

「だからって、簡単に…」

「自殺なんて私には条件次第では息をするより簡単です。私は兄様  
の為ならなんでもしましょう。」

心はとてもいい笑みでとても怖いことをいう。

「なんで攻撃を？」

「兄様が私を置いて逝つてしまつた罰です。」

心が頬を膨らませてこちらを上目遣いで見る。可愛いけど過激過ぎる。前世では猫を被つていた？それとも治す手段があつたから？どちらにせよ俺の妹はなのは以上に魔王の資質がありそうだ。

# 「なぜ、アリシア？」

「……借りているだけです。今、私は…………ええと……」何処でしょ  
うか?……とにかく私は今兄様に会うことができません。プレシア・  
テスター・ロッサのところには複製を置いてきたので問題ありません。  
元々アリシアが死体であったので気付くことはないでしょう。  
手を含わせながら二口二口と笑みを浮かべる。

「……あたしにどうあるべき道迷ひへん？」

二〇〇〇年

笑顔のまま固まる心。少し冷や汗をかいている。

「兄様の魔力を感じたので追跡させたのです。私自身は兄様のいう通り道に迷いましたが…」

「どうして俺の魔力までねがうた?」

それで本当に合っているのだから恐ろしい。

「さひき四歳差つて言つたけど心は五歳なのか？」

はい、おやじ兄様が「おまかは来だと同時に生まれたよ」とです

心にはセンサーでもついているのだろうか？

「…そのアリシアは…」

「蘇らせてしまって構いませんよ。」

俺の先を読んだ発言。しかし、死者の蘇生が出来るのかといえば微妙だ。

自分達が既に転生を体験している以上魂が戻つてこない場合も想定できる

「…私が、こちらに来たのは私が死んで葬式をしてからの筈です。恐らく、肉体が残っている間は魂があの世にいくことはないと想います。」

「…試せば早いが、心は地球だよな?」

「はい、兄様。海鳴にいるようです。ただ、正確な場所は…」

「探すよ。例えどここにいても。やつと一緒にいることができるんだ

…」

「兄様…」

思えば生前23年間、心と歩いた事もなかった。いや、歩けなかつた。この世界に来て初めて歩くという行為ができたのだ。やらなくちゃいけないことが多くて感動している間も無かつたけど。

「では、約束もしていただけたことですし、先に戻らせていただきます。」

心が皿を開じるとアリシアの体は崩れ落ちた。

「さて…! ?」

アリシアのバリアジャケットが消えた。それはいい。だけどなぜに裸!?

「くつ、とりあえずフュニックスの尾を…」

アリシアの体にフュニックスの尾を乗せる。

『主、その尾は…』

「試し、だけど…魂と完全な肉体。そして死後間もない体。」

プレシアのアリシアを保存していた培養液のような物。それのお

かげか僅かだが体温も残っている。

『カナ工様。凄まじい魔力がその尾から……！』  
フェニックスの尾がアリシアの体に溶ける。  
どうやら問題なく発動してくれたようだ。

「う……ううん……」

アリシアが身じろぎをする。

「服……おはよう、アリシアちゃん。」

道具作成で少し大きめの服を作成してアリシアに被せる。

「ん？……お兄ちゃん、だあれ？」

少し眠たそうに欠伸をしながら俺を見るアリシア。

「月村カナエっていうんだ。一応説明したいんだけど……服を着てくれないか？」

「うん……」

アリシアはノロノロと立ち上がり服を着始める。

『カナ工様！見てはいけません！』

ハイエンドに注意を受けてアリシアから視線を逸らす。

『キャリースロウもです！』

『ぬ？』

どうやらキャリースロウも見ていたようだ。さすがは女性型AIだ。目敏い。

「ありがとうございます、ハイエンドがいなかつたらアリシアに失礼だったかな？」

『そうですね。いくらカナ工様であるつとこつとつとときは言わせていただきます。』

『あの……』

背後から声がかかる。振り向いたいがどうなつていてるかわからな  
いため振り向けない。

『大丈夫ですよ。力ナ工様。』

ハイエンドが許可したので振り返る。

「どうしたの？」

「お母さんはどこ？」

プレシア・テスター・ロッサカ・

「…最初に君はどうなつていたか理解できる？」

「あ…そうだ…！私、死んでいたんじゃ…？」

「わかるんだ。で、今からお母さんに会わせてあげようつて言いたいんだけどね。君のお母さん、犯罪行為をしているんだ。」

アリシアは驚きの表情を浮かべた。

「…なん…で？」

「君を生き返らせるためだよ。」

残酷な方法だが、1番確実に事実を伝えることができるよつてし  
なくてはいけない。

「え？じゅあもう大丈夫じゅ

「あと不治の病だしね…君のクローンなんかも作つてゐる。」

まず助からぬし罪状のオンパレードだ。

「なにより、すごい酷い事をしてゐるよ？」

「え？」

「この子フエイトちゃんつていうんだけど…自分がクローンだつて  
知らない。だから今はプレシアに何を言われても堪えられるし…壊  
れてもいい。でもね？君が戻れば…壊れるよ？それにプレシアは  
君を復活させたら多分、フエイトちゃんを捨てる。」

『力ナ工様…言い過ぎでは…？』

「いいや、これくらい言わなきやいけない。俺はね、いい子には幸  
せになつて欲しいんだ。君は人一人を絶望の淵に追いやる気？  
アリシアに辛い思いをさせるのはわかつてゐるが。アレの傍に戻  
ブレシア

したところで確実に嫌な事しか起きないのだ。

「俺にはプレシアが君を幸せにできるとは思えない。だつて、心が壊れたらそれはもう人としての一歩を踏み違えているから。」

そう、自分の父親がそつだつた。母が死んでから文字通り人が変わつた。

「それでもまだ、希望が欲しいのなら…時が来るまで見守ろ。」アリシアの為にもプレシアのしたことは早めに受け入れて貰う。

「うん、わかつた。お母さんが悪い人なら…私も…っ！？」  
いいかけていた言葉を遮つてアリシアを抱きしめる。

「わりきるな。納得がいかないことには抗い、考えるんだ。前の言葉を覆すみたいだけど…君がプレシアの死を望んじやいけない。多分、俺がいう通りになると思うけど…その時は俺を怨んでくれてかまわない。ただ、絶対に考えをとめちゃいけない。後になつて後悔するなんてこと…いくらでもある。君みたいに幼い子が、そんな大人な考えを今からしていると…碌なことにならない。」

「う…う…あ」

アリシアの肩が震える。プレシアを救つ『氣はない。一度狂つて戻れる人間はまずい』

プレシアは目的はまともだつたが、手段を誤つたのだ。

「ごめん。アリシアちゃん。」

今はただ…沢山泣いて心を整えてもらおう。

Side ???

「さて…魔力の使い方もわかつてきたし、そろそろ原作ブレイクするか?ネクロ。」

『はい、ご主人様。』

幼い感じの女の子の声が返つてくる。にしても、初め聞いたときは驚いた。

「アルと同じ声とは…」

『んう?どうかしましたか?』ご主人様。

「いや、これも世界の修正のかなつて。」

俺の言葉に答えられる人間はこの世界にはほとんど居ないだろう。デバイス、名前がネクロノミコンだからといって安易に『ナモンベイン』のアル・アジフの声なんて…笑い話にもほどがある。

「まずは温泉にいかないとな」

今日、月村家でフュイト嬢となのは嬢の対決が始まったのを見た。なら次は温泉になるはずだ。

『温泉…ですか?ポワポワ?』

「ああ、そうだ。しばらくは帰らずに見張るか。次の話まで…「勝手に話を進めないでくれないか?」何…?」

体を灰色の繩のよくなもので縛られる。バインド…?

「…まさか、他に転生者が居るなんてな…けど、作戦会議は小さい声でしたほうがいいよ?」

背後からの声に背筋が凍る。…いつ、転生者…!

『ご主人様…このバインド、恐ろしく固いです…』

「力技で押しとお…」

瞬間、景色が変わった。

「な…？」

空間転移？ここは何処だ？

数秒周りを見渡すと背後に再び気配が出た。

「あんまり地球で騒がれると、どこの誰が反応するかわからないからな。」

チャキ、と何かを構える音がする。

「くつ…！バインド解除…！」

膨大な魔力を流し込み強制的にバインドを外す。

『ウエポン、"オクスタン・ランチャー" "参式斬艦刀" 装備！』  
ネクロの声と同時に右手にスーパー口ボット大戦に出てくるヴァ  
イスリッターの持つオクスタン・ランチャーと参式斬艦刀が現れた。

『ご主人様、来ます…！』

アリシアが抱きついて泣いている時に突然、家に敷いていた結界  
がなのはとフェイト以外の気配を捉えた。

さつきまで、月村家で一人が戦っていたのは知っていたが3人目  
となると黙つてられない。

「まずは温泉にいがないとな」

次の展開を知っているようだ。つまり、転生者か。

『温泉…ですか？ポワポワ？』

「ああ、そうだ。しばらくは帰らずに見張るか。次の話まで…」

「勝手に話を進めないでくれないか？」

本のデバイスとの会話に割り込みすぐさまバインドで赤いロングコートの少年を縛る。

「何…？」

バインドで縛られて身動きがとれない少年に対して少し緊張を解く。

「…まさか、他に転生者が居るなんてな…けど、作戦会議は小さい声でしたほうがいいよ?」

あまりに丸聞こえだったので一瞬声をかけるのをためらいかけたくらいだ。

『ご、ご主人様…』このバインド、恐ろしく固いです…』

「力技で押しとお…」

瞬間、凄まじい魔力を感じすぐさまワープの杖で別の世界に送つた。

「『めん、アリシアちゃん。急に転移なんかしてちょっと危ないけど、ここで待つてくれる?』

「うん。大丈夫。ここで待つてる。」

両腕を胸の前にもつてきてぐつと腕に力を入れ俺を見るアリシア。しまった、少し信用されすぎたか?…ちゃんと色々教えるのは後でいいか。

一応アリシアの周りに結界を張る。これで強力な魔導師が出ない限り大丈夫だろ?。

「行くぞ。」

ワープの杖を使ってさつきの転生者の後を追つ。

「あんまり地球で騒がれると、どこの誰が反応するかわからないからな。」

ハイエンドを転生者に向ける。

「くつ！！ハイエンド解除！！」

膨大な魔力に思わず一瞬氣をとられてしまつ。

『ウェポン、『オクスタン・ランチャー』、『参式斬艦刀』装備！』  
本のデバイスの声と同時に赤コートの少年の手には長い砲身のライフルと日本刀が握られていた。

『ご主人様、来ます！』

銀髪の紅目。思いつきり厨二病な感じの容姿だし『ブラックキヤット』のトレインと顔が似ている」とにも一瞬驚いて動きを止めてしまつた。致命的な隙が生まれる。

「女！？」

だが、動きが止まつたのは相手も同じようで本のデバイスのいった言葉は無意味なものとなつた。

「ハイエンド、シユート！」

構えていたハイエンドからなんの術式も組み込んでいない魔力を相手に向かつて放つ。ちなみに非殺傷だ。

「オクスタン・ランチャー、シユート！」

相手はコンマ数秒で反応し俺が撃つた魔力弾をライフルで撃ち落す。

魔力弾は本物の弾丸並みの速度なんだけどなあ…

『力ナ工様！第2射来ます！』

どうやら連射していたようだ。といつより、なんていう射撃テクニック…

『Round shield.』

キャリースロウがすばやくシールドを張る。ていうか、射撃戦じや負ける？

考えていたうちに3射、4射と…あれ? こいつ、もしかして…  
「キャリースロウ、ラウンドシールド維持。ハイエンド、スフィア・  
シユート!」

『Sphere shoot!』

俺の周りに灰色の球体が4つ現れ相手に向かつて飛んでいく。

「誘導弾…！」

少年はライフルをスフィア・シユートに向けて放ち、迎撃する。  
「読めた。お前、ライフルからしか弾を撃てないな?」  
レイピアとなつたキャリースロウで少年に斬りかかる。

「斬られてたまるか…！」

日本刀でレイピアを受けられてさらに弾かれる。  
どうやら接近戦の方も強いようだ。

『ご主人様! … “ガン・スレイヴ”発射! ! !』

周囲にビットのようなものが浮かぶ。

「まんま、ビットかよ! ! ! ポーロボットとかも出せそうだな! ?」  
空中に飛び上がり発射されるマシンガンのような魔力弾を避け続ける。

「ちつ、煙幕で逃げるか…」

攻撃を避けながら考え方をしたその瞬間…

「オクスタン・ランチャー・シユート! ! !

「しまつ… ! ! !」

Side ???

「オクスタン・ランチャー・ショート…」

彼女が空中に飛び上がってガン・レイヴの弾を避け続けているときの一瞬できた隙をオクスタン・ランチャーで狙い撃った。

「しまつ…！」

直撃コース、恐らくバリアも間に合つまい。

「ドン、という短い爆発音と舞う煙。

「煙…？」

いくら威力があるからといって煙など起るはずがない。つまり…

『Sonic move!』

「ハアッ…！」

背後からの剣戟、俺はすぐに振り向いて参式斬艦刀で受け止める。

「え？」

よく見ると、少女の鼻が赤い。

「あれ？ もう気付かれたか… そうだよ、『パンチロボット』で、本物は…」

「ハイエンド、バーストモード…」

少女がいつの間にか遙か遠くの空中でライフルを構え、こちらに照準を合わせている。

『Burst mode setting shot.』

離れて狙撃モード、どうやらデバイスが照準をしているらしい。

「オクスタン・ランチャー・ショート…」

「は？」

完全な予想外、少なく見積もつて3kmある「J」の距離をなんの照準も無しに撃つてくるとは誰も思わないだろ？

『力ナエ様！迎撃できません！回避を！』

「クツ！…」

体を逸らす。しかし、避けきれずにハイエンドを持つていた腕に当たつてしまつ。

「（J）の腕で射撃戦は無理…）仕方ないか…！」

距離をとつた方法と同じくワープして少年の背後に回る。『P』-ロボットはビジットのよつなものにやられていたよつだ。

「俺のデバイス、返してもいいぞ…」

「な、どうやって後ろに…？」

キャリースロウは『P』-ロボットの残骸から俺の方に飛んできた。

『主、第2ラウンドです。』

『キャリースロウ、セカンドモード…』

キャリースロウがレイピア型から片刃のファルシオン型になり一番手元に近い峰の部分にリボルバー型のカートリッジがついている状態に変わつた。

「行くぞ！…」

ファルシオンのような剣になつたキャリースロウを振る。

「ツ！？突然、速く！？」

相手が日本刀でガードしているがその間を縫つて攻撃を加えてい

く。

距離を詰める。拳で殴りあつよつた距離においても俺はキャリー  
スロウを振り続ける。

『つ！“オクスタン・ランチャー”武装解除“バルザイの偃月刀”  
装備！』

相手のデバイスの判断か少年のライフルが半円の刀に変わった。  
「ハハッ！2本になつたら追いつけるともつ？」  
さらに速く、相手も剣を振るうとしているが力が入る前に剣を振  
つて相手に剣を振らせない。

「クッ！？」

弾く、相手の2本の剣を上に弾いた。そして隙だらけの胴体に：

「紫電一閃！！」

魔力を纏つたキャリースロウの薙ぎ払いが少年の腹部に当たった。

60

Side ???

「く…痛つ…」

どうやら気絶したようだ。最後の一撃は見事に当たってしまった。  
「や…やあ…大丈夫？」

さつきまで戦っていた少女が恐る恐るといった表情でこちらの様  
子を伺つ。

「ああ…」しても…君、転生者なんだろ？なんで攻撃を？」

「なぜだろ？とか？とか、女の子がなぜこんな一世界『魔法少女リリカルなのは』に居るのか気になつた。腐か？腐なのか？」

「あ、あはは…なのははちやんと長く接しそぎたよ…」

ああ…つまりはOHANASHIか…

「で？ なんで止めようと…」

「先がわからなくなるのは危険なので」

「言われてから氣付く。そうだ、運よく修正が入るとも限らないのだ。」

「危な…あと少しで色々変わるとこりだつたかも…」

「もしかしたら、なのは嬢がプレシアにやられていたかも知れないのか…」

「わかつてくれたなら良いです…ええと…」

「式神キヨウスケって名前だ。」

自己紹介して少女に握手を求める。すると少女はニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「はい。私は月村カナヒッてています。戦いの間は少しテンションが上がってしまうようだ…」

少し照れくさそうに笑みを浮かべる様子はヒロインたちにも少からぬ可愛さがあった。

「はは、そうみたいだな。口調があまりに違う。」

「そうですね。…ところであなたの好きなキャラは誰ですか？」

「ん？…一応、フヒイトとシグナムだ。」

なぜ、そんなことを聞くんだろう。

「では、どうやって私の転生先に？」

「ああ……俺が誰か他に転生者がいるところに転生するよつに願つたから。」

「どうせなら他にいたほうが面白い気がしたのだ。」

「へえ……他にはどのような能力が?」

力ナ工嬢が純真な顔で俺を見つめる。近い……近いつて……！」

「あ……ああ……ええと……まず、俺が見たアニメの世界で使われていた技術の知識……」

「ということは、他にも色々再現できるんですね?」

「そうだな……次にロボアニメの武器をデバイスとして出せる能力を持つたデバイス『ネクロノミコン』の所持。」

力ナ工嬢は顔を近づけたまま、うんうんと頷いている。

「最後に無限の魔力。」

「そうですか……では原作に介入は……?」

先が読めなくなるならなるべくしないほうが良いだろ?。

「私はStriker……sからが良いと思っているんですけど……」

「なんで……?」

「しないほうがいいのでは……?」

「簡単です。そこが私が知っている最後の知識だからです。それまでの事件に介入してしまっては知っているが故にイレギュラーへの対応が遅れそうですね。だから、後のわからない最後の知識まではおとなしくしています。」

「ああ……言われて見ればそうだ……駄目だ。こんな可愛い子が近くに居たら思考が鈍る……！」

「私に協力していただけますか?」

「あ……ああ……」

「では、こちらにサインを……大丈夫です。もし、無意識に原作ブレイクをしそうになつたらビリつてくるだけですから。」

「それで避けられるのならすぐくすぐばらしい。」

俺はペンを持ってサインを書く。

「では、契約完了です。…疲れた。」

「疲れた。もう封印を解いて良いぞ」  
契約の書には強制<sup>ギアス</sup>がかかるおり逆らうとビビリビビリへくる。正直耐えられたものじゃない。

『主、ネクロノミコンの封印を解除しました。』  
『にしても、カナエ様。完全に女の子でしたね。』  
演技くらい誰でも出来ると思うが…  
「にしても、あんた馬鹿か？』

「え？」

「どうやらまだ少し呆けているようだ。

「俺は男だよ。」  
「あ…しまった…！容姿変更…！」  
「」「」

後頭部を思いっきり蹴る。

勝手に人の容姿を偽者と決め付けないで欲しい。

「容姿変更はしないよ。年齢は戻ったけど…将来も完全に女顔だつたしな。」  
「…マジでそんな人類いたのか」  
リアル。これを見せてくれるキョウスケ。

「そんなことより。これ。」

キヨウスケに書類を見せる。

「な……なんじやこれ……！？」

「簡単に言つと俺の指示に従えていうギアスがかかる誓約書。大丈夫。Striker-5までだから」

つまり、それまでキヨウスケは俺の命令で動くことになるのだ。

『すみません。ご主人様。私……つかまっていて……』

『いいや……俺のミスだ。すまない……』

なんだか互いを慰めあつてゐる一人。

「俺はすずかの家にいるから。見た感じ同い年だし俺に会いに來たつて言つたら通して貰えるようにしどくから、なにかあつたら来ても良いぞ。」

そういうつて俺はワープの杖を使ってこの2人を北海道に送つた。

「アリシアも待つてゐるし……戻るか。  
さて……アリシアの説明はどうしよう……？」

## 第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」（後書き）

カナエ「急にオリキヤラ率が増えたな・・・」

イリスヴィア「大丈夫。要望がない限りこれ以上増えないよ。」

心『兄様あーーー!』

カナエ「心ーーー?」

心『いじはぢですかーーー?』

カナエ「わからないよ...」

キヨウスケ「といつかお前、かなり鬼畜だよな?」

カナエ「利用できるものは利用しないと。」

アリシア「お兄さん?」

カナエ「うん?」

アリシア「キチクつて?」

キヨウスケ「純粋な目がイタイ」

イリスヴィア「一応今回ちょっとだけわかつたカナエの過去だけど・  
・それ以上になぞが増えたかも・・・」

カナエ「考えているんだろうな?」

イリスヴィア「も、もちろんさ。でももつチヨイ先で・・・」

キヨウスケ「そんな」とより、俺北海道!?

アリシア「え? これ読むの? 次回第3話『3人目の妹、進化するすか』・・・これでいいの?」

イリスヴィア「うん。いいこだね~」

キヨウスケ「俺は無視か!?」

カナエ「と、いうか、なんだこのタイトル・・・」

あと、キヨウスケの武器の名前を間違えていました。オクスタンライフルではなくてオクスタン・ランチャーだそうです。

## 第2話終了時設定（前書き）

なぜ細かく設定をするか…それは読んでこぬつた時の設定を自分が忘れないようにするために…つ

アリシアの情報求むです。

## 第2話終了時設定。

式神 キヨウスケ（シキカリ キヨウスケ）

男 現在9歳 身長139cm

銀髪紅目だがこれは容姿設定によるもので『ブラックキャット』のトレン・ハートネットを容姿のベースにしているようだ。

温和だがバトルマニアという謎の性格。声は『アイシールド21』の小早川瀬那（CV入野自由）に似た感じ。

魔力は能力のおかげで無限。

使うのはインテリジェントヒューバンの複合型デバイス『ネクロノミコン』。

希少技能

『無尽蔵の魔力』

魔力が無尽蔵になる。

他の願いは希少技能には入らないと思ったので省略。

前世での享年29歳 パティシエ志望だった模様。

心（こころ）

女 現在5歳 身長不明。

出てきたには出てきたが容姿はわからない状態。

性格は兄至上主義の病んでるちゃん。

でも一応物事を正しく判断することも出来る。

声は『Fate/stay night』の間桐 桜（CV下屋則子）に似た感じ。

希少技能

『特殊能力再現』

見たことのある特殊能力を再現することができる。

『憑依』

魂の宿らないものに乗りつることができる。ただし、関節のないものやそもそも動くよつて出来ていらないものに憑依しても動かせない。

『生体再現』

生物の肉体の完全なコピーを生み出したりあえて曖昧な再現で人形のようなものを生み出したりできる能力。作れるものは同じものが元でも可愛いものから気持ち悪いものなどさまざま。

前世での享年23歳 兄が死んだベッドの上を血まみれにしていい笑顔で逝っていたらしい（巡回の看護婦談）そのとき使われたものはナイフのようで頸動脈をバササリと。切れ口から見てなんの躊躇いもなかつたものと思われる（検死の人談）

アリシア・テスター・ロッサ

女 年齢5歳 身長…？？？（調べたがわからなかつた）

今のところフェイエイトと瓜二つ。

ただ利き手が違つたり性格が違つたり色々差がでてくる。

なんだか知らないうちに蘇つてお母さんが悪人になつてたかわいそうな子。

ハイエンド

銃型のインテリジェントバイス。こちらも銃型であつてハンドガン型ではない。

AIが作られる方が普通があるので少し高いくらい。遠距離専用。実弾も発射できてしまう（一応禁止されている）。

AIは女性型で声は『F a t e / s t a y n i g h t 』からセイバー（CV川澄綾子）に似た感じの声。

### ネクロノミコン

本型のインテリフュントとユーナンの複合型。ただし、本は第一形態。

ある意味武器庫的な能力だが自らの能力で出せるのでAIのレベルの高さもうかがえる。

AIは少女型で声は『デモンベイン』からアル・アジフ（CV 神田理江）に似た声。

### 月村 カナエ

ほとんど設定に変わりはないがハイエンドを手に入れ過去が少しわかつた。

ちなみに、相手の強さによって、自分の能力使用に意識的に制限をかけている。（特に統一言語）

第2話終了時設定（後書き）

力ナエ「また設定か・・・」

イリスヴィア「今回不明が多すぎだな・・・」

### 第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」（前書き）

今回は短めです。

け、決して新しいゲームをしてたからとかそんな理由じゃないんだからね！？

スマセン！！

### 第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」

休みの日の朝、アリシアを家に置くことについてどうやって説明しようか迷いながら忍姉さんに会いに行つた。

「いいわよ。」

忍姉さんをどう説得するか悩んでいたが、意外にすんなりと承諾を得れた。

「あらら…いろいろ考えて來たのに…」

素直な気持ちをはき出す。でも、まあ拒否されたら俺も困った事になつていたわけだが…

「アリシアちゃんね。大丈夫、高町の人達にも他の人にも内緒にしておくわ。でも家の外に出た場合は…」

「うん、そこは頑張る。でも、もう一人だけ…」

戻つて來たのはいいが心の居場所が全くわからない。見つけるための道具も思いつかないし…。

「住む場所の準備はしておくな。部屋を開けるだけでいいもの。」

「ありがとう。すずかちゃんと一緒に探しに行くね?」

海鳴にいるならまだ探しようはある。

だから一応すずかを連れてついて共に探し回るのだ。

「明日は温泉だから、用意はしておいてね?」

「はーい。」

すずかの部屋に向かう。今日、すずかと外に出るのはもう一つ理由がある。

「すずかちゃん! 入るよー」

「うん!」

前回のミスを繰り返さないようにゆっくり開ける。

「お？似合つてゐるね。可愛いよ、すずかちゃん  
白いワンピースに帽子、シンプルだがそれ故に着る人物 자체が重  
要となる物だ。

「それで…お兄ちゃん。」

すずかが潤んだ目で上田遣いに俺を見る。

「だめ。最後に渡すよ。」

今回、すずかには渡すものがあるのだ。

「ええ…わかつた。じゃあ、急いで探そう…」  
すずかは張り切つて外に出ていった。

「うわ、張り切りすぎだつて！」  
珍しく、苦労しそうな一日だ。

既に沈み始めた。

「…見つからない…」

なのは達に見つかるから念話も使えないし…

「だ、大丈夫！見つかるよ！」

すずかの励ましに軽い笑みを浮かべて再び自分に活をいれる。

「は、離しなさいよ！あんた達…」

何かが聞こえる。この声は…

「アリサちゃん！？」

すずかが声の聞こえる方に走り出す。

「アリサ…？誘拐…って、あれか…トーラハの…」

俺も一步遅れて走り始める。トーラハでのアリサは確か…死んで…

「急ぐか…」

「この世界で死ぬよくな」とはないだろ?ナビ…

「セットアップ……すずかちゃん。捕まつてー!」

後ろからすずかの手を掴み宙に浮かぶ。

「わッ…わッ…!?

なのはにバレたらビリよつ。

「うわあ…お兄ちゃん…バリアジャケット、見るのー回田だナビ黒

一色だね…」

すずかは顔を真っ赤にさせながらパニッシュに陥つてこるみつだ。

高いしな…

現場と思われる付近で何やら慌ただしく走つていぐ車を見つけた。

『主、アリサ様の反応です!』

キヤリースロウの報告で確定した。そつだな…すずかを抱えるのに両手を使つてゐから何もできないしな…

「すずかちゃん。俺のズボンの右ポケットから箱を取つて。」

「わ、わかった。」

すずかは顔が赤いまま頷いて俺の右ポケットをまさぐる。

「それ、すずかちゃんにプレゼント。」

Side アリサ

いつたい…何が…

「う…………」

頭がクラクラする。そつだ…変な奴らに捕まつて…

「お? お嬢様がお目ざめのようだぜ?」

周りには気持ち悪い田で見てくる男たち。

「…身代金?」

「ああ、そつだ。ただな、うちの仲間に子供が好きな人間がいてなあ」

なるほど、絶体絶命つてわけね…ここにすずかがいなくてよかつたわ…

「好きにすれば?変態」

いなから強氣でいられる。大丈夫。怖いけど…死ぬ方がもつと怖い。

「…」いい。俺もやるつか。こいつの顔を歪ませたくなつた。

リーダーらしき男がズボンをかちやかちや鳴らし…

「うわあ…身代金目的と思つたら…そつちが目的?…サイトー」  
どこかで聞いた声が聞こえた。

「うわあ…身代金目的と思つたら…そつちが目的?」  
廃ビルの片隅で起きそつになつていた惨劇に口を出す。

「サイテー。」

あえて声を出す。アリサを人質に取られては攻撃できないのでこちらに集中してもらつ。

「おいおい嬢ちゃん。どつから入つた?」

「ん? 嬢? ああ、俺か。」

すずかが見つかったのかと思った。

「ハイエンド。」

『はい、カナエ様。不埒な輩に制裁を』  
容赦はしない。ハイエンドをだしてリーダー格に向ける。

「さようなら。」

撃ち抜く。もちろん非殺傷で。

「ぐあつ!?

とりあえず一人。あと4人か。

「カナエ!? なんで…それに…それは…」

アリサにバレたがまあいいだろう。

「はいはい。今はいいから…」

バン。

銃声一つ、どうやら殺す氣でくるらしい。

「なつ!? なんだ!? 銃が…!」

「俺の防壁を破るなら口ケランでももつてこい。」

とりあえず、俺に銃弾は届かない。だから、恐いのは…

「動くな!」

アリサに銃を向ける男が3人。

「行つて! アルビオン!」

空中を蒼い色の板が飛ぶ。

「なつ！？」

アリサに銃を向けていた男たちはすぐさま銃の引き金を引いた。銃声が3つ。しかし、アリサに傷はない。4つの蒼い板がアリサの周囲に浮かんでいた。

「なんだ…盾？」

「はい。盾ですよ。」

暗闇から姿を現すすずか。黒いバリアジャケット。白い翼。俺と違つてすぐバリアジャケットを着られたらしい。

「私のアームドデバイス。アルビオン…」

盾のアームドデバイス。そして、それは…

『Shell Bullet.』

ビットとしても使える盾の砲台だ。

残つた3人は全員氣絶している。とりあえず、警察に連絡してお  
くか。

「アリサちゃん！大丈夫？」

「すずかまで…なんなのよ、その服…それに…」

アリサが宙に浮く盾…アルビオンを見る。

「とりあえず、警察には連絡した。話しあまた今度にして…見ての通り、知られちゃいけない力だから。」

ちなみに今度とは明日の温泉だつたりする。

「…わかつたわよ。行って」

納得のいかないような表情を浮かべながらアリサは手を振つた。

「じゃあね、アリサちゃん！行こう、すずかちゃん。」

とりあえず、心を早めに見つけなくては…

再び街を散策。凄まじい時間を使つてゐる。

「心ひちゃん、どんな子?」

前世を思つて出して、そのあと一瞬…アリシアに憑いていた時を思つて出す。

「い、いい子だよ…………」

断言はできなかつたがそれくらいは許してほしい。

「ところどりう~アルビオン…だつけ?」

すずかに渡したアームドデバイスを思つて出す。

使いやすいようにはしてあるんだけど…

「いい子です。すぐにサポートもしてくれたし。」

『ありがとう』とこります。お嬢様。』

すずかがつけていた紫のクリスタルのネックレス。それがアルビオンだ。

思考パターンは女性型にしたのだが…メイドだな。

「アリサちゃんにバレちゃつたね?お兄ちゃん。」

「アリサちゃんの分のデバイス作つておこつかな…」

刀型にしてコートもだして…シャナ?』

「なのはちゃんには内緒?」

「なのはちゃん達が管理局で部隊をつくるまでかな…下手に動くと俺が知つてる未来じゃなくなりそつだから…」

すずかには未来を知つてゐるだけ伝えた。妹だし、そのつちつりなのこと教えようかな?

「なのはちゃんつて強いの?」

「強いよ。ちよつと信じられない才能…撃ち合ひになつたらアルビオン壊されるかもしない…」

スターライトブレイカーはそのくらいの力がある。

「うそ……」

「俺もガード貫かれてダメージだね。」  
ステータス回復を使えば無意味だけど……

「お兄ちゃんはどのくらい強いの？」

『力ナ工様の魔導師ランクは空戦Ⅱです。』

俺が答える前にハイエンドが答えた。いやあ……成長したなあ……

「そろそろ管理局に入るかな……」

道具作成や統一言語を使えばかなりの地位になれるはず……

「いなくなつちゃうの？」

「大丈夫。すずかちやんも呼ぶから、いくよね？」

すずかは顔を赤くしながら頷いた。そりだよな、なのはも来るつてわかっているわけだし。

「あ……兄様。」

ふと角を曲がると長い黒髪をポニーテールでくくつている女の子がいた。

すいぶん昔の姿だが見間違えるはずがない。

「やつと会えたね。心……」

安心した。姿は変わっていないようだ。

「あ……う……あう……会いたかった……です。兄様……」

心が俺に抱きつく。俺を見上げてみる顔は半泣きだった。

「心ちゃん……だつたよね？すずかです。よろしく……？」

心が突然すずかを睨んだ。嫌いなのか？

「兄様、なぜ、月村すずかが、兄様と、一緒に？」

「々区切つてしゃべる。やっぱり前世に比べて心が怖い！？」

「いや、今俺は月村家の養子になつてすずかちやんは俺の妹に……」

「そうですか…わかりました。」

なぜだろう、今度は機嫌が良くなつた。

「むう…」

逆にすずかの機嫌が悪くなつた。意味がわからない…

「ふふ…なるほど、ライバルですね。すずかちゃん」「心はいい笑顔ですすかを見る。つかライバル…？」

「ライバルは私だけじゃないよ？心ちゃん」

なぜ2人は意味深な笑みで睨み合つてゐるんだろうか…「さすが兄様…動けるようになつた途端…ふふ…ふふふ…怖い…何が怖いってその写輪眼的な目が…つか本物？」

『貴方が心様のお兄様ですか。私の分身の力、どうでした？』  
俺のハイエンドと同じ形の白い腕輪…つかやべえ、デザインがほぼ同じだ…

心はやはり俺を監視してゐるに違いない。

「分身つて…アリシアちゃんのか…強かつたよ。キヤリースロウの第3形態じゃないと対応しにくい位に」

『カナエ様が瞬間的な射撃が苦手なのもありますが…』  
ハイエンドのフォローはフォローじゃない気がする。

「カナエ…？」

心が首を傾げる。うわ、ヤバ…

「オリシヨのキャラ…名前パクつた。」

心の耳もとで誰にも聞こえないように囁く。

「兄様…そこまで…いえ…いいです。わかりました、カナエ兄様ですね。」

「『」と笑みを浮かべるその姿は昔の心と変わらなかつた。

「お兄さん、お帰りなさい。」

「ただいま、アリシア。」

アリシアの無邪気な出迎えに和みつつ、わきせび心に頼まれていた心のデバイスの調整をするために自室に向かう。

とりあえず部屋に入つて調節するための集中力を得るために座り心地の良いソファーに腰掛ける。

「ふう……」

「お茶でもお淹れしましようか?」

「ん、ああ……頼……え?」

背後の声、なぜか心が部屋に居た。

「」

鼻歌まで歌つてゐるし……

「な、なあ……心はなんで『』?」

「兄様と同じ部屋がよかつたので。多分今日だけでしょうけれど……」

確かに、随分久しぶりだもんな……心とは……

「わかつた。横で見てていこよ。とにかくデバイスの名前は?」

「はい。そのデバイスの名前はラスト…特殊な能力としては自身の劣化レプリカ作成ですね。」  
なるほど、劣化か…

『残念ながら心様にデバイスを調整する技能がなかつたので…それに、私自身が特殊な物だつたので』  
なぜ心がデバイスを持っているのかといつ理由はなんとなくわかつた。

「拾つたのか…」

「ええ。まあ…能力を使つましたが…拾つたことに違ひはあります

ん。」

苦笑いを浮かべる心。心が苦笑いを浮かべるような事が起きたの  
だろうか?

「よし、ちょっとスキヤンしていく。」

「あ、私もいきますーお兄さんー」

アリシアがちよこちよこと後ろから追つてくれる。

「…え！？なんでアリシアちゃんまでこーーー？」

「ついてきましたよー？」

なぜだろ…心は俺が驚くのを知つていて黙つていたような気が  
する。

「私もいるんだけどな、お兄ちゃん。」

「うん。なんとなく予測はしてたかな？」

すずかまで居たのだが…まあいい、未来のために今から動くか。

「すずかちゃんはその机においてある本読んでて、意味はアルビオンが教えられると思うから。」

「わかったー！」

『了解しました。マイスター』

「うん、どうやら俺はアルビオンの中ではマイスターらしい。」

「心は…うん、アリシアちゃんと一緒に作業を見に来てくれ。アリシアちゃんはキッチンと覚えてね?」

アリシアにはフュイトほどの魔法の才はなかつたはずだ。サポート用のデバイスも作つてみるが基本的にデバイスとかの整備になると思ひ。

「む…? ねえお兄さん。なんで心わやんだけちやんじやないの?」  
「無意識だつた…」

「ええと…心は…そうだな…」

説明が難しい。前世のこととか言えないしな…

「ふふ、大丈夫。ちゃんがつかないのは気にしなくていいよ?」「なんだろ?…すずかの言葉はフォローを受けている気がしない…

俺は自室にもう一つある扉を開けて入る。

実は俺は忍姉さんと趣味が合つ。機械いじりだ…そして、その結果が…

「兄様、この部屋は…」

心が呆れたような表情で周りを見渡す。

忍姉さんは田を輝かしてくれたけどなあ…

「す」「よーお兄さん…研究所みたい!…」

「お?アリシアちゃんはわかるか…そうだ、これが俺の工房だ!」  
田を輝かせるアリシアに俺もテンションを上げる。やっぱりわかるよな!?この工房の素晴らしさが!

「あれ…?兄様…この辺にあるのって…」

心が見る場所にはたくさんの宝石…いや

「全部デバイス、まだ起動していないけどな。」

それにそのデバイスはこの工房のサポートをするための「トバイス」<sup>ファクトリー</sup>であつてキャリースロウやハイエンドとは違つ。

「ほり… じつに来て? ラストの調整をするから。」  
さて、俺が学んだ知識を生かしますか!!

「よし、調整終わったぞ!」  
「ありがとうございます。兄様!」  
心がラストを受け取る。実は少しだけ改造したのだが… 黙つてお  
じつ。

「私も! 勉強になつたよお兄さん!…」  
アリシアも目を輝かせてお礼をいつてくれた。  
「うん、それはよかつた! これからも色々教えるね?」

「お兄ちゃん!…」  
突然、声とともに工房<sup>ファクトリー</sup>(重要なのでルビはし続ける。)のドアを開けてすずかが入つてくる。

「どうかした? わからぬい場所があつたか?」  
「ううん。全部覚えたから次の本を… つてどうしたの? お兄ちゃん  
まさか、わずか3時間くらいで全部覚えたのか!?

「「」、「」めぐ。まさかこんな短時間で読むと思つてなかつたから…

用意してない…」

「そつか…わかった。じゃあ、明日の準備してくるね？」  
そういうですすかは部屋を出でいった。

すすか 恐ろしい子…！

### 第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」（後書き）

キヨウスケ「ただいま…」

カナエ「ん? どちらさん?」

キヨウスケ「…泣いて良いよな俺?」

心「泣くながら目の前から消えてからにしてください…エセ一枚目」

イリスヴィア「容姿変更のことか…辛口だな…」

心「いいじゃないですか。それに比べて兄様は…」

キヨウスケ「くつ…！ いいぜ…！」 うなつたら北海道で取つてきたこの力ニは俺一人で

カナエ「グス…キヨウスケさん…冗談だつたの?」

キヨウスケ「う…」

カナエ「グス…すいません…グス…いいです。食べて来てください…それはキヨウスケさんが取つてきたものですし…」

キヨウスケ「わかった! みんなで食おう!」

カナエ「フ…次回『第4話』なのはVSフェイト。そして…』です。」

「

イリスヴィア「あれ……？ 今回はキョウスケを次回予告の……」

キョウスケ「え？…まさか…取られた？…そうだ！？カニは…！？  
あれ？…ない？心ちゃんも居ない！？」

カナエ「では、また次回。さて、帰つたらカニ鍋かな？」

キョウスケ「お前ら————！」

### 第3話終了時設定（前書き）

いつも通りの設定です。

### 第3話終了時設定

心

身長105cm。

見た目が判明腰あたりまである黒髪ロングで黒目。今のところ子供の容姿だが成長すれば100人中100人が振り向く美少女。ただしヤンデル。

月村 すずか  
デバイス入手。

姿はハヤテのBの黒版みたいな感じ?あと羽も白。

アルビオン

盾型のアームドデバイス。

A.I.は最高レベル。盾にもなるレビットのよつに攻撃することもできる。

すずかのバリアジャケットについている羽は空気中の魔力を取り込み低燃費で飛べるようにするという機能がついている。

性格はメイドみたいなかんじの女性型。声は『ハヤテの』とくー。の鷺ノ宮伊澄（CV:松来未祐）に似た感じ。

ラスト

鞭型のインテリジェントデバイス。

落し物、性能は高い。鞭は魔力を使って形成している。

性格は多少自信家な女性型。声は『シャーマンキング』の麻倉葉（

CV 佐藤ゆうじ (元)に似た感じ。

誘拐犯

ロリコン。説明終了。  
警察に捕まつた。

### 第3話終了時設定（後書き）

心「わなみにラストは最後…ではありますね。」

カナエ「え？ ジヤあ…」

心「ヒントは声優さんですね」

カナエ「え？」

すずか「ついでにアルビオンも声優さんを見ていただければ… なんとなく理由はわかるかもしません。」

ミスを発見、修正しました。どうが… ところは黙つておきたいところをミスしました… oren

第4話 「なのはʌʃnʌhɪt。やして…」（前書き）

今回も少なめ・・・の割にしかも遅いし・・・ホントスマセソー！

## 第4話 「なのはべりつハイド。やして…」

連休の家族旅行で高町家と月村家…それとアリサで温泉に向かつ。

「むうー…」

アリサの視線が痛い…あと、なのはも何処を見ているんだ。

「アリシアちゃんと心ちゃん、置いて来てよかつたの?」

仕方ないとと思つ。アリシアは連れてきた場合フエイトと何か起ころる気がするし…

「まあ…今回もサポート役もいるしね。」

先日北海道から戻ってきた奴にワープの杖を持たせてある。使い時を間違えなかつたらいいんだけど…

「着いたー！」

車での移動は楽しかつた。風景をゆづくり眺めるのはとてもいい。

「ねえ…力ナエ。さつさと教えなさいよ。」

アリサが怖い。が、まだ説明はしない。見てもらつた方が早いしこのあとの動きもしやすくなる。

「力ナエくん！ ゴーくんだよ！」

そういうば coarse と心ちゃんと念つのは初めてだな…

「初めてましてー」

歳相応（見た田のほつ）に笑いながら頭をグリグリやる。

「キューー…」

和むなあ…男じやなければ。

「後でね。アリサちゃん！」

俺も初めての旅行にテンションが上がっているようだ。  
なるべく素早くアルフを見つけて遊んでやる！

（居た）

くつろいでいるアルフを発見。ついでにフェイトも…あれ？ びつ  
が行つた。

「こんにちは～お姉さん！」

アルフに笑みを向ける。こいつが後にプレシアを裏切るのはわか  
つてるので、そのタイミングがわかるように発信器を付けておく。  
フェイトと離れて地球に来たらそのタイミングだ。

「ん？ どうかしたのかい？ 嬢ちゃん。」

またか…不快感はないが訂正が面倒なんだよな～

「男ですよ。さつき居た娘はフェイトちゃん？」

ゾクリと殺気が漂う。スゲエ、アルフの笑みが完全に消えた。

「アンタ…フェイト…」

「前に翠屋つていうお店で会つたんですよ。フェイトちゃんが言  
つてましたよ。あなたがアルフさんですね？」

呆気にとられた表情のアルフ。危うくアルフが自爆しそうになつ  
ていたがギリギリセーフのようだ。

「あんたがカナエか。…………つーフェイトの手に…つー！」

アルフが再び怒りに顔を赤くする。凄く楽しい反応だ。

「すいません、あれが俺の挨拶で

真つ赤な嘘だが。

「日本にそんな文化はないでしょうが！」

アルフが俺の頭にチョップする。…避けさせてもらつつ…  
僅かに横にズレ、チョップを避ける。

「なつ！？」

びっくりしてる間に背後に回る。

「でも、残念だな…フェイトちゃんには中々会えないし…発信器  
でも付ければ遊べるかな？」

アルフに抱き着く。人間形態のアルフに抱き着くのは多少抵抗があるが仕方ない。

首に手を回して発信器を付ける。ちなみに体を「ゴシゴシ洗つた程  
度じゃ外れない。

「アンタ…」

「すいません、お2人ともかわいらしい犬のように見えたので悪戯  
をしたくなつたんです。年頃の男の駄目な所ですねえ。」

耳元で囁く。デカイ方は嫌だが子供アルフは可愛いのだ。後の事を考えると仲良くした方がいい。今は悪戯心9割だが。

「フフツ美人姉妹ですね。」

「キヤウ！？」

息がかかるくらい近くに口を寄せるとアルフの体が跳ねた。やはり犬か…鳴き声が。

「あれ…？」

後ろから声、この声は…

「久しぶりーフェイトちゃん。覚えてるかな？」

「う、うん。久しぶり…カナエ」

目的は達したのでもう離れてしまつてもいいのだが…

「2人はもう銭湯に入つた？」

さて、問題です。俺は何歳でしょう？

「つうん。入つてないけど……」

「じゃあ一緒に行こう。ここ10歳までなら混浴みたいだし。」

「疲しい目的7割。あと3割は体を見る……と意味が同じになるな……もう虐待が始まっているのかを知るためだ。

実はP・T事件は既に詰みに入っている状態だ。

アリシアの気持ちが決まった時点でプレシアを操ればいい。

「で、でも……」

顔を赤くするフェイト。

決めた。

将来、ヒリオに同じ事をする場合絶対に弄つてやる。

「アルフさんも一緒につ……」

急げばなのはにも合流させられる。修羅場の出来上がり。あとアリサとすずかを合法的に見られる。なのはは……知らん。

「ちょ……ちょっと……？」

銭湯に入ったが誰もいなかつた。仕方ない、目的だけ果たそうか。

「フェイトちゃん、体……傷……」

やはりあつた。アリシアに報告しておこう。うまくいけばプレシアを死なせずに逮捕できるしミッドに取り入りやすくなる。

「！？……」「これは……」

原因を知っているのが申し訳なくなるような反応をされた。

「……アルフさん、誰が、これを？」

親が子にする仕打ちとは思えない。いや、そもそも親なら子供に怪我はさせないはず。

ズキリと頭の端が痛んだ。

「…………」

結局、銭湯からくるまで一切会話がなかつた。

「またね。フェイ特ちゃん！」

手を振る。次に会つのは学校になるだらつ。

「う、うん……」

照れ氣味にフェイ特はじいぢい手を振つた。

『アリシアちゃん。』

『なんですか？お兄さん。』

突然の念話に動搖なく答えてくれた。

『アリシアちゃんと一緒に変身してプレシアさんの所に向かつ作戦を考えたから……準備をしといてね？開始は……夜からにするから寝といて。』

『うん、わかつた……頑張るね……』

返事は重い。というか普通の子なら嫌がるのだが……

『心ちやんがね。す、すき……あう……大切な人のためなら親を殺すべく

らい簡単だつて……』

心おおおおおー！？

ヤンヒきてるぞー！？あと1文字だぞー！？  
といつか思考が読まれたー！？つか殺す  
につー！？

逮捕するつもりなの

つかー田で毒されすぎだるー！？

『あ、それは違うよ。3年間一緒に居たから。』

また…心の中を…といつか3年で…なんかの修業アイテムかよ…  
そして心のチートっぷりがほんの少し羨ましい…

Side フェイト

自分の体に刻まれた傷。随分薄くなつてきているけど…  
「フェイト？」

「ごめん、アルフ…少し考え方…つー…ジユエルシードの気配…」  
「私はこっちを探すから見つけたら合流しよう…」  
アルフが飛んでいく。今は、母さんの為にジユエルシードを探さ

なべひや…！

『ユーノくん…』

横で突然念話なんかするなあつ…会話だだ漏れだつ…寝れな  
いし…いや、寝る必要もないけどあ…

ジュエルシードの気配で田を覚ますのはじつていたけど…ビック  
リした…

なのはが部屋から出でていへ…じゃあ、ミシシッポンスタートだ！

「お兄ちやん、なのはちやんはだいじ！」

すずかが眠そうにしながらこちらを見る。今日の事はすずかには  
あまり関係しないで欲しいので曖昧に笑つてこまかす。ちなみにこ  
の時すずかは今は話せないといつ意味に取るようなのである意味  
使い勝手がいい。

「ちょっと行ってくる。出できやダメだよ…」

釘を刺してからワープで田村家の自分の部屋に向かった。

Side なのは

ジユエルシードの気配を感じて走つてゐると光の柱を見つけた。

「あれは！！」

走る。急がないとみんなが…

「あーら…あらあら…」

そこにいたのはこの間の女の子と…

「あつ！？」

昼間の…

「子供はいい子でつて言わなかつたけか？」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」

「それを…ジユエルシードをどつする氣だ！？それは…危険なもの  
なんだ！」

「さあね？答える理由が見当たらないな。それに…あ…私親切に言  
つたよね？」

そういうつた女人人は私を睨んだ。

「いい子でないと…ガブツといくよつて。」

「！？」

目の前で女人人が大きな狼に変わる…そんな…

「やつぱり…あいつ、あの子の使い魔だ！」

「使い魔！？」

Side ???

「ん？ 子供…？ どこから入つ！…？？」

グチャと肉が拉げる音がわずかに聞こえた。

「あ… 2人で出かけている上に… 私は雑務ですか…」

闇夜に浮かぶ2つの人型。片方は地に、もう片方は宙に吊るされている。

「恨み言をいつても始まりませんし…」 こういふことを任せられるのも信頼されているし… と考えますか…」

宙に吊るされた人影がゆっくり降ろされてもう片方の影がそれに近づいていく。

「さて、上手くしなくては…」

Side ??? 2

「母さん…」

私はお母さんを前にしてわずかに震えてしまっている。

「なぜ帰ってきたの？」

「ゆれる」 いたーリビングがあつて

「……なに？」

どうやら話は聞いてくれるみたいだ。

『新約全書』

「そんな」とせざりのでもいいでしょ。私が集めて来いと書いているんでしょー。?」

鞭が私の体に向かつてくる。

「ああ……やつぱり、もつ駄田なんだ…お母さん」  
灰色の薄い膜が私を護る。優しいお母さん、きっと優しいから…  
壊れてしまったんだ。

白い子がしゃがんで避ける。

もう一回！

『Flier fin.』

次は飛んで避けられる。

追いかけないと…

「でも、だからって…！」

「賭けて、それぞれのジュエルシード…一つずつ…」

もう一度、後ろに回る。

『Thunder Smasher』.

砲撃魔法で攻撃する。すると、相手も砲撃魔法で反撃してきた。どうやら威力は拮抗して…「レイジングハート！ お願い…！」凄まじい魔力で私の砲撃魔法を飲み込んでこちらに向かってきた。

綺麗な桃色の魔力光が広がる。

「！？」

何故か突然の寒気に襲われた。

「しまつ…」

避けられない！？

「どうやら、ほぼ原作通りに進んでいるようだ。さつき、カナエが「ちょっと色々したからもしかしたら変わっちゃうかもしれない…だから変わりそしたら…頑張つてもとの結果…フェイトの勝利になるように」として、といつては杞憂になりそうだ。

なのはの攻撃とフェイトの攻撃が拮抗する。確か、この後フェイトはディバインバスターを避けて…！？

直撃しそうになるまで動かない。いや、何故かはわからないが体が硬直した！？

「頼むぜ…カナエ！」

『ゼロシフト、発動します！…』

ネクロの声と同時に俺はフェイトの前に割り込むように移動していた。

『陽電子リフレクター（魔法∨e-）発動！…』

ディバインバスターを明後日の方向に跳ね返し…

『ゼロシフト！』

なのはの後ろに回りこみビームサイズ（ガンダムデスサイズの）を首につける。

「悪いね。横入り…事情があるんだ。出してくれないかな？ジュー  
ルシード。」

『Put out.』

「え？…え？」

どうやらなのはの意識は事態についてきていないようだ。

「はい、フェイト…なにを考えていたかは知らないけど…本気でや

らなきゃ なのはの方が可哀そーだ。」

俺はフェイトの頭を撫でてジュークエルシードを渡す。  
にしても顔見られたなあ… カナエになにを言われるか… つていう  
かビリツてこなかつたな…

「あ、あの… 貴方は…？」

「ああ… 秘密、ただ… ピンチになつたら助けるよ。」

「え！？ あ、あの！？」

さて、色々聞かれる前に逃げるか…

「貴方… 誰？」

「おお… 怖い怖い。」

「この娘の命の恩人。」

「ある意味間違えていない。コイツの方はダレの事が間違えてい  
そつだが。」

「なに？ 私から助けたとでも言いたいつもり？」

「なるほど、確かに今の状況からすればそつちもアリか。」

思わず隣で悲しそうな表情を浮かべるこの娘見てしまつ。

「で？ この娘はアンタの娘だろ？ よくそんな真似ができるな？ それ

とも、アンタの本当の娘じやないから言えるのか？」

恐らく、一番聞きたくない言葉をこの娘に聞かせる。強がつても

まだ…8歳なのだから。

「…よく、知ってるわね…バレているのなら偽つても仕方ないわね…そうよ、それはただの人形。アリシアに似せただの紛い物よ。」

「…？…それでも、私は母さんの…」

「そう、鬱陶しい。もう私を呼ばないで、そうよんでもいいのはアリシア一人だけ。アリシアを元にして造ったのに…まったく似てないわ。」

ああ、やはり。もう戻れないか。

「ゲームオーバーだよ。アンタ…」

「お母さん、やっぱりわからなかつたんだ…」

「何を…」

「プレシア・テスタークサはいまだに気付かない。」

「私がアリシア・テスタークサなのに…」

「…」

そういうてアリシアは左手で顔にかかつた髪を払つた。

「う…そ…そんのは嘘よ…だつてアリシアは…」  
「…」

そういうてフラフラとプレシアは奥に消えていく。

「…どうする？」

「死者にすがる人間はすでに生きることを放棄しています。私は生きている力ナエお兄さんが大切です…だから…私たちのためになるように…」

アリシアがプレシアの後を追い歩いていく。

『心、間に合つた?』

『はい、完了です。』

細工は完璧。ならば、あとはアリシアの心か…

俺もアリシアの後を追つ。

「せひ、ローリー、アリシアはこじじゃない…。」

「お母さん…」

どうやら心の作ったアリシアの肉体のことと言つてゐるのである。

う。

「それは偽者だよ。やっぱり、見抜けなかつたか。」

ハイエンドを構えアリシアに向ける。

「くつ！」

アリシアがこちらを見て腕を上げようとする。

【あなた】「には」「使えない】

アリシアが腕を掲げるが何も発動しない。

「え? な、なんで…?」

「お母さん…貴方の事を時空管理局に報告します。発見や罪状のことはすべて、時空管理局執務官…カナエ・ツキムラが捜査したといふことになります…お母さんは私達のことを忘れる事になるでしょうが…」

アリシアの肩が震える。さすがに…これ以上は言わせられないか…「アリシア、あんたの娘は過去ではなく未来を選んだ。もし、あんたがフォイトのことをちゃんと見ていたら…別の結果になつていたかもな。なぜならフォイトは…」

「私の妹だから…」

アリシアが一瞬ハッとした表情になるが…すでに遅い。

「さよなら、お母さん。」

弾丸が放たれた。

Side プレシア

「ん？…寝てたのかしら…」  
私は椅子の上で目を覚ました。

## 第4話 「なのは↙シフヒイト。そして…」（後書き）

カナエ「カオスだね……」

イリスヴィア「なんかキャラ違つのもいたし……」

アリシア「私のことですか？」

イリスヴィア「この話のあとなのにやたらと二回二回で出てきたあつ！？」

心「私が愛の何たるかを教えましたから。」

キョウスケ「うわあ……」

イリスヴィア「にしてもカナエ……黒くないか？」

カナエ「へ？ そうですか？」

心「私の兄様ですから」

キョウスケ「うわ……すげえ納得……」

カナエ「次回は？」

イリスヴィア「うん、次のタイトルゴールは……」

アリサ「私よ。『第5話 アリサの翼、心の心』……これでいいの？」

カナエ「うわ・・・またなのせいやんが・・・消えた・・・あ、あ  
とフロイトちゃんの寒気の原因は風呂だつたり」

## 第4話終了時設定（前書き）

設定です。シシ「//」があればプロジェクトお願いします。

## 第4話終了時設定

心

女 現在8歳 身長120cm。

力ナエの道具作成をパクつて『ネギま』の別荘らしきものを作つて  
中でアリシアとともに3年間すごす。

アリシア・テスター・ロッサ

女 年齢8歳 身長：122cm

今のフェイトと瓜二つ。

性格が少しヤンデきている。

でも基本は明るくていい子・・・のはず。

心とともに3年間過ごしたせいで性格が少し似てしまつた。

今アリシアの中では

力ナエ 心>フェイト>フレシア>月村家の人たち=その他の人>  
キョウスケとなつてている(え

第4話終了時設定（後書き）

アリシア「ヤンゴン・・・？」

心「完璧に近づいたところ」とどす。「

アリシア「やうなんだあ」

イリスヴィア「多分、ずっとこんなやり取りをしていたんだろうな・

・・

訂正、不等号の方向が反対だった・・

## 第5話 「アツサの翼 心のソルジャー」（前書き）

えーと、更新遅いです。本当にすこません…

あと、やっと気付いたのですがPV23000 ポニーク3000を突破していました！！ありがとうございます！

思っていたよりも沢山の方が読んでくださっているようで私も、涙が溢れて…

更新頻度をあげるように頑張りたいとおもいます！！

## 第5話 「アリサの翼 心のソルジャー」

「これはここをいじればいいんだよね?」

「うん、正解。でも、そろそろ休んだら?」

フレシアとの一件以来、アリシアは妙に明るく振る舞っている。誰が見ても“フリ”なのはわかるのだが誰も止めるとは出来ない。

「む、お兄さん。早めに完成させておきたい、といったのはお兄さんだよ?」

「それは… そうだけど…」

お陰で今日中には完成しそうだし…

「兄様… ハーヒーです。」

「ああ、ありがとう心…」

こつもながらこつ部屋に入ったのかわからないなあ… 馴れたけど…

「お兄ちゃん!」アリサちゃんが来たよ!?

すずかの言葉と同時にドアが勢いよく開かれる。

「ドアが壊れるからあんまり力入れすぎないで? 知ってる人間しかいないから全力で動きたいってのもわからないでもないけどさ」すずかが全力で動くと普通に人間離れした動きになる。俺もすずかにつきあつて走り回つたりしてるから人の事言えないが…

「うう… 『めんなさい…』でもアリサちゃんが凄く怒った顔で…」

「…俺のせいだな…」

結局説明するの忘れてたし…

「アリシアちゃん、あとは任せたけど… ちやんと休んでね?」

8歳になつているとはいえたままだ子供だ。それに多分、精神的にも参つてゐるだろ？。

「…わかつた。お兄さん…」

多分…わかつてないんだね？」

「ちよつと…アンタ、なんで何も教えてくれないのよ！？」  
あつていきなりこの一言だもんなあ…

「いや、この前も非常事態になつてしまつて…喋りそこねただけだ  
よ。」

とりあえず喋る気は満々である。

「だからほり、可愛い顔に戻して」  
なにやら少量の殺氣を感じた気がするが、今はなんともいえない。  
アリサを宥める方が優先だ。  
「う、うぐ…わ、わかつたから…あんまり見ないで…」  
拗ねた女の子に対して有効な手だといつのは実証済みだ。

「つまり、アンタ達は魔法使つて事ね？」

そういうて俺、すずかを指差す。アリシアと心は今、俺の部屋で作業の続きをしていた。

「うん、間違いない。」

アリサは頭がいいから説明が楽だ。

「で？ 私は使えるの？」

「うん。まあ、俺が造ったデバイスに限り…なんだけじ。」

アリサとすすかにもリンクカードアコアはある。ただし、最初の俺のようにはバリエジヤケットを開拓するだけで氣絶してしまはうだろうが…「へえ…造れるんだ。」

「…普通は無理だよ。俺だけの能力だからね…」

かなりの高値になるので自分専用のデバイスなんて造っていられない。アリサなら金的には大丈夫かも…

「で？ 私を魔導師にするつもりは…」

「あるよ。条件はあるけどね…」

最初からそのつもりだったし…性格的に友達の為に命を賭けられるともわかっている。

「…条件？」

「俺の計画を邪魔しない。それだけが条件。まあ、なのははちゃんに時期が来るまで秘密にするだけだよ。」

秘密…というのが気に食わなかつたのかアリサが目を鋭くした。

「なのははちゃんも秘密にしてるし、いつまでドッキリをしたいだけだから。」

アリサを安心させるように笑う。多分、アリサはドッキリとかが好きそうな性格なので…

「わ、わかったわよ…べ、別になのはを驚かせたいとかそういうのじゃないんだからねつ！？」

わかりやすい返事をありがとづ。

「よし、じゃあアリサちゃんには今造っているデバイスをあげよう。

」

「どうかアリサにあげるために造っていたんだし…

「いいの？」

「当然、俺としても味方が増えるのは嬉しい事だからね。」

「仲間がないとやりたいことができないし…

「兄様っ！ジユエルシード以外のロストロギアの反応がありました！」

心が俺たちの居る部屋に入ってきた。…アリサが呆けた顔をしているな…

「紹介するよ。アリサちゃん、俺の妹の心だよ。」

心が俺の紹介に応じてアリサにぺこりと頭を下げる。

「『紹介いただいた神な…すいません、以前の名を言いつこうになりました。』月村 心です。よろしくお願いします。アリサちゃん。」

一瞬、俺たちの本当の苗字を出しかけた心だったが問題なく笑みを浮かべながら自己紹介をした。

「…力ナエよりはましね。私の名前はアリサ・バーニングス、よろしくね。」

何が“マシ”なのかはわからなかつたがアリサも素直に心の挨拶に応じた。

「…思っていたより、鋭い人ですね。」

「すずかも気付いているわよ。まあ、気付かないのは本人だけ…み

たいだし?」

そういつてアリサは俺を見た。ビックリしたこと。

「兄様はまだ気付いていらっしゃないようなので、わかつた所で私がお教えします。」

そして重要なところではないのだから?心は状況判断ができる子だ。不利になるようなことではないのだから。

「…ヒントを言えば、キョウウスケさんと私と兄様に当て嵌まる…と思います。」

転生組に当て嵌まる…?。

「意識の問題なので、あまり気になさらなこよつ」と、ロストロギアの件ですが」

「ん?」

「なぜか、なのほひやんやフロイドひやんは気付いていません。」

「気付いていない…?」

いや、もしかして…これは俺たちも偶々気付けただけでは…?

「どうやって見つけた?」

「兄様の工房ワーカーにある機械が…あ

機械しか反応できないロストロギアなのか…?」

「探しにこつてみるか…」

となると…もしかしたらひょいと飛ぶかもしれない。

「心はアリシアちゃんと一緒にいて、俺はすずかちゃんと…アリサちゃんも来る?」

「へ?でも私、魔法は…」

「…見るだけなら問題ないと想つ。多分、何かを乱すロストロギアだと思うから。」

気付けないのは恐らく気配が乱れているからだと思つ。

「…わかった。行くわ」

「反応は…この辺だつたけど…」

場所は山の中。空中から探してみたけど空中ではわからなかつたので地面に降りてみる。

「お兄ちゃん、あつた？」

すずかは既にアルビオンを起動して蒼い盾を数枚宙に浮かせていた。

「見つからなかつた。歩いて探すしかなぞやつ…」

少しウンザリしながら周りを見る。

木、木、木……とりあえず木と草しか見当たらない。

「ウソ…」の中を歩いて？探知用の魔法とかないわけ？

アリサも少しウンザリした表情をしていた。探知用の魔法はあるが…

「駄目なんだよ…魔法を広範囲に展開しようとしたら途中で消えたんだ。せいぜい10メートルくらいが範囲かな？」

結論は変わらず歩き回る方法しかないといつことだ。

「うえー…」

「大丈夫だよ！アリサちゃん！10メートル以内に入れば見つけられるんだから…！」

すずかはどこか楽しそうにアリサを慰めている。

「…何か…来る？」

俺の聴覚は既に音の振動が届く範囲ならどれだけ小さな音も聞き逃さなくなつている。だから…草の上を進む音を正確に聞き取るこ

とも出来る。

「すずかちゃん！右から来る！」

「わかった！！」

すずかが右を向く。そして俺の背後から近づいてきたモノに俺は吹き飛ばされた。

「え！？」

「つつ…痛い…」

バリアジャケットのおかげか大したダメージはないが思わず口から言葉が出た。

「キヤッ！？」

アリサの短い悲鳴。しまった…！

「アリサちゃん！？」

すずかと声が重なる。アリサの方を見ると尻餅をついて狼のようなものがアリサと対峙していた。

「キヤリースロウ！」

『Sonic move!』

狼とアリサの間に移動する。

狼の大きさは大の大人2人分ほど、恐らく口を大きく開けるだけで子供サイズの体なら一飲みだろう。

「アルビオン！クロスファイアー！」

『Cross formation・Fire!』

いつの間に取り囲んだのか、狼の周りにアルビオンが7枚浮いている。

蒼い魔力光が狼を襲う。

しかし、狼は高く跳躍して一瞬でアルビオンの十字砲火を抜け出した。

「な！？避けた！？」

「とかなんだろう…さつきから変な感じが…

「近づいてみるか！！」

地面を蹴りまつすぐ狼に向かつて突つ込む。

「雷光一閃！」

狼の懷に潜り込んでキャリースロウを狼の額に向かつて突き刺す。音を置き去りにしながら狼の額を超高速でキャリースロウが通り抜けた。

「あれ？」

グキリと腕の関節が外れる。というかこの技、速さを求めすぎたな……

『現実逃避している場合ではないぞ！主……』

俺の腕は狼を通り抜けている。つまり、俺の目には大きな狼にしか映っていないが実際のサイズは……

狼は体を沈めて一瞬タメを作つて……

「アルビオン！」

『Round shield.』

アルビオンが俺と狼の間に入つてきて狼の体当たりを弾ぐ。

「キャン！」

弾かれた狼から黒い何かが飛び出した。

「ロストロギアかつ！」

封印しようとしたキャリースロウを向けた瞬間……

「ストップ！カナエ！」

アリサが俺を止めた。

「どうかしたの？アリサちゃん。」

「これ……私を呼んでる？」

アリサが呟くと黒い塊が輝きを放つた。

Side 心

私は兄様を見送った後アリシアちゃんを見ていたのだが…正直な話をするととても暇だ。いや、兄様が頼んだことの重要性もわかつてはいるのだけれど…

アリシアちゃんを見る。

「…………」

黙々と真紅の指輪をいじくっていた。

「（やはり、暇なのは性に合いませんね…）うーん…やるこじがないのは…」

次に自分の周りを見渡す。機械・機械・機械・

「…………」

昔から機械に関わつていいことはなかつた。…機械音痴だから。

「触つたら壊れる…とかいう素敵体质ではないんですけどね。」

何気なしにさつきロストロギアの反応があつたと知らしてくれた

モニターを見る。

「あれ？」

反応が2つ、一つは兄様の行つた方で間違いないのだけれど…

「アリシアちゃん、このモニターのつて…」

「え？…あれ…？2つあるね…同タイミングでロストロギアが2つ

…？ジユノルシードじゃないみたいだし。」「

アリシアちゃんも言つので間違はないのじょうね。

「いってきます。アリシアちゃん、さつまいもでって言つたところまででちゃんと終わつてくださいね？」

「はーい」

兄様と一緒に見たアニメのキャラクターの超能力…瞬間移動をもつて目的地に移動する。

出た場所は海上…！？

「ラスト…！」

『Stand by ready. Set up.』

落下しながらラストのバリアジャケットを展開する。

黒い着物のようなバリアジャケット。そして手の先まで隠れた袖の中にあるラストの腕輪から伸びた銀色の鞭（バルディッシュの刃部分と同じ感じ）。

「わかりますか？ラスト」

『いいえ、わからないわね…でも気配はするわ。』

「あれ…？声…？誰かが翻訳能力持つていたのかしら…？」

いつの間にか増えている自分の特殊能力に驚きながら周りを見る。

海上に出たのに気配だけ…？

『だれか来るわ！』

ラストの忠告通り遠くから桃色の魔力光を発しながら誰か…ごめんなさい。わかつてます。なのはちゃんですよね…

「あなたは？」

とりあえず先手を取る。

「ふえ？わ…私…高町なのは。あなたは？」

「…上梨心。見ての通り魔導師よ。」

ため息をつく。「めんなさい、兄様…関わっちゃいました。それ  
にひとつさの判断が出来なくて昔のの苗字を使つてしましました…。  
本当は神無の意味なんですけど…今は関係ないですよね…

「よ、よろしくお願ひします。」

よろしくしたくありません。と、内心思いながらもなのはちゃん  
に笑みを浮かべる。今は関わりたくないながつたのに…

「よろしく、なのはちゃん。」

周りを見る。未だにロストロギアは見つからない。

「心ちや…つて…?なのは…?」

馬鹿が来た。兄様いわく…ですけど。

「あなたはこの前の…!…といふがなんで私の名前を…つてお一人と  
も知り合い…?」

なのはちゃんが混乱のあまり変な踊りを踊つてている。  
といふかこの人なんでやつて来たんですか?

「気配を感じたからここに来たんだけど…」

「だからといつて名前を呼ぶなんて…」

面倒になるだけだといふのに…

「あ…? みなさん…来ます…!…」

なのはちゃんの声と同時に私たち3人の間に白く輝く玉が現れた。

「つ…とにかく…封印を…!」

ラストをロストロギアに向けた瞬間ロストロギアが光を発した。

「あやつ…!」

「うわつ…?」

私たちは光に呑まれた。

ふと、気がつくと夜の公園に一人でブランコに座っていた。…あれ? 体が動かない?

場面が移る。

「ただいま…」

この体の主だろうか? 体が勝手に動く。私の体じゃないのは間違いないみたい。

「……」

どうやら家に帰ってきたみたいだけど… 静か…

「……」

この体の持ち主は視点から見て幼稚園児か小学生一年くらい… だと思つ。この年で家に誰もいないのは些か寂しい。

「……」

誰も居ない。それが孤独だ。

孤独とは単純に一人だという意味もあるが… なにより恐ろしいのは心の空虚感。

理解できる。

なぜなら私もアレ以来一人だったのだから。

だけど、私はこれ以上の恐怖を知っている。だから怖くない。

今はただ、この体の持ち主が一人ではないことだけを祈つてあげよう。

Side なのは

バタン、と鈍く重い音がした。

「あれ？…開かない？」

狭く暗い、倉庫みたいな部屋の大きなドアはこの子の体では開けられないみたい。

「誰かー！開けてくださーい！…！」

ドアをガンガンと叩く。でも…

「誰かー！」

ドアは開かない。1分…2分…時間が経つとともにこの子の不安が大きくなつて私の心にもその不安が入つてくる。

「誰かあーつ…開けてつ…！」

10分20分…どれだけ時間が過ぎているのだろうか？でも、誰も助けに来ない。

喉が痛くなつてきた。痛みも私に伝わつてくるみたい。

「ダレカ…タスケテ…」

5時間が過ぎるころには喉がかれてドアを叩いていた手からは血が始まっていた。

6時間…7時間が過ぎた。

私の頭もボーッとしてきた。この子より年が上だったから長く耐えただけ、ここからひさこの子と同じ状態になる。

暗い、狭い…寒い…部屋は寒くなつて私の頭をもつとボーッとさせる。

お腹が空いた…でも食べるものはない…

長く…私が考えるより時間は過ぎていかないのかもしれない。

誰も助けてくれない。誰も来ない。僕は誰にも見つからずにここで死んでしまうんだ。

そんな思いが頭に響く。

「諦めちゃだめ…！」

私はそれを聞いて思わず叫ぶ。でもこの子には聞こえない。

そうだ、私はこの子がいるからまだ耐えられる。だけど…この子は一人で…

そう思つと、頭に沢山の言葉が流れた。

寒い、怖い、暗い、怖い、痛い、怖い、寂しい、怖い。

サムイこわいクライこわいイタイこわこサミシイこわい

わむこワフイヘリこワフイいたこワフイをみじこワフイ

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい…。

感情が流れる。私の昔の嫌な思い出を思い出してしまう。  
一人は寒い。一人は暗い。一人は痛い。一人は寂しい。一人は怖い。

私の頭には、何も考えられなくなつた

「居るのか！！？キヨウスケ！！」

でも、ああ… 」Jの子にも助けがあつたんだ。ならこの子は今も幸せだ。

Side キミウスケ

まず、感じたのが痛み。そして次の瞬間に痛みの種類を理解する。

熱い、アツい、アツイあつい

「テメエっ！心に手を出してんじゃねえつー！」

聞こえてきた声に、口の体の方は痛みを感じながらも嬉しく思つてしまつ。

「ああ？ オマエ、誰に口聞いてんだ？」

大きな影がこの娘を助けようと声をだした子供に向かっていく。

「カナエ！？」

口にするが声は出ない。さつき心と言っていたのでこの体は心ちやんのものなのだろう。

「お父さん止めてえつ！！」

大きな人はカナエに向かつて手に持つた何かを突き刺す。

「ク…が…殺す…てめえは絶対死んでも殺してヤル！！」

普段温厚なカナエからは信じられないような純粹な憎しみの殺氣。

「はつ、とんだ親不孝者だなあ？ オイ

やはり、この大きな人は父親なのか？

「止めてつ！ やめてえつ！！」

心ちゃんが叫ぶ。体を動かそうとすると手に熱が、いや、痛みが走る。

ギチギチという音とともに痛みが体中を駆け巡る。

大きな影はカナエの小さな体：8歳くらいの子供に容赦なく蹴りを入れる。

体が跳ねる。赤い液体が飛び散る。カナエの両腕、両足から血が飛び散る。

「ぐつ！ あ…動いちゃ…駄目だ…心…」

それでも カナエは心ちゃんを心配する。

心ちゃんの気持ちが直接俺に伝わる。 駆け寄れない、首に

巻きついている布が邪魔だ。手なんかいらない。足は動けばいい。

ただ…兄に向かつて走つていきたい。

「つ！」

でも動けない。腕には杭が、足には鎖が。

「動かないでくれ……心つ……！」

四肢を血に染めながらそういうカナエ。

「チ……」

大きな男は振り返りこちらに向かってくる。

「お父さ……つ……？」

アタマニ、イタミ。

「あ……」

呆気なく意識が暗転する。

「う……」

頭がくらくらする。

「……」

部屋に音はない。いや、どうやら誰かいるようだ。

ぼやけた視界に映るのは……

「あ……お兄ちゃ……え？」

四肢から血を流し倒れている兄<sup>カナエ</sup>。口からもおびただしい量の赤が漏れている。

「……あ……よかつた……生きてた……心……」

顔をこちらに向けて微笑むカナエ。そして、そのカナエの横に倒れている大きな人。

「うん、よかつた……うん。」

壊れたように咳いて肩を使ってこちらに向かって這つてくる。

「お兄ちゃん…？」

「『めん、ちょっと痛いけど…』」

カナエが近づいてきて。心ちゃんの手に刺さっている杭を口で抜く。メキリとカナエから何かが碎ける音がした。

「…………」

声もなく悲しげに微笑むカナエ。力尽きたのか心ちゃんの片手に刺さった杭を抜いたとたんに動かなくなってしまった。

「お兄ちゃん…！」

慌てて、痛いのに自分のもう片方の杭を血だらけの手で抜く。激痛。頭が割れそうになりながらも体が動く。

首に巻かれた布を引きちぎり、足の鎖は外せなかつたようなので床に刺さった杭を抜き鎖を足に巻きつけたままカナエに近づいた。視界の端に赤が映る。ゴウゴウ、パチパチと音をたてる。

「…逃げ…ここ…る…」

か細い声がカナエから聞こえる。

「…！」

駆け出した。家から外にぐる。肌が焼けるように痛み傷も空氣にさらされ狂いそうになるくらい痛む。

肌は白く、心ちゃんがどのくらい外に出れなかつたのかはすでにわからない。ただ、1日どころではないのは確かだ。

「誰か…！助けてください…！…！」

通行人に声をかける。少し大柄な男性が心ちゃんを見て慌てて近寄る。

「君、どうしたんだい…！…？」

「お兄ちゃんが、家に…！炎が…！」

心ちゃんの言葉はパニックになつて上手く伝わつていなかつたが、男性はなんとなくわかつたようで大急ぎで家中に入つていく。

男性が家からカナエを抱きかかえて出てきたところで、意識は再び暗転した。

Side 心。

意識を戻す。今のはなのはちゃんの記憶だ。あまりいい気分ではないが意識を戻すのは簡単だ。

「つ……モノ風情が……よくもやつてくれましたね……」

恐らく、過去の恐怖を抜き取り他人の意識で再生したのだろう。私の記憶も恐らくどちらか一人に流れてしまつた。

周りを見ると海に墮ちていく2人の姿が。

私は頭が訴える痛みをこらえラストを構えて原因となつたロストロギアに向ける。

「封印……！」

『封印……』

ラストの声が聞こえた瞬間、私は頭の痛みに気を失つた。

「心……」

意識を失う瞬間、暖かな声と感触に体を預けて。

俺は心を抱えながら周りを見る。

「もうちょっと遅かったらみんな落ちてましたね。お兄ちゃん。」  
すずかが片手で落ちていきそうになっていたキョウウスケの足を掴んでいた。というか相変わらず扱いひどい…

「うわっ……ちよっと……私の方も何とかしなさ……」  
私服のままなのはを抱えているアリサ。といつもその赤い翼はやはりネタなのだろうか。

「ロストロギアを取り込むなんてね……アリサちゃん。」

恐らく、魔力量ならキョウウスケを除いてここにいる中でトップになつただろう。

「ちよっと……しゃべってないで助けてつたら……まだ慣れてないんだから……」

アリサが叫ぶのを聞きながらワープの杖をなのはに向かって振る。

「アリサちゃん、色々調べたいことがあるから、今日は泊まつていつてね？」

「ちよつ！？勝手に決めないでよ！？ねえ！？カナエ！？」

俺は後ろから聞こえる声に苦笑いを浮かべながら俺が護らなくてはいけない子を腕に抱いて家に帰つた。

## 第5話 「アリサの翼 心のソルジャー」（後書き）

カナエ「…アリサちゃんの出番すくなかったね…」

イリスヴィア「あつはつは…すいません。」

キョウスケ「てこつか心ちゃんとカナエ…あれはこくらなんでも…」

カナエ「その話題、もう一回俺に振ったらいぶつ殺す。」

キョウスケ「ワカリマシタ！」

イリスヴィア「…やつこねば、そのつまびら番外編をやつと通つんだ。」

「

カナエ「へえ？」

イリスヴィア「完全にほのぼのとした話にするかいつもどおりにす  
るけど直接本編（？）に関係ない話にするか迷つてゐんだ。」

カナエ「うん？」

イリスヴィア「だから、どちらがいいか読んでくださつてこる方に  
お任せしようかなと。」

カナエ「なん…だと…」

イリスヴィア「え？ なにその反応。」

カナエ「む、無茶すぎる。今まで感想とかも全くないのに…っ！」

イリスヴィア「…えーと…どなたからもなんの反応もなかつた場合お流れ、といふことで」

カナエ「なんて…無茶な…」

イリスヴィア「さあ、さあ！ 気を取り直して次話の予告…！」

キョウスケ「今日こそ俺だな「第6話 わかりあえない気持ちなの？」 つてオイ！ これまさか？」

イリスヴィア「ではまた今度～」

第6話 「わかりあえない気持ちなの？」（前書き）

PV30,000アクセス ユニーク4,000人突破！

ありがとうございます…っ！これからもよろしくお願いします！！

## 第6話 「わかりあえない気持ちなの？」

アリサがロストロギアを取り込んでからしばらくたつた。  
本当ならそろそろなのはに對しての不満が出るはずだけど…

「ああー！…もうー…すずかー当たりなセリフ…」

アリサのバリアジャケットは赤いロングコートで中に着ているのも赤い服に赤いロングスカートと全身赤だ。翼まで赤いし…しかも夕日でさらに赤く見えてるし…

「ふふ、当たらないよー」

すずかがアリサの刀型アーマードデバイス贊殿遮那…ではなく天切あまきりをギリギリで避け続けている。

アルビオンが空中に待機しているものの特にすずかからアリサへの攻撃はない。というかすずかが圧倒的にアリサより強いのですずかは遊んでいる感じだ。

「アリサちゃん！刀の振り方俺が教えようかって言つてるのに…」

そう、事の初めはそれだったのだ。俺がアリサにそう問うと…  
「べ、別にいいつていつてるでしょ！？……私が独り占めしたら3人に殺される…」

最後の方まで一応聞き取れているが…誰に殺されるんだろう…？

とにかく、アリサは俺に教わりたがらないのだ。そして一人で練習しているところをすずかが発見したんだけど…ぶっちゃけていうとアリサは周りが見えなくなっている。なのはの様子がおかしいところにも気付いていないようだし…一番弱いというのが思ったより心が負担に思つていいようだ。

そういえば、心のほうも調子がおかしい。

「ふえ？…どうかなさいましたか…？兄様。」

なぜか、やたらとスキンシップが激しい。今も俺の腕に腕を絡めて密着状態だ。オカシイ…なんで突然…

「…む…………ほおら アリサちゃん行くよ…！」

そしてすずかも俺を見て不機嫌になつて…。いや、というか不機嫌になるのはいいけどアリサが可哀そ…

「きやあああ！！？」

そしてアルビオンの十字砲火で撃墜おちるアリサ、本日6度目…

「…」、心ちゃん…勝負…つ！」

ああ、アリシアの様子もなんだかおかしかった…新しいストレージデバイスを作つては心に挑み返り討ち。ということを繰り返し8度目。何が原因なんだ…？

## Side キョウスケ

俺が月村家に訪れるとともに力オスな状態になつて…。

「…心ちゃん。」

力ナエと腕を組んで…心ちゃんを呼んでみる。

「キョウスケさん？…どうかなさいましたか？」

「いや、なんで力ナエにやたらとくつついてるの？…どう考えてもそれが原因でこの力オス状態が起つてるんだけど。」

いや、まあ…ある意味カナエも原因だけ…ところがなんで…」なんに鈍感なんだ?

「…こえ…その…恥ずかしい話ですが昔のことを思い出して…少し怖くなつてしまつて。実はこれは私が見ている夢ではないのか…と」心ちゃんがそういうながらカナエのことを泣きそうな表情で見ていた。

「…そういえば…俺が見たあの光景つて心ちゃんの過去…だよな?」  
「はい…」

過去を見てしまつたことに對してはすでに謝罪を済ましてある。しかし、実はまだ気になることがあつた。あの時の心ちゃんの気持ちは俺にも流れてきていた。なので分かる…あの時はまだ、心ちゃんはカナエのこと好きになつてはいなかつたはずだ。

「なんでカナエのことを好きに?」  
「…兄様のことを好きになつた理由…ですか。」  
そういつて心ちゃんは空を見上げた。

### Side 心

兄様を好きになつた理由を聞かれて私は生前のことを思い出す。

前世の名前は上梨 心、兄様の名前は上梨 刹季さつきだった。母は私が生まれて間も無く他界し父は私達を養うために一人で働いてくれていた…らしい。

らしい、というのは私が物心ついたときには心が弱つていて私達に暴力…いや、もうあれは虐待といえるレベルかもしない…ともかくそういう状態になつていていたので兄様が後で語つてくれたからだ。うん、今思えばあの司会者、私が自殺する前に殺しておけばよかつたかも。

それは置いて…と、そういうしているときにはあの事件が起きた。家が燃えたときにはあの通りすがりの男の人がいなかつたら兄様は死んでいたかもしない…後に探してもらつた時には消防士の方だつたということが分かつた。

そして、家が燃えた後に残つていたのは父親の死体。ただし、父親が死んだのは焼死ではなく喉を食い千切られてであつた。兄様がやつたのだけど…

もし、兄様があの男を殺していなければ私が死んでいたかもしれない。それは確か…だけど…うん、キヨウスケさんが言うとおりあの時に兄様を好きになつたのではない。いや、まあ…そのときから多少ブラコン気味ではあつたのだろうけど…

と、また話がずれました……命を救われたから好きになるなんて理由ではなくて、その後のことでの私は兄様を好きになつたのだ。

私はあの時、助けを求めるために外に出た。そう、私は動けたのだ。兄様はあの後、病院に運ばれて…一生を病院で過ごすことになつた。腕や足を深く傷つけられて体を動かすことすらできない状態になつてしまつたのだ。

一生病院に入院することになつた兄様だが…問題があつた。まず、お金の問題だ。それは国が私が仕事を始めるまで受け持つてくれたので問題はなかつた。

しかし、兄様の体は徐々に弱つていつたのだ。といつても前世で死ぬ4年ほど前くらいになつてやつと医師に聞いたのだけれど…そ

これまで私は仕事が終わり次第病院にいつて兄と面会していた。

仕事は忙しかったが兄様が救つてくれた命なので次は私が助ける番だとそこまで苦に感じていなかつたのですけど…

面会中兄様は私の話を「一二一二」笑いながら聞いてくれていたのだ。体中の幻痛に耐えながら。私はそれを知らずに兄様としゃべり続けていた。兄様がしゃべっている最中に倒れるまで…医師がいうには幼少期に体験した痛みを脳が完全に記憶してしまつていてそれが寝てるとき以外ずっと再現され続けていたというのだ。

私は兄様が田を覚ましたときに思わず聞いてしまつた。痛いならなぜそう言つてくれなかつたのか?と。

「心ひやんに心配かけたく無かつたからね。」

私はそのときになつてようやく氣付いた。兄様があの事件以来、私のことをひやんづけで呼ぶようになつていていたことに。

そして、そのとき氣付いたのだ。兄様の近くには誰もいないと。

当然だ。幼少期から親も亡く、友達も居らず…親戚と呼べる人も居なかつた。

私は逆で一応だが育ててくれた人もいたし、学校にも行つていた。友達も居たのだ。

「兄様、遠いです。……遠慮なんか…なさらないでください…」

そして、私はこの口調になる。命を救つてくれた、その代わりに働く?…そんな私の自己満足だ。兄様がそうしてくれ、と頼んだ

わけでもないのだ。

外の世界を知らない。友もない、親も居ない……。独りだ。孤独……いや、私の存在が最後の砦で……体を蝕む毒でもあつたのだ。

私が来るたびに無理をして起き上るのは何故か？簡単なことだ。私が来なればただ痛みに耐えるだけになる。

私の話を痛みに耐えながら一コ二コ聞くのは何故か？人との接触がないのだ……ただ一つの接触が何より嬉しかったのだろう。

私を呼ぶときの名前がなぜ遠いか、近づきすぎれば心配させ……逆に会えなくなるからだ。だから、心を離して名前を呼ぶ。だけど、今ならわかる。兄様が独りだとわかつた後なら……兄様はなにより、人を求めている。

なら、私はどうすればいい？どうすれば今度は私がこの人を助けることが出来る？

「こ、心ちゃん？な、泣かないで？俺は平氣だから。遠慮なんかしてないから。」

簡単だ。私が居ればいい。今まで以上に、命を捨てて助けてもらつた命だ。なら、私の全てを使って貴方と共に在ります。

「……絶対に、これ以上……離れないでください。」

Side キョウスケ

心ちゃんは生前の出来事を語つていった。  
あれ？……でも、今のいつ好きに……？

俺の顔を見て何を考えているのかわかつたのか心ちゃんは少し苦笑いを浮かべた。

「ええ、私が兄様を好きになつた理由は単純に…」

一息おいて心ちゃんがカナエを見る。

「一緒に居すぎただけですね。」

だからこそ、幸せな今。昔の悲劇を思い出して再びカナエと離れるのが怖くなつたのだろう。恐らく、もう彼女達を齎かす存在は居ないというのに…

「あれ？キヨウスケさん？」

すずかが俺にやつと氣付いたようだ。うん、カナエの少し後ろに居て、すずかがカナエをチラチラ見るたびに視界には入つていたはずなんだけどねえ！？

「ん？アンタは？」

アリサとは初対面、アリサは俺に近づいてきて…

「カナエと心よりマシ…というか普通ね。馬鹿つぽそうだけ…心もちょっとだけ…つて感じだし、そろそろなくなると思つから…あとはアイツだけね」

何かに納得したように、そして何かを確認してブツブツと呟いて一人の世界に入った。

「どういうことだ？」

心ちゃんが俺の横に来て小さな声で説明し始めた。

「…この世界の人間に対しての考え方です。私はこの世界の人たちに…一人しか知らないはずの個人情報プライバシーを知つてることに負い目を持つていますから…その…話すときに引け目がある…ということを

見破られてしまつてゐるようです。あ、もちろん引け目があるってことだけですけどね。」

小声を聞きながらアリサの他人を見る目に驚いた。一目で見抜くのはす「」。…そして俺は馬鹿ですよ。そんなこと考えもしなかつたですよ。

「兄様は、それが強すぎるんです。だから未だに皆さんに対して心から接していない…」

なるほど…でも…すずか達が可哀そつ過ぎないか?

「…そこは皆さんが何とかすると思つますよ。少し、妬いてしまいそうですが。」

心ちゃんは晴れやかに…言つてくれたらいい話だつたんだけどなあ…日に光がない…

「みんなで幸せに仲良く暮らしたい。それが兄様の幸せにもなるし、私の幸せにもなる。だから…早く兄様には本当の気持ちでみんなに接して欲しいです。」

本当に…よくできた妹だなあ…

「…あ、なんでここに来たのか忘れてた…」

俺がここに来たのは理由があつたのだ。

「カナエ!!」

「ん?」

カナエが振り向く。遠い、か…それだけじゃない気がするな…

「なのはちゃんの様子が変?…」この時期は元からそつなる予定だったはずだけど…」

「いや、それにしてもおかしいって。多分だけど…誰もなのはに声をかけていないんじゃないのか?」

そう、一人に戻つた。いや、一人の恐怖を再び思い出したような…

「そうか、この間のロストロギアの……」

「過去を見せる?…トラウマが蘇ったとか…か…それなら…適当に声かければいいかな?」

違和感を覚える。適当に…?なぜ、その言葉をつける必要があるのだろう。

「……………やつしてやつてくれ。多分戦闘時に何かやらかすかもしないから。」

「そうだな。それで原作が狂う…とか笑い話にもならない。」

違和感の正体に気付く。いや、心ちゃんの昔話を聞いたから気付けたのか。

「オマエ、なのはの心配はしないのな?」

「心配してると。なのはちゃんがやられたら大変だ。」

力ナエは自分の知らない話になるのを恐れているようだ。そしてそれは…この世界の人間を未だに人間として認めていない…ということにもなる。

「…そろそろフェイトとまた戦つんだろ?…見てくる。」

「いや、俺が声をかければ大丈夫だから」

ゲームのように簡単に言うな…イベントをこなせばいいってか?

「じゃあ、行つてくる。みんな!結界の外に出ないよ!にー…なのはちゃんに見つかるからね。」

「「はーい」」

みんなにも好かれているのに…本人は遠い…ってことか。

「「はーい」」

なんか、嫌な予感するし。

マンションの屋上から魔力を探す。地球上には魔導師が少ないから探すのは楽だ。

「見つけた。」

俺はなのはの居る方に向かってマンションの屋上から隣の建物の屋上に飛び移る。さらに隣、さらに隣と常人ではできない動きで跳んでいく。

うん、身体能力だけでできるようになつたときは自分も化け物になつたなあ……と思つたものだね。

ちょうどなのはの魔力の近くに到達したので一番近くの路地裏に飛び降りる。建物と建物の壁を蹴つて減速しながら。だつて、ノーフリッションド降りたら痛いし。

そして、目的の茶髪を見つける。いや、なのはだけじゃ。

「あれ? こんな夜になのはちゃんは何をしてるの?」

「ふえ! ? か、カナエくん! ?」

どうやら携帯で何かを見ていたらしく俺の声にとても驚いていた。

「え、ええと… カナエくん… 何をやつてるの?」

「買い物、ほら。俺もなのはちゃんと同じで機械好きだし。」

もちろん原作知識だけど… すずかに聞いたとかにしてればいいか。

「あ、そうなんだ。……」

微妙な沈黙。確かに落ち込んでるな。といつか焦つてる感じだ。

「どうかした？元気ないけど。」

「えー？ううん！なんでもないのー！」

ブンブンと頭を振りまくる。もげそつだ…頭が。

「そう？でも、何かあつたら相談してね。」

言った瞬間。大きな魔力を感知した。

「……うん、わかった。じゃあまた今度！そろそろ帰らないとみんなに怒られるから！」

なのはが走つて魔力の流れの方に向かっていく。

まあ、これでアリサとすずかの代わりになればいいんだけれど…

Side なのは

「レイジングハート！お願い！！」

カナエくんと別れてすぐにバリアジャケットを着る。

『なのは！ジュエルシードが近くにあるはず…見える？』

『うん、近くに居るよー。』

『あと、あの子も近くに居るみたいだ。早く封印をー。』

レイジングハートを構える。

「…」

フェイトちゃんがバルティッシュを構えた。早くしないと…

「リリカル、マジカル！」

レイジングハートがジュエルシードに向かつて魔法を放つ。

「ジュエルシード…封印…！」

私の魔法とフェイトちゃんの魔法が同時に浴びせられてジュエルシードは沈黙した。

歩いて近づいていく。

「なのは…早く確保を…！」

「そうはさせるかい…！」

上からアルフさんが飛んできた。

「…」

ユーノくんが魔法で防御してくれた。そして、防御が割れたところに居たのは…

「うあああああ…！」

すでに攻撃姿勢をとっていたフェイトだった。

Side キョウスケ

「なんで…？」

確かに自己紹介があつたはずだ。だけど…目に見えてフェイトに余裕がない。

「お前が…お前が居なかつたらもつと早くジュエルシードを集め

られたのに……」「

「つ！」

フェイトの大振りの攻撃をなのはは多少危うくだけど、完全に避けていった。

フェイトの余裕のなさは異常だ。何があつた？

「おはなしを

「煩い……」

フェイトがソニッケムーブでなのはの後ろに移動する。

「つ！ ディバイン……」

それに対してなのはは「ディバインバスター」の姿勢をとりつつ……

「あ……」

フェイトが空振る。そしてなのはがフェイトに向かつて……

「バス……つ！？」

「フラクタルバインド。」

灰色の結晶体がなのはを捕らえた。

「カナエ！？」

姿を変えてはいるが間違いない。

「どうして……原作どおりに進まなくなつた……？」

「つ！ 邪魔だ！！」

フェイトとなのはに間に現れたカナエをフェイトがバルディッシュで攻撃する。

「何があつた？ フェイト。」

「つ……」

一睨みしただけでフェイトをバインドにかけた。発動が……速すぎる？

「母さんの……調子が悪く……」

フュイトが虚ろな目で答える。強制…？

「…体力を使わせたからか…？…仕方ない…記憶を消してもう一度…」

その一言に、頭の中が怒りに染まった。

「ゼロシフト…！」

光速移動でカナエの前に出る。

「なに考へてる…！…ここにいるなのははゲームやアニメの人間じゃないんだぞ…！」

「キヨウスケ……？」

カナエはバインドを手放してすぐさま俺との距離をとつた。…なぜ？接近戦ならカナエのほうが上なのに…

『イタクア・クトウグア装填です…』

両手に蒼と紅の銃が握られる。

「うおおおおお…！」

ネクロが出してくれた蒼の銃をカナエに向かつて放つ。

「つ！邪魔をするな…！…心のためにも原作を変えるわけにはいかないんだ…！」

カナエがラウンドシールドを展開してイタクアを防ぐつとする…が

「甘い…！」

イタクアの銃弾の軌道が小刻みに変わりカナエのラウンドシールドを避けてカナエに直撃する。

「…ゴーノとアルフはなのはとフュイトを連れて退け！」

「フュイト…！」

「なのは…！」

墜ちていくフュイトとなのは。たく…一番原作崩しているのは誰だよ…

「あつ！ジユエルシードが！」

ゴーはどうやらアルフにジユエルシードを奪われたらしい。

「よくもやつてくれたな…キヨウスケ…」

いつもの飄々とした掴みどころのあまりない笑みが消えた状態でカナエがこちらを睨む。

「…お前がわかつていなだけだ…ゲームじゃないんだぞ？」

イタクアを構える。なぜだろ、原作が変わったと気付いてからカナエにも余裕がない。

「…心の安全を確保するためにも…予想外の事態を起こしたくないだけだ。」

構えた俺に対してカナエは無手。…まさか…デバイスを持つていないのか？

「…そんなこと、心ちゃんは望んでいないだろ？？」

「つ…！わかつたような口を…つ…！」

小刻みな動きで俺に近づいてくるカナエ。そして余裕のなさはそういうことか。

「いけつ！イタクア…！」

一息に6連射。銃並みの速度と変化する軌道、これを避けられる人間は確実に人間をやめている。

「くつ」

悪態をつきながらカナエは正面からギリギリの所でイタクアの銃弾を回避した。というか、人離れしそぎだろ…そういえば俺、カナエの能力道具作成しか知らないな…身体能力強化か？

懐に飛び込んできたカナエは両手を前に構え…殴る気か！？

『イタクア破棄、ブレードトンファー装填！』

ネクロのフォローのおかげでいつの間にか放たれたカナエのパン

チをブレードトンファーで防ぐことができた。

「… というか、なに？ このチートスピード…

「クトウグア、神獣召喚…！」

紅の銃が咆哮をあげた。

「つ… 召喚…！？ 仕方ないか…」

展開された炎の化身を相手にカナエは後ろに下がった。

「良かつたな。 キヨウスケ… 強敵認定だ。… エクスカリバー。」

そう呟いたカナエの手に持たれていたのは黄金の聖剣。 あれって… 某運命に出てくる超火力聖剣じや…

「約束された勝利の剣…！」

「クトウグア…！」

神獣形態のクトウグアが身を盾にして俺を護る。 大丈夫だ。 このままなら、耐えられる。

「俺に、魔力切れがあると思うなよ？ 一連撃目だ！ 約束された勝利の剣…！」

一度目の閃光にクトウグアと共に光に呑まれていく。

「ゼ…」

俺が発した言葉も光に呑まれた。

「ちつともどうやつて元に戻せば」

閃光に呑まれたキョウスケは放つておいて原作の流れに戻す方法を考える。

「……一人の人間……か……みんなには遠くから接しすぎたな……」

冷静になれた今ならキヨウスケの言つていた意味もわかる。心の安全といいつつ、心が離れていくのが怖かつただけなのだ。俺が健康になつた以上…心が俺と共に居てくれる確証もないのだ。

「でも、それでも…心と一緒に居たい…前世では迷惑をかけすぎたから…」

拳を握る。俺は戦う力を手に入れた。

「俺が居て、窮屈かもしれないけど、安全になつたら離れるから、それまでは、絶対になにがなんでも、誰を犠牲にしてでも守り抜かなくちゃ」

「心ちゃんがそれを望んでいなくてもか？」

「つ！ まだ…」

一心ちゃんはみんなで笑える未来が欲しいっていってた。」

「そうだろうな……心は優しいから……だけど……俺がいたら心は俺に遠慮してしまう……だから、心が安心して暮らせる世界を作るまで……俺

後ろを振り返るとキヨウスケが呆れた顔をしていた。

「お前は…難しく考えすぎだ…うん、最近のアニメの悪者みたいだ。」

最近のアーティストの悪徳…～ああ…なるほど、悪徳なりの正義…ってことか?

「悪者でいいや…それが…心のためになれるのなら。」

「本当に……お前たちは互いのことがわかつていてるのにわかつていいないんだな……」

カナエも心ちゃんも、ここまで互いを想い合つていてるのに相手が離れるのが不安で、相手が不幸になるのが嫌で必死になる。

「ネクロ……相手に記憶をぶつける方法はあるか？」

『できますよ？相手の抵抗が薄れているときなら簡単に。』

「つまり、アイツを気絶させればいいんだな？」

『はい』

「そうとなれば……脳間の心ちゃんとの会話……の一部省略を送るわ。うん、心ちゃんに黙つてカナエのことを心ちゃんが好きだと云うとを伝えたら殺される気がする。そこは省いて。」

「お前が悪者でいいってこうのなら……最近のアニメの主人公っぽく手荒に考えを直させてやるよ……」

カナエがまた構えを見せる瞬間に……

「アトラック・ナチャ……」

蜘蛛の巣が悪者を捕らえる。

「なあ……ネクロ……こま、このタイミングで言いたい台詞があるんだ。付き合つてくれるか？」

『はい……』

「じゃあ、はじめよう……大馬鹿者を改心させるために。わかりあつために。」

「カナエ！今からお前に俺の記憶をぶち込む……脳間、心ちゃんが言つていた言葉だ……」

「な、何を……？」

「起きたら、みんなに謝れ！心ちゃんだけじゃなく…アリサやすずか…アリシアちゃんにも！」

手の中に何かを集めるようなポーズで構える。

『ナアカルコード送信…』

手の中に光が宿る。そのまま両手を広げる。そして、背後に浮かぶ五芒星の魔法陣。

「うおおおおおおーー！」

右手を天に掲げる。手から溢れる光が辺りを照らす。

「光射す世界に…汝ら闇黒…棲まつ場所無し…」

手をカナエに向ける。

「くつ…外れない…逃げれないか…」

再び手を振りかぶる。

「渴かず飢えず、無に還れ！」

そう、そんな暗い思いは無くしてしまつたほうがいい。

カナエに近づく。光の手を、カナエに向けながら。

「レムリアアアーーー！」

光の手はカナエに触れて…

「インパクトーー！」

『昇華……』

暗い思いをこの光で消し飛ばす。

触れた地点から大爆発。一瞬、全ての音を飲み込み光は広がった。空中でなかつたら地表が抉れていただろう。

『…やりましたね。記憶の転送も終わりました。…あとはカレをつ  
れて戻りましょう。』

「そうだな、ネクロ。」

俺はボロボロになりながらも軽く笑みを浮かべて氣絶しているカ  
ナエを背負つて家に戻ることにした。

「…というか、ムカつくな…さすが男の娘…ボロボロの状態で笑つて  
るとか普通なら気持ち悪い人間のはずなのに…」  
見た目が女だからか、かなり絵になつていた。

Side カナエ

氣絶している間にキョウスケの言つていた記憶が頭にながれこん  
できた。

確かに、俺は色々勘違いしていたのかもしれない。今でも原作通  
りに進めるのは間違つていないと思つてはいるが…もつと、この世  
界でちゃんと生きていこうと思えた。じゃあ、まずは…心配してい  
るみんなに起き上がつて報告しないとな。

「あ、やつと起きた… よかつた… お兄ちゃん」

「お兄さん… 大丈夫?」

「ちょっと、カナエ… 本当に大丈夫?」

「兄様… 私…」

一番近くに居た心の頭を撫でる。うん、周りが少しムスッとしているけど… その表情が自分を見てくれていると改めて理解した。だから、次は俺がみんなを見ていいつと想つ。

「ありがとう。… 俺、これから頑張つていくから… よりしくね。す… すか、アリサ、アリシア… 心。」

みんなは一瞬キヨトンとした表情になつたが、それぞれ可愛い笑みを浮かべた。

「「うん!」」

そのころ、キヨウスケは

「みんな… 一応俺のおかげなのに… つ…」

『さすがに… ボロボロはまづかつたですね…』

バインドで縛られた上でアリサとすずかとアリシア、心の4人にボコボコにされて放置されていましたとわ… める。

## 第6話 「わかりあえない気持ちなの？」（後書き）

キヨウスケ「なに……」のオチ……」

イリスヴィア「せっかく目立ったのにね」

カナエ「でも、俺はちゃんと感謝してるよ？」

なのは「あの……」

イリスヴィア「うおー！？ なのはが来たー！？」

なのは「私の出番……」

全員「…………」

カナエ「だ、大丈夫……俺が原作介入し始めたら出番増えるから！」

なのは「それって……いつ？」

カナエ「…………」

なのは「……ディバイーン……」

カナエ「ああ……どう、俺もギャグ要員に……」

なのは「バスター！……！」

イリスヴィア「さやあああああーーー?」

力ナエ「・・・あれ？」

なのは「・・・次回第7話』なのはとキョウウスケとクロスケ・・・  
とゴーノくんの邂逅』・・・なのー?やつたよー!出番つーーー!」

キヨウスケ「え・・・またおれ? これ死亡フラグとかじゃないよな! ?」「

## 第6話終了時設定（前書き）

設定です。

## 第6話終了時設定

上梨 かみなし  
刹季 さつき

男

力ナ工の前世。親の暴力から身体障害をひきおこしそのまま病院生活を約20年過ごし死去。性格の歪みは対人関係の少なさからかもしれない。

上梨 心

女

心の前世。実は前世では心が人気美人タレントという設定をはつきり出してやりたかったけど断念。ということでここでとりあえず情報公開。可愛くて綺麗で美人という容姿から男女からの支持が沢山あつた。

あと、恋人関係のうわさはなし。兄に尽くすよく出来た妹としても有名になっていた。

なお、遺書に色々と書いたらしく兄に知られれば羞恥心で死ねること。

アリサ・バニングス

女

覚醒したアリサ。ロストロギア、幻影蜃氣楼（読みはそのまんま）を取り込んだおかげで大量の魔力をえる。

デバイスは非人格の刀型アームドデバイス。名前は大切。

見た目は真っ赤、3倍の人以上に真っ赤。ヴィータといい勝負。

第6話終了時設定（後書き）

カナエ「あれ……？なんかできとどつな感じが……」

イリスヴィア「…………」

カナエ「おーい。」

## 第7話 なのせとキョウスケとクロスケ・・・ルナーハーの邂逅（前編）

やつとルナが復活しました……長かった……

そして二つの間にかPV4万 ユニーク6千突破といつ嬉しい事態

に。

本当にありがとや」それこそ。

## 第7話 なのはとキョウウスケとクロスケ・・・ヒローくんの邂逅

Side キョウウスケ

「いくら5月になりかけだからって一日中外に出てるのはすゞく寒いと思うんだ。」

俺こと式神キョウウスケは今、海鳴公園の茂みに隠れています。力ナード出した某魔法使いの透明になれるマントを使って。

なぜ、こうなったか?と聞かれると… いつも答へざるを得ない。悪魔があらわれた!と。

まさか、本心を出した状態がさらに黒化するとは思わなかつた。俺としては多少態度が軟化するかなあと、いや、テレとかではなくて。というかヤメロ。女顔だからってテレられたらすゞく困る。具体的に言えば似合つてるせいでもジで可憐いとか、うん。自分で言つててスゲエキモいからこれ以上の自爆はやめる。

「… IJUでの勝負に介入しろ。とか… 鬼畜すぎる…」

ここは初めてクロスケ…クロノ・ハラオウンが出てくるシーンだ。つまり、管理局にアンノウンのまま関われと言つてきているんだ。これを悪魔といわすしてなんという。まあ、いざとなつたら頼つていい。と言つてきていたので何か対策はしてあるんだろうけど…いや、なんだろう。頼つた後も碌な結果にならない気がしてきたぞ?

『ご主人様! 来ましたよ!!』

ネクロの言つとおり桃色の魔力光と黄色の魔力光が近づいてきた。

Side なのは

「あれ？」

ジュエルシードの気配を感じて向かつた先には既に封印状態のジュエルシードがあった。誰が封印したんだろう…？

「なのは…！」

『flyer fin.』

ユーノくんの声と一緒にレイジングハートが私を空に飛ばす。

「つーフェイトちゃん…」

「くつ、外した…つ！そのジュエルシード…私が貰う…！」

フェイトちゃんは焦った様子で私にバルディッシュを振つてくる。でも、そんなに焦つた振り方じゃあ…

「当たらないよ…フェイトちゃん…！」

空中で宙返りして避ける。

『Divine Shooter.』

さらにディバインスファイアを開いてフェイトちゃんの周囲を囲む。

「この前の人があつてた…フェイトちゃんのお母さんのことも含めて…お話、してくれないかな？」

「煩いっ…！」

そういうつてフェイトちゃんはバルディッシュを振る体勢になる。

「シューート…！」

フェイトちゃんがバルディッシュを振る前に待機させたスファイアでディバインシューターを撃ちこむ。

爆発音と爆煙でフェイトちゃんの姿が見えなくなってしまった。

「なのは、これはもうスファイアを待機させた時点で勝ちだつたんだ

からちよつとは手加減しても良かつたんじゃないかな?「

爆煙が晴れたその先に、今までの戦いで2回合つた男の子がまたそこに居た。

「え…?え?」

どうやらフェイトちゃんは無傷のようだ。多分、あの男の子が護つたのだろう。ただ、なんでお姫様抱っこなのかな?

そして、助けられた本人であるフェイトちゃんも助かつたことと今の体勢に対して混乱した表情でいた。…と、いうか加減はしたよ?…ちよーっとおはなしを聞くために気絶してもらおうと思つてだけだから。

「バルディッシュ、武装形態解除コロシク。俺は戦つ気はない…ただ、プレシアさんのお体調が悪くなつたつていうのはここに居るこの子、なのはちやんのせいじゃないつていうのはわかつてくれ。」

「え?なんで…母さんの名前を…」

「…えーと、秘密?」

「…えーと…怪しい。す、ぐく…怪しい。」

「と、とにかくここに居るこの子のせいじゃなくてさ…えーと、うわ…説明しにくい…」

男の子が考へていてる間もフェイトちゃんはお姫様抱っこ、冷静になってきたのか混乱の表情ではなく恥ずかしさで顔を赤くしている。…私もあるは恥ずかしいと思つ。でも考へてるから話しかけられなさいし…

「俺の知り合いの…」

「そこまでだ!!!」

Side キョウスケ

「ええー……」のタイミングー？」

思わず呆然と呟く。そしてフェイトは新しく出てきた魔導師の黒髪の少年を警戒して遠くに離れた。

「僕は管理局の執務官クロノ・ハラオウンだ。」

「管理局!? 逃げるよ! フェイト! ! !」

「あ、居たんだ。アルフ」

「まつて! フェイトちゃん! ! !」

「ちょっと、君達…僕の話を…」

「く、その銀髪のボーヤ! こんど会つたら容赦しないからね! ! ! な! ? 待てつ! 逃がすわけには… ! ! !」

なんて、カオス…つ! !

結局フェイトとアルフは逃げてしまった。いま少し痛い空氣です。

「コホン…えーと、君が高町なのはだね? 現地協力者の。」

「な! ? なんで名前を…つ! ! !」

場の空氣(クロノに任せたのはとつてもアレだが)を整えたクロ

ノは聞き捨てならないことを言つた。

「うん? 知らされてないのか? …地球生まれの執務官が現地協力者

である君達の名前をあげたんだが……」「

「お、俺の名前も知つていいのか！？」「

クロノはフムと顎に手をあて一瞬考えた後何か思い出したような表情を浮かべた。

「ああ！ そうだった。サプライズだそうだ。いや、まあ、面倒臭そな表情で言つてたから本心かどうかわからないが……とにかく、上梨という名前に聞き覚えは？」

「……つ、こざとなつたらもなにもけやんとサポートしてくれてるじやないか……」「

顔が勝手に苦笑いの表情を浮かべている。うん、微妙に素直じゃないな。

「了解！ 俺はともかくそっちのなのはの方は管理局については何も知らないから説明してもらつていいか？」

「わかった。君達！」

クロノはこちらを黙つて見ていたなのは達を手招きする。

「色々現状確認したいからついてきてくれ。それと、もう一人執務官がいるんだが、キヨウスケ……君に会いたいらしい」

「は？ 俺に？」「

誰だろう？ まさか奴本人ではあるまいし……

「 じんにちは、キミウスケさん。」

一心  
：ちやん？

一兄様に貴方のサポートをお願いされました。

うん、それはわかった。わかったんだけど……

なんて俺、首絞められてるのかな……!!?

俺、今リアルタイムでお花畠が見えているんだが……！？

えてないか！？首括つて呪るのはロープで十分だ……つ……

「いえ、ただのハツ当たりです。兄様と一緒に居られないことに 対する。」

うん、なんとなくわかつてたがけ

Side なのは

時空管理局という組織についての説明を聞いた後、クロノくんがもう1人のあの銀髪の男の子を呼びに行つた。

「うーん… それにしても、誰かいたかな… ? 管理局の人なんて… 」

「おれは僕もか」と疑問がて、僕達の事情を悉く知つてゐるのか毫氣になるしね。

そう、ユーノくんが言う通りで私たちがジュエルシードを集めている理由まで知っていたのだ。

「それに…その…ゴーノくんが私と一緒にお風呂に入つてたことまで知つてたし。」

「い！？いや、それはっ…本当にゴメン！なのは…！僕も知らなかつたんだよ。最初は人の状態であつたと思つていて…」

「…私はいつの間にか男の子とお風呂に入つていたのです。それも同じ年くらいの…」

私が一番仲が良かつた男の子でもそれはない。…そういえばカナエくん何してるのかな？すずかちゃんとかアリサちゃんも…最近どこか上の空だつたし。

「あれ？…最近も力ナエつて言つ名前をどこかで聞いたような…どこでだつけ…？」

私達2人しかいないにしては広すぎる部屋にその咳きに反応する人間は居なかつた。

「…なにしてんだ？」

「ふえ！？」

いつの間にか銀髪の男の子とクロノくんが部屋に入つてきていた。

「なのは…寝てたよ…」

私の意識のないうちにどうやら人間形態になつていたらしいゴーノくんは苦笑いを浮かべていた。

「そういえば自己紹介がまだだつたなのは、俺の名前は式神キヨ

ウスケ。一応同じ年だ。」

「へ？あ、えーと…私高町なのは、年は…」

「だから知ってるって。」

私のことを知っている人に自己紹介って難しいと思つた。

「私は心・T・カミナシ…一応地球生まれの魔導師です。」

「ぶつ！」

となりにいた黒髪の女の子の自己紹介に噴出すキョウスケくん。なんでだろう？

「なのはちゃんには前に一度お会いしますよね？」

「あーーーあのロストロギアの時…！」

といひことは、もしかして私たちのこと調べたのは心ちゃん？

「『』めんなさい。あの時は私も少しパニックになつていまして…」

「あ、いえいえ…」

思わず頭を下げてしまつ。あれ？でも心ちゃんちょっとだけ私より見た目幼くないかな？

「…ああ、私は8歳ですよ。私が年下ですね。」

そういうながら笑う心ちゃんは私よりも…というよりすでに大人の雰囲気を醸しだしていた。

## Side キョウスケ

「よろしくお願ひします！！」

「えーと、なのはがレイジングハートを俺に向かつて構えている。うん、なんでこうなつた？」

「では、私達はあちらで模擬戦をしていますので…」

そういうて心ちゃんはクロノと一緒に別室に向かつていった。

なぜこいつなつたか…原因はわかるんだけど…

### 回想

「戦力確認…？」

俺たちの前に現れたリンディさんは少し考えるそぶりを見せて一

ツ「コリ」と笑つた。

「私達はあなたたちの実力をちゃんとしりません。どのくらいのことを任せられるか…」というのを早めに見極めておきたいの。

「いいですよ。だけどすぐに終わらせましょ。」

そういうて少し不機嫌（といつても他のみんなにはわからないくらいの）な表情で心ちゃんが訓練室に歩いていった。

回想終了。短いとか言つた、本当にこれだけだったんだからや。

「いいよ、なのは。はじめようか

『Z・Oサイズ展開！！』

手に漆黒の鎌を握る。自分の強さの具合はフュイトと同等くらいで戦つてやろう。今まで、まともに戦つてなかつただろ？

「デイベイーン」

『Buster』

「いつ！？」

情け容赦ないいきなりの一撃に反応できず思わず体を硬直させてしまつた。

『シールドビット展開！！』

輝く光が視界を覆いつくす。しかし、ネクロが出してくれた縁のシールドビットがデイベインバスターを完璧に押さえてくれている。

「くそ、いきなり容赦ないな…なのは…？」

シールドビットの先になのはの姿はない、一瞬疑問に思つたが

『Flash move!』

「デイベイーン！！」

「ゼロシフト！！」

すぐに答えは出た。高速移動で背後に回つて連続デイベインバスターを行うつもりだつたのか…

「後ろだ！」

でも、なのはは俺の背後に回つたはいいが俺のゼロシフト…亜光

速移動にはついてこられないか……このまま終わらせる……

未だに背後の俺に気付けていないのか俺がZ・Oサイズを振つても反応はない。

『Protection.』

しかし、俺の動きに対応したのはレイジングハートだった。振つたZ・Oサイズは魔力の壁に阻まれダメージが通らない。

「え!?」

やつと、反応したか。というか、ゼロシフトやベえ……0、01秒以下という使用条件を外れない範囲で動いても体が軋む。それに連續しようをすれば確実に体を壊してしまつ。……なのは相手に使うの止めようかな……

「ほれ、プロテクション碎けるぞ?」

「つ！」

呆けた表情になつていたなのはだがプロテクションが碎けるギリギリで俺のZ・Oサイズの範囲から逃れた。

「速い……それにフュイトちゃんより余裕がある……なら……つー……』

『Divine Shooter.』

8つのスフィアが宙に浮かぶ。といつか8つか……

「シューートーーー！」

「ネクロ一武器はZ・Oサイズのままいくから……新しい武器を開する必要はないぞ。」

『わかりました。ご主人様』

Z・Oサイズでスフィアを薙ぎ払う。しかし……  
(8つ全ては防ぎきれない……つー……)

「なら、当たりそうなものだけを防ぐだけだつ……」

そう決めてなのはに向かつて突撃する。

「つ～～！」

正面から向かってくると思つていなかつたようでののせの動きは鈍い。

「終わり…つと」

Ｚ・Ｏサイズをなのはに向かつて振る。

『Round shield.』

再びレイジングハートにガードされるが問題ない。

「押し切るつ！」

ラウンドシールドを碎いた勢いのままなのはを吹き飛ばす。… 加減はしたぞ？

「あう…負けちゃつたの」

そういうて吹き飛ばされたなのははにやははと笑いながら俺を見た。

「あの、よければまた訓練してくれないかな？」

なのはは少し恥ずかしそうにこちらの様子を伺つた。うん、といふか訓練はもとからしてやる氣だつたし。

「もちろん、こつちにセロシクな、なのは。」

そういうて俺はなのはに手を差し出した。

「あ、うん…よろしくなのつ…」

なのはと握手を交わす。と、そこでふと視線を感じながらに手をやると…

「うおつ…？もう終わつたのか…？」

「はい、ストレス発散するように一瞬で。」

心ちゃんがこちらを見ていた。その横でクロノが氣絶しているがそこは気にしないようにしておいつ。クロノ、ダセヒとか思つたけど。

「はあ…でも、兄様に根源退治のせいであえないと…仕方ない」とといえば仕方ないのですけど…私も行きたかったです…」

どうやら、未だにストレスは溜まっているようだ。しかし向かうことのないことを祈つておひづ。

心ちゃんの微妙な心境に気付いていないのかなのはは心ちゃんと模擬戦するといつ暴挙を口にした。

「……いいですよ。」

そして、嫌な笑みで答える心ちゃん……ああ、加減なしか……

「これがどうし！」

心ちゃんが2つのラストを使い器用に別々の軌道を描く線を銀色の鞭で生み出す。

「つ……避けれる気がしないの……だけど……」

なのはは一度さがつた。恐らくデイバインバスターを撃つために範囲外に逃れたのだろう。

「デイバイーン！！」

## 「フォトンショット・ブラスト!」

OK!

なのはのディバインバスターの構えが見えた瞬間心ちゃんは2つのラストの鞭部分から数えるのも億劫になるくらいの量の銀色の魔力弾をランダムな方向に撃ちだした。というか、これ俺も避けれ

気がしないんだけど…

『 Protection .』

しかし、その魔力弾はレイジングハートのプロテクションで防がれた。でも、心ちゃんの攻撃は未だに終わらない。この魔法を発動して約5秒間の間に恐らく100万くらいの魔力弾を生み出しただろう、そんな数の暴力に対応できる人間はそういない。

「うう…これじゃ防御以外できないの…」

なのはの言うことももつともだ。一瞬気を抜けばこの暴風に呑まれるとなると一度防御してしまった以上既に手詰まりだ。

「ラスト、3つ目。」

『 Yes .』

そして突然心ちゃんの前に現れる腕輪。どうやら、あのビームみたいな鞭部分は腕輪から出ているようだ。

「ピアシング！」

『 Shoot !』

腕輪から細い銀色の線…といつかレーザー？が放たれる。というか、これ終わつたな。

「きやあああああああ…！」

レーザーは呆気なくプロテクションを破り、破れた瞬間嵐のよつな魔力弾がなのはを襲つた。

（俺よりチートっぷりが酷い…心ちゃんも魔力無限？）

20メートルくらいの有効射程がある鞭にあの嵐のよつな魔力弾を生み出す魔法。そして最後の貫通力のある魔法。弱点があるとすれば味方も巻き込む可能性があるくらいか？

「…少しはストレス解消できました。ありがとうございますなのはちゃん。」

そういうて笑みを浮かべる心ちゃんに恐怖を感じたのは俺だけじゃないはずだ。というかクロノ「めんなさい。貴方は勇敢でした。

俺は戦う前から負けでいいと思つてしまつた。

「では、結果報告にいきますか？キョウスケさん。」

先ほどより少し機嫌のいい心ちゃんは1人でリンディさんのところへ向かっていった。

「……で、どうするんだ？」の状況…」

なのは……ダメージで気絶。

ケノア 同様の理由で復讐

こんな結果を残してアースラに来て一田田は過ぎていつたのであつた。

180

Side カナ工

「カナ工執務官、本当に君一人でいいのか？」  
目の前のおじさん…ゼスト・グランガイツは心配そうにこちらを

見ていた。

「かまいませんよ。それに管理局からの指示ですし…持ち合わせの質量兵器にも使用許可がおりましたし…俺の目的は排除です。本当は関わるつもりはなかつたんですが気が変わりました。やつらのせいでの子たちが不幸になつてたつて知つたので容赦するつもりはありません。他の人についてこられたある意味で足手まといです。」

「しかし、相手は反管理局の組織でもトップクラスの規模だ。質量兵器も持つている。その殲滅を君のような子供に…いや、違うな。子供というには君は強すぎる。が、君一人というのは俺は反対だ。つまり、俺一人で行う任務に同行したいということなのだろう。だけど…」

「今は、貴方のほうのことを考えてください。なにか怪しい雰囲気なんでしょう？俺が言うのもなんですが、貴方の部隊で強いのは貴方とクイントさん、メガーヌさんだけだ。貴方一人ではどうしようもないことが起きたときのために部隊全員の練度はあげたほうが多いですよ。なんなら今度俺も教導に参加しましょうか？」

暗に俺は必ず帰つてくるという言葉を込めて笑みを浮かべる。ハッドに来てからまだ数日だがゼストさんに会つてよかつたと思っている。この世界の人間と本当の意味で一対一で向き合つたときにこの人の理想は氣高いものだと思えたのだ。そんな彼に汚れた正義は似合わない。だから、彼には同行して欲しくないし。何より、命令はあるが個人的にもあの組織を許すつもりは全くないのだ。とりあえず、末端を潰していき情報を聞き出しながらトップを潰す。不死鳥と呼ばれる組織だろうがトップを見せしめにしながら殺してしまえば再生する氣にもならないはずだ。

俺の言葉の真意が伝わつたのだろう。少しゼストさんは困つたような顔をしたが笑みを浮かべる。

「わかつた。だが、今回の任務は特別なケースだ。管理局が殺人を

許可するほどの…それだけこの任務は重い…今までも局員が何人か死んでいる。…気をつけろよ。」

「ええ、彼女達のためにも死ぬわけにはいかないです。やるべきこともある。大丈夫ですよ。俺は強いですから。」

「ふ…そうだつたな。」

「そうやって俺たちは笑いあう。さて、俺もハッピーエンドのために動きますか。」

## 第7話 なのはとキョウスケとクロスケ・・・とコーコーくんの邂逅（後書き）

カナエ「出番少ない……」

キョウスケ「と、とか俺コーコーと会話したか？」

イリスヴィア「ある意味タイトルどおりだろ？」

カナエ「とか久々の更新について何かいうことは？」

イリスヴィア「本当に申し訳ありませんでした。」

クロノ「とか、僕の出番も少なかつたよ、うな……」

キョウスケ「心ちゃんにフルボッコだもんな」

クロノ「うぐ……しかし、それは君もだろ、う？」

キョウスケ「ぐは……」

カナエ「アホだな、お前ら……」

クロノ「ん？ どうした？ これを読め？ 次回、『それぞれの決戦  
へえ……珍しく真面目なタイトルだ』

カナエ「とか、さすがクロスケ。久々の更新で主人公である俺  
からタイトルコールを奪うとは……」

## 第8話 「それぞれの決戦」（前書き）

パソコンが復活したわけではないですが一応書けたので。

もし、今まで待つていてくれた方が居たのならお待たせしました。  
そしてどうもスイマセン。

## 第8話 「それぞれの決戦」

Side キョウスケ

「で？ なんで俺はクロノと模擬戦することになつたんだ？」

「こつちが知りたいよ… なんでわざわざ管理局から命令が…」

そう、俺とクロノは何故かアースラの訓練室を使って模擬戦をすることになつたのだ。いや、何故かつていつても理由はあるんだけどね。

「僕が認めれば執務官だなんて…」

管理局が俺の存在を知つて何らかの方法で俺を局にいれようとしているのはわかる。

だけど、いくらなんでもこの方法はないだろう。普通。

「僕自身は君を推薦してもいいんだが… なんだか複雑だな。  
(そういえば、何回かおちてるんだっけ?)」

そうなると、認めてもらうのに相応しい力をを見せなくては… クロノに申し訳ない。なら…

「とりあえず。俺達が驚かされた以上に管理局を驚かせる戦闘、データ送つてやろうぜ！」

『ご主人様、ネクロノミコン起動します！』

バリアジャケットを展開してクロノに相対する。

「ガンスレイヴ展開！」

俺の魔力は無限。ならば俺に出来る戦い方は多分これが一番正しい。

「多いな…」

俺と同じくバリアジャケットを展開したクロノはストレージデバ

イスの杖を俺に向かた。

「受けてみなつ！これが俺の…」

『私達ですっ！』

「…俺達の全力全開だ！」

Side カナエ

「ふふつ…キヨウスケたちの慌てる顔を直接見れないのは残念だけ  
ど…」

俺は目の前に突っ伏している男にハイエンドを向ける。

「ヒツ！しゃ、喋るから！」

「他のアジトはどこ？」

「み、南の森の泉がある場所だ。も、もういいだろうつ！？解放し  
てくれ！」

男は震えながら俺に視線を向ける。

「人間も四肢の骨を碎かれたら芋虫と大差ないね。」

男の震える様に少し心音が高鳴る。まだまだ…人間って頑丈だよ  
ね？

「他の組織の情報も教えてもらつね…」

「なつ… それは勘弁してくれつー殺されかけまつー。」

「ふふつ」

必死の形相で俺にお願いするのが少し可笑しくて思わず笑つてしまつた。

「大差ないでしょ？ 言わなければ今死ぬし… 管理局は、本当に危険な敵に対しては… 甘い組織じゃないよ？」

バンツ！

躊躇いなくハイエンドの引き金を引いて実弾を男の額に放つた。

「ふふ… ふふふふ… ああ、喋つたほうがいいよ。」

呆然とする男たちの視線を受けながら俺はどうやって情報を聞き出すかを考えていた。

反管理局組織フェニックス… 不死鳥の名を名乗る組織。構成員、規模どちらをとっても反管理局組織としては最大級の組織だ。しかし、それだけではなく… フェニックスは名前の通り… とまではいかないかもしれないが多少末端を制圧したからといって規模が減ることはなかつた。まあ、そこは局が甘かつたのもあるけど… それでも、とても厄介な組織に違ひはなかつた。

「管理局の人間がこんなことをして…」

「許されるよ？ だつて、そもそもお前たちなんていないんだもの。」

厄介な組織ではあるけど… 自分には関係がない。 そう思つていたんだが…

「それに可愛い妹分を不幸にしたあんた達には慈悲も『えるつもり

はない。」

最大の組織ということは他の犯罪者たちとも繋がりがあるということでもある。例えば…情報の交換…本来なら出回っていない機器の受け渡し。

「まさか、プレシア・テスタークサがお前達の操り人形だとは思わなかつた。」

正確には利用しているだけなのだが…それこそ大差ないだろ？。

「娘の死につけこみ、犯罪を唆し…ついでに管理局の目を奪わせる。…いや、末端のあんた達に言つてもわからないかな？ともかく、あんたたちのせいで不幸になつた娘がいて、俺はその娘の身内だつた。ただそれだけだよ。」

そういうつてまたもう1人の男にハイエンドを向ける。

「だから、ほら、死ぬ前に吐かなくちゃみんな殺すことになるよ？」

私たちがアースラに初めて行った日から数日。私は今、アースラの中にいます。それだけではなく、訓練室に来ているのです。

「はあっ！」

「うおおー！」

キヨウスケくんとクロノくんが先に来ていたようですね…というか、2人とも全力っぽいので声はかけません。危ないから。というかなんでこの2人はこう…仲が悪いような良いようなといつ状態を保っているんだろう？

「はあ…」

今日はキヨウスケくんと訓練しようと思つていたのに…クロノくんと仲がいいのはわかるんだけど…

「助けてもらつてばっかりだし…」

何度かジュエルシードを取りに行つたことがあるけど、その度にキヨウスケくんに助けられている。

「はあ…」

気付いたら、2人の戦いは終わっていた。

「兄様、兄様兄様兄様兄様…っ！」

会いたくて会いたくて部屋で転げ回る。たつた数日?兄様には4時間ごとくらいに会いたくなる。

キョウスケさんと戦つたらしいあの日から兄様は私達にとても甘くなつた。

私達というのが残念だがそれでも満足していたのだ。あの情報を聞くまでは…

「反管理局…組織」

思い出しただけでイライラしてくる。

「…兄様あ…」

自分でもビッククリするくらいの甘い声がでた。私の思考の割合は9割が兄様関係1割がその他だ。そういうえば、前の世界ではどうなつているのだろう?あの遺書が公表されているとなると死ねる…うん、恥ずかしさ的にも社会的にも。自分の容姿が優れているのは知つていたから芸能界でもかなりの人気がある方だと自覚している。その人間が遺書で超絶ブラコン宣言。しかも自殺、兄の死体の横で。

「兄様が知つたら私は死んでしまう。」

「何を?」

「ふえつ!?」

いつの間にか兄様が私に通信を入れていたようだつた。

「いつから聞いてました!?」

「…すつ」に可愛い声で兄様って言つたあたりから…」「あう～…」

死ねる。恥ずかしさで、そりや、私は兄様が好きで好きで普段から色々と危険発言もしていいるけど。羞恥心はある。

「正直にいふと可愛いて悶死できそだつた。」「

私は兄様に悶死です。（？）

「と、とりあえず。トップが判明したから一緒に来てくれると楽なんだけど…」

「行きます。私もイライラしていたんです。…ええ、殺しましょ。生まれてきた事を後悔させるくらいに。」

イライラの原因はプレシアさんに関する事2割、兄様と離れなくてはいけなくなつたこと9割だ。割合を間違えてる?私の思考は兄様の事でオーバーヒートです。

だめだ、最近あつてなかつたせいで5割増しで暴走している。

「頼もしいよ。じゃあ、こつちに来て。」

そういうて兄様との通信は切れてしまつた。

「兄様、兄様」

少し、ぐーるにならう。一度死んでから感情が制御できない。

でも、あと一言だけ。

「兄様大好きです。」

### Side キョウスケ

「合格だ。全く、こんなことしなくても…………あれ？試験をさせたら全く合格する気がしない。」

なんか、クロノが失礼な事を言つているような気がするが気にしない。というかできない。

「ゼエツ…ハア…ツ…なんで、そんなに強いんだよ…つ」

乱れた息を整える。デバイスが俺が知つてゐるクロノのデバイスじやないことも疑念だ。

「ん？心執務官が兄から僕に贈り物といつて渡されたらしい。」

力ナエかああ！

「ずいぶん馴染むんだ。このデバイス。それにこの残留魔力を再利用するためのシステムもすごく使える。S2Uでどうしようもない時に使うようにといつていたらしいが、これは過剰だな。」

どうりで、強い砲撃魔法まで使って来たわけだ。

杖型の黒いデバイスを嬉しそうに扱うクロノ。クロノって強かつたんだなあ……

「君は勘違いしてないか？君が得意なのは遠距離射撃だろ？それ

でもこの強さだ。誇つていい、それに力も出力も押さえているようだつたしな。」

「ただしだけど……」

「クロノ執務官。少しの間、私を戦線から外してください。別の任務が入りました。」

いつの間に入つて来たのかわからなかつたが心ちゃんが訓練室に入つて来ていた。後ろになのはがいるようだけど、なのははなんだかソワソワしている。

「わかつた。」

「では……」

短いやり取りだつたが、あの様子は力ナエ関係に間違いない。

「あ、あの。キョウスケくん。」

「ん? どうかしたか? なのは……」

真剣な様子で話しかけてくるなのはに俺も姿勢を正す。

「私の訓練に付き合つてくれませんか? 砲撃戦のやり方を改めて、フェイトちゃんにちゃんと勝ちたいから。」

「確かに、このなのはは原作のなのはに比べて実践経験が少ない。つまり、フェイトに一勝出来ないかもしれないのだ。フェイトの様子もおかしかつたからなんとも言えないが。」

「僕はキョウスケが合格だと伝えなくてはいけないから一人で訓練をしておいでや。」

「わかつた。というかクロノ、よくわかつたな。オーケーだつて。クロノがフツと笑みを浮かべる。どうしたというのだろうか?」

「君は考えが表情にでやすい。」

それだけいうとクロノは訓練室をさつていった。というか、そん

なにでやすいのか？顔に。

おもわず自分の顔をべたべたと触つてしまつ。

「あ、たしかにでやすいの。」

なのはの笑みになんとも言い難い気分になつた。

「そこまでか

「にやはは…」

「わらうなあー！」

なのはの頭を掴んで乱暴に撫で回す。なのはの頭が手の動きにあわせてグラングランしているのがポイントだ。

「はう～田一がまわーるのー」

なのはも俺が怒つていないのでわかつてているからか笑いながら撫で回されている。

「キヨウスケくん…回しすぎなの…」

「わ、悪い…」

なのはが目を回したので撫でるのを止めたのだが5分たつてもまだ気持ち悪いようだ。

「あとでディバインバスターのバリエーションを受けてもううの…」

「…………俺の寿命もここまでか…」

わりと深刻に呟く。魔力ダメージ、便利だけど痛いんだぞ？

Side カナエ

「兄様、到着しました。」

「ん、じゃあ、管理局の方に連絡入れてトップの抹殺…もとい、捕縛、次善で殺害の許可をとりましょか！」

「そうですね。抹殺…いえ、捕縛の準備をしておきます。」

なんだか相手の組織の結末が見えたような気がするが気にしてはいけない。それに、いくら能力がチートだからといって100%しない。というわけではない。

「あの、カナエ執務官…」

背後から声。今回の捕縛戦は俺達だけじゃない。管理局も俺達ならやれると思ったのか結構な戦力を俺に貸してくれた。邪魔なだけだが…まあ、いいだろう。

「えーと…貴方は？」

「私はティーダ・ランスターであります。」

ランスター…？ティアナの兄か…死ぬんだっけか？

「じゃあランスターさん、なんのようですか？」

「…合流した隊員数名が勝手な判断で突入したので私に追いかける許可を…」

……久々にイラッとした。どうせ指揮官の俺が餓鬼だからとかそんな理由だらう。

「全員突入準備。包囲するつもりだつたんだが、余計なことを。」  
キャリースロウをファルシオン形態で構え防護壁に向かう。物資搬入のための扉、力ずくで開けられないようにするために厚くしたのだろう。

「いけるよな？キャリースロウ。」

『当然！主よ、遠慮なく斬つてください。』

キャリースロウも遠慮なくと言つていいので思い切りよくやう。

「ハアツ！」

ズンッ……鈍い音をたてて扉が斜めに切れた。

「ハイエンド…チャージ開始。」

『了解です。力ナ工様。』

俺は啞然とする局の武装隊の前でキャリースロウを天に掲げる。

「突入！」

開いた扉に向かつて声高々に宣言する。

「お……おおおお！」

作戦開始つ！

海鳴公園海上。

「ジュークエルシードを賭けて一対一の勝負。フュージャーちゃん、それでいいよね？」

レイジングハートの調子も私自身の調子も好調。フュージャーちゃんも前に比べて冷静になっている。

「うん。それでいい、母さんもやうじゅうって言つてた。私が…」

「つー？」

「いなくなつた！？ううう、これは…

「勝つー！」

『Flash move!』

後ろに回つてきたフュージャーちゃんと距離をとる。こじて同じの前より速いの…

「私も負けられないの…そして、お話を聞かせて。」

レイジングハートを構える。今からやることは高速戦が得意なフュージャーちゃんだからこそ有効な技。心ちゃんは相手が速いなうううという作戦をくれていた。

『Sonic move!』

フュージャーちゃんの姿が搔き消えるくらいの速さでフュージャーちゃんが動いた。でも…

『Air bomb.』

その場で回転しながらレイジングハートを回す。数十の桃色の光

の球が私の周りで停滞した。

「つーー？機雷みたいにしたみたいだね…」

フェイトちゃんは動きを止めて私から距離を取った。

「でも、それだと君も動けない。」

『Thunder...』

「させないつ！ディバーン！」

『Buster!』

私の魔法が先に発動してフェイトちゃんに向かう。でも、それを見届けるより先に私は次の攻撃を仕掛けた。

「後ろだ…えつ！？」

フェイトちゃんが後ろに現れたと同時に私も背後を向いて動く。フェイトちゃんの姿は確認していないけど…

「スター・ライト…」

振り向きながらのチャージ。私が振り向き終わった時、フェイトちゃんは…

「えつーー？ちよつと…それは…」

私が私の背後に仕掛けっていたバインドに捕まっていた。

「ブレイカアアアアー！！」

「きやああああつ！？」

フェイトちゃんは私に近づこうとしていたのでほぼゼロ距離で私のスター・ライトブレイカーを受けて海に落ちていった。

「さあ、観念するんだな。」

俺は武装局員数名と一緒に組織の首領と思われる男にキャリースロウを向けていた。

「お前みたいなガキが隊長か？」

男は魔導師だつたようじにストレージデバイスを向けていた。

「そうだな。指揮権は俺にある。」

俺がそいつた途端男は嫌な笑みを浮かべた。

男は俺の周りに居る局員数名を見てさらに笑みを深めた。

「残念だつたな。ガキが隊長で…おい…反撃だつ！」

バンッと勢いよく背後のドアが開く。

「兄様、全員捕縛完了です。」

背後のドアから現れたのは心一人。他の誰かが現れる気配はなかった。

「で？ 反撃は？」

俺は軽く笑みを浮かべて男を見る。

もちろん、反撃されることはわかっていたので心に先に押さえておいてもらつたのだ。だから、もう誰も俺を止めることはできない。

「ク…ツソがーつ！」

叫びと共にデバイスに収束する魔力。恐らく砲撃魔法であつたそれを…

「遅いよ… キャリースロウ 第2形態！」

『了解。』

キャリースロウをファルシオン型に変形させ男に近づく。

「フォトン……」

男のデバイスから光が溢れるが、部屋内という狭い空間では砲撃より接近戦のほうが速い。俺は既にキャリースロウを下段から逆袈裟に向かつて振つている。

「おつと、手が滑つた。」

最初に聞こえた音はガキンという金属同士が触れる音。次に聞こえたのが…

「ぐ……あああああああ！……？」

ズブリと、肉を断つ音だ。

カラーン、男の持つていたデバイスが真つ二つにわかれて軽い音で地面に落ちる。そして、ズシャツと男の両腕が地面に落ちた。

「すみません。ミスりました。……ちなみに今回の作戦、貴方達の反撃が怖かったので治療が可能な魔導師はとても後ろに居るので治療は諦めてください。」

「こやかに言つてみる。そして俺が言いたい」とはまだ残つているのだ。

「ともかく、これで終わりです。貴方みたいなのが束になつても俺には敵わないですし……さ、連れて行きましょうか。」

「ふ……ふざけるなああああ……！」

両腕のない男が無防備に体当たりを仕掛けてくる。

「おつと。」

俺は軽くそれを避ける。と男はそのままの勢いで部屋を出て行った。

「カナ工執務官！！追いましょう！」

ティーダ・ランスターの叫びと共に地面が揺れ始めた。

「兄様…どうやら皆わん、自爆して我々と共に屠る気のようですね。

」  
無表情に…ただし、俺にはテキトーに言つてこるよりこしか見え  
ない顔で心が報告した。

「な！？」

「どうするんだ！？」

慌て始める武装隊の面々。ティーダは比較的に見れば落ち着いて  
いるようだが…

「ふむ、生き埋めは嫌ですね。皆わん、脱出しまじょう。ハイエンド、チャージ準備オーケー？」

『はい。準備完了です。』

俺は部屋の壁に向けてハイエンドを構える。

「我が行く手を遮るものに」

『鉄槌を』

「この世界の真理は

『死へと繋がる。』

詠唱と同時にハイエンドに暴力的な灰色の魔力が収束する。

「？」  
『？？？』

俺とハイエンドの言葉でハイエンドから魔力が放たれる。

「さて、まあ…脱出用の大穴も開きましたし…全員、脱出してくだ  
れこ。」

白々しいかもしれないが言つしきない。とこゝが白々しきのは自分でも理解しているので皆さんその辺はやめてください。

「アーマーと顔を起てて崩れていく建物から俺達局員は脱出した。

さて、俺は今回本局に呼ばれるんだろつなかつた。

Side キョウスケ

俺達は今、アースラの医務室にいる。

「……………フロイトは起きないのか？」

なのはとフロイトの鬭いはなのはの勝ちだったのだが……

「うう……………フロイトちゃん…おはなし…」

「おこ、口うなのは。お前は自重しろ。」

言つたもののはは未だに唸つてゐる。

「なのは、君は全力戦鬪だからといつて手加減無しの一撃を零距離で撃つて相手の心配を……」

「え？でも、心ちゃんがやるなら徹底的に……」

「心ちゃんのせいかよ……」

変な所で原作ブレイクする奴らだなあ……

「あ、あの子か……」

クロノも思わず苦笑いを浮かべた。しかし、俺は心ちゃんに一つ聞いたことがあるのでさらなる恐怖を知つてゐる。

「純粹な殺しあいになれば私は兄様の足元にも及びません。」

つまり、本気の力ナエは俺達では手も足も出ないところになつてしまつ。

まあ、その後

「とはいえ、兄様がキヨウスケさんに本気を出すときは私たちが貴方たち《・・》の敵になるときでしうから、安心してください。」  
なんて言つていたし、まず見ることはないだろ。

「とりあえず。これから僕たちはプレシア・テスタロッサの逮捕の準備を行うから、それまでにフェイトが起きるなら連絡してくれ。く・れ・ぐ・れ・もキヨウスケは勝手な動きをしないでくれよ？」  
なんかクロノにでっかい釘を刺されたような気がする。

そしてそれは当たつていた。上手く、プレシアを逃がせないかと  
考えていたんだけど…

「というか、あれ？ なんでプレシアの逮捕？ 場所わかつてゐるのか？」  
確かプレシアの居場所は次元跳躍魔法を使ってわかつたはずな  
に…

「なにか魔法を使つたんぢゃないのかな？」

「なのはがピヨコーンとアホ毛を揺らす。というかのは、自分も  
魔導師なのにそんな魔法はないつて氣付かないのか？」

「なのは… そんな魔法があれば僕たちはフェイトを捕まえるのに苦  
労はしていなじゅないのかな？」

「あ… 居たの？ コーノくん…？」

「ヒドッ！？ なのはひどいよつ！ キヨウスケもそう思わないか！？」

必死になのはの肩から声をかけてくる動物コーノ。しかし…まあ…

「ごめん。居たんだ、コーノ…」

「なつ…？」

がつくり地面に膝を着けるユーノ。いや、膝つてビニ~つて感じ  
だけど。

そうして、たつた数時間で準備が終わつたようでクロノから俺に  
時の庭園への突入作戦に参加するかどうかという質問が来た。

## 第8話 「それぞれの決戦」（後書き）

キヨウスケ「クロノって強かつたんだな……って誰もいない！？くそ…目立つたのがいけなかつたのか！？…あれ書置き？次回第9話はすぐに投稿する？…あ、だからダレもいないのか。」

## 第9話 決着～永遠の炎～（前書き）

連続投稿です。そして、自分ではスランプだと思っていたのですが…この状態で進んで大丈夫なのだろうか？心配です。…え？元から駄文？しかも亀？

その通りです。申し訳ございません…！

## 第9話 決着～永遠の炎～

Side キョウスケ

「突入するぞ！」

俺の号令でアースラの武装隊数人が時の庭園に入つていいく。しかし、何かがおかしい。

あまりに、静か過ぎる？

Side プレシア

私が、フェイトに頼んでジュエルシーード集めを始めてから暫くの時間が経つた。でも、もう体は間に合わない。なら、せめて、フェイトに罪はなくなるように、一芝居しなくてはいけない。

「ふう、全く…何で私はこうなるまで病院に行かなかつたのかしら？」

確かに、私はしなくてはいけないことが

「何で私は病院にいかなかつたのかしら。ま、どうでもいいわ。」

私は私の病を治すために一人娘のフェイトを利用した。そういう

設定が必要なのだ。

「ちょうど、フェイトもあちらにいるようだし、侵入して来たら始めましょうか。」

ああ、そうだ。アリシアの居たところを口ワサナクチャ。

### Side カナエ

「……はあ、あの時の動きは早計だつたか……いや、キヨウスケが居ながら気付けなかつた俺が馬鹿なだけか……」

俺は碎けたケースと内側にあつた脳みそを見てため息をついた。  
「根回しが間に合えばいいけど……間に合わなかつたら……素直に怨まれよう。」

「兄様が怨まれる必要はありません。私が居ます……なんとか、なんとかハッピーエンドにしてみせます。」

通信していた心から頼もしい声が入る。

俺は新しい脳みそをケースの中にいれハマーンの杖でガラスケースを修復した。

「さて、あとは高町なのは、フェイト・テスター・アリシア、心、キヨウスケ次第か……」

自分は手をだせない。アリシアに手を出すなどいわれたから。だけど、アリシアが俺の手が必要といった時は全力で手を貸そう。

「さあ、未来への布石を用意しよう。」

まずはギル・グレアムからだ。

Side なのは

「ディバイーン…バスターッ！」

迫り来るゴーレムを破壊していく。時の庭園が一度大きく揺れたあと、ゴーレムがいっぱいしてきた。

!

۱۰۷

「あー、アースラの皆さん、聞こえるかしら？今、そちらにフェイト…人形がいるわよね？起きているかしら？…………まあ、起きていなくても変わらないわ。貴方はアリシアの代わり、人形よ。クローネ技術によつて生み出された。私の娘ではないわ。」

「ああ、そういうえば……貴方の使い魔はすでにこの世にいないわ。」

「ああ、そういうれば…貴方の使い魔はすでに此の世にいないわ。」  
その言葉を聞いた瞬間、自分達が取り返しのつかないことをした  
のだと気付いた。

ブレシアに挑んで大怪我したアルフは誰が助けた?  
アリサ・バニングスだ。そのアリサは、どこにいる?

「クソッ！」

全ては、手遅れだ。

『主人様…！敵です…』

見ると正面から3体のゴーレムが近づいていた。

「ブレードトンファーを！」

ネクロが俺の言葉に応えてブレードトンファーを出現させる。

「爆碎一閃！」

ブレードトンファーを使いゴーレムを碎いて倒していく。

しかし…

「ぐつ、こんな小さい攻撃じゃあ倒しきれないのか…退けえつ！」  
自動修復するゴーレムに更に苛烈に攻撃をするが再生速度が異常  
だ。これではまるでロストロギア…！？

「まさか、ジュエルシード…なのか？」

そうなると、一気にジュエルシードを封印状態までもつていいける  
くらいの威力がいる。

「ディバインバスター…」

声と共に銀色に輝く魔力光がゴーレムを消し飛ばした。

「…銀つて事は…心ちゃんか…」

近くに俺が居るのに何の躊躇いもない一撃に思わず感心してしま  
う。

「チツ……」

「えつーー・咄打ちつーー・咄打つる『だつたのーー』」

心ちやんは暫く何かを思案した後こちらを見て

「冗談ですよ。」晴れやかな笑みを浮かべた。

「なのはちやんに連絡を、プレシアを発見したら貴方に連絡するよ  
うこと。」

「わかった。って、オイー・心ちやんは…！」

気付いたときこは既に奥に進んでいた心ちやん。仕方ないか…

「なのは、うよつとお願いがあるんだけど…」

話しながら心ちやんを追う。ジコヘルシードを使ったゴーレムが  
相手なのだ。心ちやんでも心配になる。

Side なのは

フロイドちやんのお母さんの所へ向かっていく。キョウスケくん  
が見つけたら教えてつて言つてこいたけど…

『Masterー』  
レイジングハートの声で初めて前に「ゴーレムがいる」と心付いた。  
「つー・ディバイーン…」  
『Busterー』

「ディバインバスターが『ゴーレムを撃ち抜いた。でも……後ろにも居る……』

振り向いてプロテクションをしようとして、意味がなくなつた。

「なのは……」

「後ろから近づいて来ていた『ゴーレムの拳を緑色の膜が防いだからだ。』

「あ、ありがとう! ユーノくん……ちょっと、多すぎるね……」

管理局の人達を合わせてもまだ相手の『ゴーレムの方が多い。

「なのは、上っ!」

「ディバイン」

『Buster!』

「なんで、こんなにいっぱい……ってあれ? ディバインバスターが天井を貫いて……?」

「バキッ!」

「天井が……抜ける?」

「マズイ……逃げよう、なのは……」

逃げようとして……

「ううう……」

動けなくなつた管理局の人を見つけた。

「あ……」

タスケナクチャ。

体が動く。

(速く……速くつ……)

「ゼロシフトッ! ……」

天井が崩れた。

## Side フライト

「ねえ、フライト。」

声がする。アルフ……？「うん、違う。でも、なんだか懐かしい感じがする。

「お母さんを助けなくていいの？」

（でも、母さんは私のことを……）

「……諦めるんだ。フライトが諦めないなら、私たちも助けるのを手伝つつもりだつたのに。」

（え？）

「私は諦めた。でも……フライトのことを助けてあげたいから、私は……」

（私は……私は……諦めたくない。諦めたくないんだ。）

「声を出して。求めれば、私はそこにいるし、お兄さんだつて、キヨウスケさんだつて、なのはちゃんとだつている。」

「……私は……私は……助けたい。母さんを……」

体に力をいれる。体は動く、田だつて開く。体が痛いのなんて全然平氣だ。あの子の魔法の方が痛かつた。

「じゃあ、行こう。例え、どんな結果にならうとも……助けようとしたことに意味はあると思つから。」

「待つて！あなたは……」

ベッドから起き上がりつて見えたのは金……まさか……

「いくわよ、バルディッシュユスター。」

『A 11 right my mother.』

金が跳ねる。

私は足に力を入れベッドから立ち上がりバルディッシュユに近づく。  
「私たちも、行こう。……バルディッシュユ……」

『Yes, Let's go!』

「ごめんね。もう、私は迷わないから。」

輝の入ったバルディッシュユに魔力を込めて輝を直す。

「待つて……母さん」

## Side キヨウスケ

「大丈夫か？なのは……」

間一髪で天井がなのはに降り注ぐ前に救うことが出来た。

「あ、ありがとう……キヨウスケくん……つーあの人は！？」

なのはを抱き抱えている状態から離してなのはの後方を指差す。

「こんばんは、なのはちゃん。」

「え？心ちゃん！？」

心ちゃんが倒れていた局員をラストの鞭で助けていた。

(助けた…んたよな?)

首が絞まつているよつ見えるが…顔も青くなつてゐるし。

「…心ちゃん!…早く離してあげてつ…!…」

なのはにも同じよつに見えていたらしい。なのはは焦つて心ちゃんに言つが心ちゃんはのんびりとしていた。

「ああ、そうですね。どひん」

「ぐぎゅつ…?」

「つまつ…?」

上から心ちゃん、局員、俺である。ちなみに心ちゃんがラストで局員を俺に投げたという状況。

「いくらなんでも酷くないか?」

「私が丁寧に助けるのは兄様達だけです。」

思わず苦笑いを浮かべてしまつ。相変わらずカナエ至上主義のようだがカナエの態度が変わつたからか他の数人にもちゃんと気を配るよつになつてゐるよつだ。

「な、なんで心ちゃんがここに…?」

確かに、カナエに呼ばれてからまだ数時間しか経つていない。

「…兄様の命令ですから。あと、管理局の…なんだつたでしょ

う…?」

カナエ（越えられない壁）友人（越えられない）その他といつわかりやすい図が頭に浮かんだ。といつが、俺は友人に入つてるよな…?

「お兄さん…?」

「もう呼んでいいのは私だけなんだからあつ……！」

『Plasma Smasher!』

なのはがそう言つた瞬間、金の魔力光と砲撃魔法がなのはに向かつて飛んできた。

「ラウンドシールド……！」

慌ててなのはと攻撃の射線に割り込みラウンドシールドを張る。ネクロの能力に頼りすぎて普通の魔法が難になつていてクロノに教えてもらつたのだ。

そして金色の閃光がなのはに突つ込んでくる。わかつていたとは思つけどアリシアちゃんだ。なのははビックリして反応できていない。アリシアちゃんが至近距離でなのはを凄まじく睨んでいるし。

「フフ……フハイイトちやん！？」

「姉ですっ！」

「えっ！？ええっ！？じゃ、じゃあフハイイトちやんのお母さんは……」

一ヤリとアリシアちゃんが笑みを浮かべる。

「無駄骨ですね。ふふ、いいザマね。私の妹に手を出すからよ。フハイイトはお兄さんの次くらいに大切なんだから。兄や姉は妹や弟を護るために居るんだもの、それが……例え親からであつても。」

アリシアちゃんが言いながら心ちゃんを見ていたのは多分、心ちゃんから聞いたのだろう。詳しくは教えていないのだろうがそれでも、カナエが心ちゃんを親から護つたことは知つているはずだ。

でも、自分の親にいいザマつて……しかも自分を生き返らせるための結果だつたのに……

「心ちゃん。お母さんを探しましょ。……ムカつくなど、フハイイトがお母さんを助けたいのなら手を貸さない理由はないから。」

「もうですね。……あ、そういえば白眼を使えばすぐ見つかるんじや

…

「へ？白眼つて…あの？」

俺の問いを無視して心ちゃんが口を開じる。

「見つけた…」

そして次に口を開けたときには口の周りの血管が浮き出でていて、まさに某忍者漫画の白眼だつた。とこつか心ちゃんの能力つていつたい？

「アリシアちゃん、行きますよーー！」

心ちゃんがアリシアに触れるとシュンとこづ音を出して姿が焼き消えた。

「置いて行かれたの…」

「あ…」

2人してその場で固まつていたのは誰も責めれないと思つ。

Side フェイ特

「速く…もつと速く…！」

私は全速力で母さんのところに向かつているんだけど…なんだろう…嫌な予感がする。

「君は……？ 待つんだ！」

後ろから黒いバリアジャケットの男の子が追いかけてくる。確かに、私とあの子の戦いに割つて入つた人だ。

「母さんのところに行くの……邪魔しないで……」

私は振り向きバルディッシュを黒い男の子に向ける。

「違う！ そうじゃない！ 一僕も連れて行つてくれ！ 確認したいことがあるんだ。」

「……っ！ 勝手にして。私は速く行かなくちゃいけない。嫌な予感がするんだ。」

私はそのまま先に母さんが居る部屋に向かっていく。すると、男の子も私に遅れながらもついてきていた。

「こここの動力炉は、フレシアが居るところにあるのか？」

後ろから聞こえてくる声を聞いてさらに嫌な予感が増す。

「ううん、もっと奥。多分中心部だと思つ……」

なんだ？ この嫌な予感は……気持ち悪くなるくらいの……

「やつぱり、ジュエルシードのエネルギーか……それに、やつぱり……誰か居る。」

その言葉に私の思考は一瞬止まつてしまつた。誰か？ 母さん以外にこの時の庭園にいるなんてことは……男の子は管理局の人みたいだから誰かっていうのは管理局の人たち以外だろ。

の人かも知れない、というのも考えたが。私の勘は違つといつている。

そして、母さんのところに向かっていると……

「エネルギーが増大！？しまった…！」

## Side 心

私たちがプレシアのところにつくと見知らぬ男が両刃剣を持って佇んでいた。

「アリ…貴方たち、ダレ？」

プレシアが虚ろな目でアリシアに問う。その姿は、兄様の予想通りで…

「イレギュラーは貴方ですか…管理局執務官、月村 心です。抵抗しなければ命は助けてあげましょ…」

『D i v i n e b u s t e r!』

ラストの分身が私の目の前で宙に浮かび銀色の閃光を放つ。

「管理局…正義とは名ばかりの悪の集団の集まりが…！」  
男は避けるそぶりすら見せずに私に向かって歩いてきて、銀閃に触れた。瞬間、ゾクリと背筋が凍つた。

「ガハッ！？な、なんで…？」

なにが起きたか理解できない。なぜ、男は無傷で、私が倒れて…？

「心ちゃん！？バルディッシュ・バス…」

アリシアちゃんがそこまで言つて倒れる。体に斜めの赤い切り傷につくつて。

「さて、これで…」

男が剣を上に掲げ私のそばに立つ。

（あ、駄目だ…死ぬ。兄様…！…）

回避の方法が思いつかない。こんな痛み…堪えれないわけではな  
いけど…・・それとこれでは話が別。思考が回らない。

ガキン！

男が振り下ろした剣は、私の最も愛する人が刀で受け止めていた。

「てめえ、命の覚悟はいいな？」

私の意識はそこまでで、暗転した。

俺の妹に剣を振り下ろそうとしていた男を睨む。ラストに仕掛けた仕掛けが役に立つたのはいいが…

「てめえ、俺達と同じ転生者だろ？なぜこんな真似を…つー？」  
突然、受け止めていたキャリースロウ」と俺は弾かれる。

「一方通行…いや、なにか…？」  
知っているものと何かが違うと思いながらも第三形態のキャリー  
スロウを構える。

「フ…管理局のしてきたことを知らないわけじゃないだろ？まあ、  
いい。同じ転生者のよしみだ。見逃してやる。生きて帰れるかどうかは…わからんがな！！」

男が何かを投げた。俺はそれを何かと認識する前にアリシアと心  
と一緒にワープでこの場から消えた。

揺れが収まつたあと、田を開けると…

「え？」

時の庭園の半分近くが無くなつていた。ジュエルシードが発動したのは感じた魔力でわかつた。でも…

「母さん…？」

そんなことせざりでもよくて。

「く、僕達より前に言つていた隊員たちはほほ全滅か…キョウウスケとなのには無事か…え？ そつか、コーノが…そつか…」

ダレのせい？ これは、そつこえれば、さつき誰かが居るつて言つてた？ ジャア、そいつのせいいか。

「…ねえ？」

「どうした？」

彼の方でも何かあつたらしい、ナビ。私は聞かなくちゃいけないことがある。

「さつき誰かが居るつて言つたよね？ それでこれは、そいつの仕業？」

「ああ、多分…そつだ。」

「そつか、なら…」

「管理局に入れば、捕まえられるかな？」

例え何年かかるづが、私のこの復讐の火を灯し続けよう。

「心ひやんのお兄さんが上方に顔が利くらしくてな。君が望めば

すぐにも管理局は君を受け入れよう。今回の事件は既に殆ど調べ  
はついているんだ。だから君は罪に問われない。」

永遠に燃える私の炎。開放されるその瞬間まで静かに閉じ込めて  
おこひ。

だから、今は…

目の前が黒く染まつた。

## 第9話 決着～永遠の炎～（後書き）

カナエ「・・・」

心「・・・」  
キョウスケ「・・・え？ なに」の終わり方。ハッピーエンドは？」

カナエ「次回。最終話「なまえをよんで」次回で無印は終了みたいだね。」

イリスヴィア「ま、作者としてはStriker「S」が書いたかつたらしいからちょっと氣分が急いたみたいだよ？」  
なのは「出番は――――――――――――――――――」

## なまえをよん（前書き）

えー……遅くなつた理由はＰＣを修理に出していたからです。  
本当にすいません………といふか、待つてくれた人いるのかな……  
(泣)

## なまえをよんぐ

Side なのは

私たちは今、黒い服を着てアースラの艦のブリッジに居た。

今回の作戦で犠牲になつた隊員や協力者の簡略式ではあるけれど、しつかりとした葬儀だ。

「……なのは……その、ユーノは……」

クロノくんが俯いて私に近づいて來た。ユーノくんは私たちを助けてあの次元震に巻き込まれた。多分、私が落ち込んでいると思っているんだと思う。

「悲しいけど……大丈夫だよクロノくん。……一人になつたら泣いちゃうかもしれないけど……それでも私は立ち止まらない。だつて、お母さんが死んじやつたフェイトちゃんも前に進んでるんだもん。なら、フェイトちゃんと友達になるのを手伝おうとしてくれたユーノくんの思いも無駄にしたくない。」

そうして俯いていたクロノくんの顔が私を見る。クロノくんは驚いたような表情を浮かべている。

「例え……どんな、形でもフェイトちゃんと友達になつて……原因になつた人を逮捕する。……いい? フェイトちゃん?」

「あ……君は、それでいいの?」

背後に立つていたフェイトちゃんに声をかけるとフェイトちゃんは僅かに私を訝しむような顔をしていた。

「私は、今でも悲しそうに笑つフロイトちゃんの友達になりたいの。」

「私は嫌。母さんを殺した犯人を捕まえるのに余計なものはいらない。」

「フロイトちゃんが拒否するのは予想していたので私は苦笑いを浮かべるだけだ。」

「あのねえ……フロイト……」

呆れた声で話しかけて来たのはフロイトちゃんと瓜二つの顔を持つ女の子、アリシア・テスタークロッサちゃん。フロイトちゃんのお姉さん。

「復讐するのはいいけど、普通に修業するだけじゃあこいつには勝てないわよ。アレは強すぎるわ。」

たしか、アリシアちゃんと心ちゃん、そしてそのお兄さんが同時に挑んだらしいけど結果は撤退するのが限界だつたらしく。

心ちゃんの強さは知っているしキョウスケくんは心ちゃんのお兄さんの実力を知っているみたいで、『ありえない』らしい。

「一緒に強くなればいいじゃない。幸い強さは一緒にくらいなんだしへい感じだとと思うけど。」

アリシアちゃんの言うとおり、強くなるにはライバルと友達がいるつてお父さんが言つてこた。

「私と一緒に強くなれりつー！」

私がそういうとフロイトちゃんは少し考えて視線を彷わせた。

「…………これからしばらく、私はミッションに行って訓練する。……また

会ったときに君が私より強いなら…友達になろう。」

そういうふうにアリシアちゃんは真剣な表情で友達にならうといつて表情じゃないけど…今はそれでもいい。

「…フロイト、私はお母さんを助けれなかつた。どう…思つ?」

アリシアちゃんは真つ直ぐフロイトちゃんを見る。

「なんでアリシアが生きているのかはわからぬ。アリシアが生きているなら母さんはあんなことを止めていると想つ。…私はアリシアを…怨んでいる…」

フロイトちゃんの答えを聞いてアリシアちゃんは優しく微笑んだ。

「フロイト、それでいい。あなたは私を怨んで、怨んで…でも、それは私だけに向けなさい。私たちのお兄さんに向けたら…」

優しい表情から一転して寒気のする怖い顔。その表情にフロイトちゃんは一步後ろに足を退いていた。

「殺すから。」

そう言つて残してアリシアちゃんは背を向けて手を振つて去つていつた。

クロノくんやロンドンティさんはアリシアちゃんがなぜ生きているのかを調べるには出来ないとこつていたの。なにやら色々あるひじい。

心ひやんは知つてこるようだつたけれど二つの間にかいなくなつ

ていた。

「なのは。」

いつの間にかキヨウスケくんが横に来ていたらし。

「キヨウスケくん?」

キヨウスケくんは少し緊張した面持ちで私の前に立つていた。私が疑問に思うとキヨウスケくんは僅かに躊躇つた後口を開いた。

「俺をなのはの家に置いてくれないか?」

「ふえっ!?

キヨウスケくんが…私の家に…?駄目だ。絶対に…絶対に私が一瞬思い付いた理由じやないのに顔が赤くなるのを止められない。どうか、私はこんな状況で何を考えて…いや、待つて…私がキヨウスケくんを好きみたいじや…好き…なの?うん、好きだけど…え?ドキドキしてん好き!?

「あ…あう…キヨウスケくん。なんで?」

恥ずかしいので少し俯き田で聞いてしまひ。うう…顔がちゃんと見れないよ…

「なのはのお父さんやお兄さん修業をつけてもらいたいんだ。それも、なるべく多く。」

「うう…わかったの。聞いてみる。」

わかつてたの…でも、勘違いしてすぐ恥ずかしいの…  
「うう…わかったの。聞いてみる。」  
キヨウスケくんの馬鹿あ…

今回の事件は被害が多すぎた……コーノやアルフだけじゃなくとも  
しかしたら死ななくて良かつた同僚も死んでるかもしれない。……  
…それをカナエに言つたら顔を責めさせていたけど…なんだろう?

「もつと強く……この世界はアーメジじゃない……もしかしたらな  
はもフェイトも死ぬかもしれないから……」

そのためには苦手な接近戦を鍛える必要もある。それなら高町家  
が一番なはずだ。

「ねえ、君は前に私を知つているような事を言つてたよね?…なんで  
?」

赤くなりながら顔を俯かせているのはの横からフェイトが話し  
かけてきた。いつのことかは忘れたが確かに言つていたかもしれな  
い。

「俺の友達がレアスキル持ちでね。薄く未来が見えるらしくて今回  
の事件も断片的に見えていたらしい。」

という設定を通してほしいと言つていたのをカナエは言つていた。

「そう……その人は強い?」

「…………あいつが言つたのは俺と同じくらいの強さらしいが……」

前やつたときはデバイス無しだったしな………といふか最初に会  
つた時より凄まじく強くなっているんだが…成長速度が化け物じみ  
てる……

「やつ……!!」

「…………こんけど……とこつかアリシアが“お兄さん”って呼んでる

奴だぞ。」

それを聞いたのかなのはも俺の顔を見た。

「そういえばどうこう人か知らないの。」  
「何て言えばいいんだ？」

「うーん……一言でいうのは難しいな。見た目は女みたいだけれど……  
中身は……あれ？ 仲間思いでいいのか？」

誰かのために戦う。それは意外と難しいと思つ。あいつは仲間の範囲が狭いがそれはあいつの。護れる範囲と「ホールド」もいえる。

「アリシアのお兄さんって心のお兄さんでもあるんだよね？」  
フロイトの問いに俺は頷く。

「じゃあ、私に紹介して。強くなるため」  
「……それはマズイ。どうするやつ……

「……無理かな。あいつは前線にいるよ」だから余つひとは出来ない  
と思つ。」

そう、あいつは今も次に備えてこるはずだ。だから……

Side カナエ

「お兄ちゃん！ 心ちゃんがつーまた電子レンジ爆破したあつー！」

「お、お兄さんっ！こっちの再生遅滞プログラムバグつてるっ！」  
「兄様あああ！私は…私はいらない子なんですっ！兄様の為の料理も出来ないなんてっ！」

妹たち大暴走。最近俺が沈んでいたから元気づけようとしてくれているのはわかるんだけど…何て言うか。空回りしてる。

「ははは。アンタも大変ね。で？どうなの？証明できた？」  
俺の隣にいるアリサだけが冷静だ。俺の考えている問題の証明をするために一緒になつて考えてくれているのだ。

「うん。やつぱり、この世界はおかしい。もちろん、おかしいのは俺たち転生者なんだけれど。それにしたつてこの1対1の法則はおかしいと思う。」

そう、俺と心は互いに転生者であることを皆（月村家とアリサ）に伝えた。もちろん驚かれたし“リリカルなのは”の話をした時、アリサはぶちギレた。ただし、それは俺が今までアリサたちに対しついていた無意識の遠慮についてだつたし説教までされてしまった。でも、まあ最近は遠慮が少なくなつていたので軽めだつたが。

全てを明かしてまで解きたかった問題。それは…

「アリシアの蘇生とアルフの死亡。コーノの死亡」と……  
ちらりと、月村邸の庭で遊んでいる兄妹を見る。

「ティーダ・ランスターの生存。そして、フェニックス壊滅時に生存したティーダ除く、27名の管理局員と…」

「時の庭園で死亡したユーノ除く27名の管理局員。」

そう、これは多分、転生者にしかわからない問題だ。生存するはずない人間の生存。そして死亡するはずない人間の死亡。そしてこれは生存者を作った時点で発生する法則のようだ。フュニックスの構成員は全て死亡している。

偶然なら馬鹿げている。だが、偶然で終わらせるには……無視できない。

「そして、奴は転生者じゃない。言動に僅かに惑わされたけど……」  
…恐らく 選別者。」

神が転生者に課した試練とも言えるかも知れない。

そして、俺の解答は決まっている。それには皆に力を借りる必要がある。

「アリサ、アリシア、心、すずか……俺を、助けてくれ。  
名前を呼んだ。

なまえをよんと（後書き）

カナエ「ええと…最終話？」

イリスヴィア「無印ね。」

なのは「え…え…？」

イリスヴィア「次から本氣出す」

アリサ「フザケンナ」

カナエ「しかし、まあ…」

心「ザックリとこきましたね…？」

カナエ「まあ、無事終わって良かつたじゃないか？」

イリスヴィア「ふ…じ？」

ティーダ「あれ？俺の死亡って確かstriker-56年前じゃ…」

カナエ「うん。まあ、それは機会があれば…？かな？では、次はA-sで会いましょう！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5152m/>

---

魔法少女リリカルなのは チート？当然だろう

2011年7月8日09時19分発行